
クリア

春日戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリア

【Nコード】

N3721S

【作者名】

春日戸

【あらすじ】

いつも通り。そんな日々が、ある男の子と目が合ったことで、変わっていった。変わりはじめはダメ。でも、変わっていった。

いつもの日常

町全体はまだ自然漂うけれど、今時の文化を詰め込んだように、スーパーやゲームセンター、コンビニ、デパートなど様々な建物がある。

都会？と聞かれれば田舎かなあっと答えてしまうくらいの町並だ。真正面は「寺島さんの家」、道路の左側には「天国と地獄の坂」。右側には「普通の直線道路」という立地に引越して早4ヶ月、右側が学校で本当に良かったと心の底から感謝している大原^{おおはら} 沙代^{さよ} 6歳です。

引越して来た理由は単純にこの地域に親の仕事先が決まったからだ。簡単にいえば飛ばされたのかな？いや、あまり触れないでおこつ…。

授業又は学校が終わった今は、たった4ヶ月で引越す前の田舎の家と、同じような雰囲気醸し出す自宅だ。薄紅色の瓦が目立つ昔ながらの木造住宅。縁側にはお母さん自慢のガーデニングのいくつかが誇らしげに咲いている。私は背を伸ばしてのんびり5時前まで風鈴の音色を聞きながら縁側でごろごろしている。

制服は多く見られる白色のカッターに小さなネクタイ、それと腕のところに1本の青い線が入っている。スカートは紺色に近く、長さは膝が隠れるか隠れないあたりまでだ。夏用だからまだ涼しいが、やっぱり暑苦しいから帰宅すると人目を気にせず脱ぎさり、お気に入りの私服（半袖の淡い黄色の下地に胸元に水色の小さなロゴ入り茶色の短パン）に着替え、今こつやって畳の上で窓越しに夕焼けを眺めて麦茶を飲んでいる。

「はあ…学校は暑いのに、どーして帰って来たら涼しいのかなあ」
「沙代、あんたねえ制服ほつたらかして何のんびりしてんの。片付

けてからにしないで」

素朴な疑問に一切触れず、文句を言ってきたのはお母さんだ。私と同じ黒色のセミロングの髪にちよつとパツチリした目。遣伝子流しすぎなほど似ているお母さん（40）だ。

「いいじゃんーこれからバイトなんだし、ゆつくりしたって」

「関係ないしあんたから行きたいって言ったんでしょ。他の事を疎かにしていいなんて言ってますん」

「お小遣いを今の5倍にしてくれたら私はちゃんと制服くらい直すの…」

「一万円をお小遣いにしたら家計が火の車よ。乗ってみたいなら上げるけどね」

「うあつ聞きたくない家計事情…あつバイト行ってきます」

「あらもう4時50分なのね…おかしいわねー？ 時計の針は朝の番組で出てくる時刻と合わしているから正確なんだけど？」

「……片付ければいいいでしょ」

「私は最初から言つたつもりだけど、ほら早くしなさいよ。バイト、今日も5時からでしょ。後15分よ」

正確な居間の丸い掛け時計を見て母は急かすが、私にそれは効かない。

「別に毎回50分に出るけど着いたら53分くらいなんだよ。早く着きすぎて暇なの」

「準備があるでしょ、普通は5分前に入るのが一般的なのよ？」

今日はえらく厳しい言葉をくれる。

多分、晩御飯時に私がいけないことが最近続いているからちよつと寂しくなってるのかな？お父さんは帰ってくるの結構遅いし。もちろん仕事で。

「…明日はバイトないから晩御飯いるからね」

「??? いきなり何言ってるの、さつさと片付けてきなさい」

「はい」

ああ言ってるけど多分うれしいはず…とか、二階の自室で制服を

クローゼットにしまいながら考えているとあることに気付いた。

「あつ靴下も脱ぎっぱなしだった……。ま、いつかあ……」

クローゼットに置いてある白の短い靴下を取り出して履こうとしていると、下からお母さんの呼び声が。

「もう50分よー」

「分かってるー」

ドタドタと騒がし音を立ててから靴を履き、横スライド式の木製玄関をガラツと開けると、奥から「いつてらっしやい」と聞こえたので「いつてきまーす」と返した。

玄関から左に置いてある銀色の3段変速のノーマルな自転車に乗り込み、天国の坂道を駆け降りていく。

シャーっつと車輻の音が涼しさを醸しだす。自転車は全くペダルを漕がずして30キロ以上のスピードを維持して走る。右手（東）にはコンクリートの壁、その奥に佇む自然。左手（西）にはガードレールと歩道、さらに奥にはため池の揃う坂道。

天国と地獄の坂：それは700mに及ぶ平均傾斜25度ほどが続く長い坂道だ。起伏はほぼ無く、真つすぐと錯覚するほどのゆつたりした左カーブが続いているだけで、下るのは天国のように楽だ。と上る時は地獄のようにしんどい坂だ。

それが由来というか勝手に名付けられている。

「ひゃー！ すっずしいー！」

下り坂の時は何故かテンションが上がってしまう。テンションの上があった私はまるで飛行機の如く両足を開き、坂を駆け降りていくと、

「!？」

右側に現れた自転車を押して坂を上っている青年と目が合ってしまった。

青年は驚いた目で私を上から下へと追っている……。しかも止まっ

て。その間、姿勢を普通の自転車スタイルにぎこちなく戻している私は顔が真っ赤だ。

(げー見られたあ…こういう姿見られた事なかったのに…) 半分涙目で視線を恥ずかしい一面を見た目撃者に向けると、さらに驚いた顔をしていた。私はそれよりも坂をものすごいスピードで駆け降りてくる赤いポルシェが気になったけど。

コンクリートの壁側は歩道がなく、車とかが来ると結構危なっかしい場所だから、青年、轢かれなきゃいいけど。とか考えているとポルシェは横を過ぎ去り青年は見えなくなっていた。

「あれっ…そういえば見た事ある顔だったなあ」

落ちて着いて青年の顔を思い出そうとするが何分一瞬の出来事なので、記憶にはばやけたようにしか青年の顔は残っていない。

「…思い出せないからいつかー」
ポジティブよりも終わった事はどうでもいい性格なのかもしれない。

ガチャンと自転車の鍵を閉め、坂を下りてすぐの店の裏口から入りタイムカードを入れてから着替え、私のバイトは始まる。

時給700円のコンビニエンスストアのバイトが…!

「あの子ったら靴下脱ぎっぱなし…ホント抜けてるわねえ」

母親は呆れた顔で娘の靴下を拾いあげ、洗濯機の中へ導いていた。

「だあああ！ だるい！」

カラカラカラとゆっくりしたテンポで車輻は音を立てる。現在の時刻は10時過ぎだろう。バイトが終わった私は今、地獄の坂と格闘中だ。

自転車のライトの原動力は限りなく0に近く、チ力チ力と点滅をしている。街頭がなければまるで大きな蛍のように他人からは見えなくなるかもしれない。

「バイトよりもだるい坂なんて…毎回走ってるんだから…平べったくなってもいいのに…」

どんどん前傾姿勢になるのは頂上に聳える我が家に近いからだ。

頂上付近50Mは傾斜がきつくなり、650Mの坂を上って来た足にトドメを刺しにくる。

「くうううううっしょおおああああ！」

気合いで乗り越え、平たい地面を20分近くかけてようやく感じ取り、我が家へと帰宅する。

「た、ただいまぁ…」

「おっ。おかえり、って…えらいしんどそうだな。風呂沸いてるから汗流しておいで」

お出迎えプラス気遣いをくれたのは優しいお父さん(41)だ。

ひよろつとした体つきで、いかにも頼りない感じだけど本当に頼りなくて、仕事もあまり出世しない販売員…と、この話にはあまり触れないでおこう。でも、私はお父さんを尊敬している。お父さんは間違った事はちゃんと正そうとする人だから。

「お父さんはお風呂入ったの？」

「いや？ まだだけど沙代のほうが疲れているみたいだし、父さんは後でいいよ」

本当は自分の方が疲れているくせに、いつも気遣ってくれる。

お母さんがリビング側から顔を出してきた。

「あなた、ご飯用意できたわよ。あら、沙代おかえんなさい」

「あっただいま…って、今からお父さんご飯!？」

「ああ…父さんもさつき帰って来たところなんだよ」

「あなた、冷めるわよ」

「冷めないさ、君の温もりでね」

「……電子レンジさんは温かいものね。あっ沙代、汗だくじゃない

お風呂入ってきなさい」

「うん…入ってくる」

「ボケてみたのに…あと電子レンジさん自身は冷たいよ!」

「はいはい、あなたの愛はよく伝わっているわよ」

「はいはいって呆れた物言いとひらひら手をバタつかせてから愛という大事な言葉は出しちゃだめだろ!」

お父さんはよくボケたがるが、お母さんはそれをことごとく見事にかわす。

さりげないこのやり取りが大好きだ。

「お風呂入ってこよ」

いつもの学校

ちゅんちゅんちゅん

雀の鳴き声とともに私は起床する。

私の部屋は淡い黄色がメインでカーテンの色がそれを物語っている。入ってくる日光を淡い黄色のカーテンが吸い込み、部屋をさらに淡い黄色に染める。

時刻は6時半ほどだが、目覚ましをセットせずとも雀さんが代わりに鳴いてくれて目が覚める。学校の疲れとバイトの疲れと坂の疲れによって、帰宅してお風呂に入っただけで寝てしまったため、11時寝という良い子な時間に寝るためか、朝は比較的早くなくなってしま

少々の欠伸を交えながら洗面台に行き顔を洗い、歯を磨き、寝癖で跳ねた髪をいつものようにクシで梳かす。これらが終わる頃にお母さんの目覚ましが始まり、5分後には母が洗面台を陣取るのだ。私はその間に制服に着替え、今日使う教科書を確認してから教科書を黒い学校指定鞆の中に入れる。本当は学校に置き勉強したいのだけれど、母が言った。

「置き勉強したら教科書代、全部あなたのお小遣いから消えるわよ……と。」

そうしているとお母さんが洗面台に行く前にセットした食パンが、こんがり焼き目をつけて出来上がる。チンツという電子音と共に漂う焼きたての匂いに釣られて、二階の自室から颯爽と降りて食卓に並ぶ。

私はジャム派なのでジャムを食パンに塗っていると、お父さんが食卓に参加する。

お父さんは低血圧のせいか、朝はいつもフラフラしながら「おはようはっよー」と言ってくる。意味は始めの4文字で十分なのに。

「あなたね、沙代が真似したらどうするの」

「いや、真似しないよ」

手を顔の前でブンブンと振り、精一杯否定する。

「父さんは何も真似して欲しくていってるんじゃないよ。許可なく使っていていいけどね」

「だから使わないって…」

「そうか…」

さくつとジャムを塗った食パンをかじる。かじり終えるあたりでお母さんから透明なコップに入った牛乳が横から出されてくる。

「ありがとう」

「ん、あつそういえばあなた、今日はいつ頃帰ってくるの?」

「ん? そうだな…今日は7時ごろになりそうかな」

「そう、じゃあ夕飯は7時ごろに食べましょうか」

「じゃあ私6時くらいまで友達と遊んでこよっかなあ」

「7時過ぎたら用意は沙代でやりなさいよ」

「気をつけます…」

はははっとお父さんが笑う。朝、それは和やかな家庭に生まれたなあと思う私の好きな時間だ。

朝ごはんも食べ、少しばかりできる時間の余裕を自室のベッドの上で過ごす。そうこうしていると登校時間の7時40分がやってきて、私は自宅から出て行く。

昨日はなかった黒色の軽自動車が発着を出て左の駐車スペースにドンと圧迫感があるように入っている。これは大原家の唯一の自動車だ。主にお父さんの仕事の交通手段として使われているため、お母さんは右側の普通の直線道路沿いを進んだところにあるスーパーに、徒歩で買出しをしにいつている。自転車も私が学校とバイトへ

の交通手段として使用しているため、お母さんの足はないのだ。しかしスパーは近場にあるため、お母さん自身あまり困っていないようだ。

ガチャンと自転車の左側にある1本の棒みたいなスタンドを上げて自転車に乗り込み、自宅を出て右側の普通の直線道路から18分ほどかかる学校へと向かう。

夏にも関わらず朝の風はいつもより涼しく、自転車を漕ぐ度に風が肌に当たり気持ちよくなる。

途中の交差点の信号に捕まっていると、横から私を呼ぶ聞き慣れた声が聞こえてきた。

「おはよーさっちー」

「あ、おはよートト」

【さっちー】とは私の友達間でのあだ名だ。主に同じ組の女の子同士での。沙代ちゃんが短くなって、さっちーとなった。あまり好きではない呼び名だけど…。

【トト】と、私が呼んだ友達の本名は豊田とよだ 徹子てっこさんだ。とよだてつこなので「豊田さん」と呼んでいたら、よそよそしいからやめて〜と言われ。「てつこちゃん」と呼べば、自分の名前好きじゃないからやめて〜と言われ。じゃあなんて呼べばいいんだろうと考えていると、同じ組の子から「トト」と呼ばれていたため、その呼び名を使わせてもらっている。豊田の「と」と徹子の徹が「と」おる」と読めるため、その「と」からきてトトになったらしい。

徹子という堅い名前の割に性格は穏やかでのほほんとしている。柔らかな顔立ちで、微笑みがとても似合っていて可愛い。彼女のほほんとした雰囲気飲み込まれれば、顔を弛緩させることこと必至だ。

「さっちーはいつも早いね」

「トトも同じ時間帯に登校してるから早いじゃん」
シャーっと4つの車輪の音が混じり合いながら同じ方向へと向かっている。

「そういえばさっちは国語の宿題やってきた〜？」

「え？ 宿題って？」

「ほら、好きな四文字熟語を4つ調べてくるやつ〜」

「……日進月歩、無我夢中、大同小異、んと……団栗の背くらべ」

「やってきてないんだね……3つ上げてたけど意味知らないでしょ」

「し、しってるよぉーおりゃああって何かに取り組むことが無我夢中で……えっと……うん」

「学校着いたら宿題しよつか〜」

「トトもやってきてないの？」

「ううん？ さっちーのためだよ〜」

ちよつとその言葉が照れくさかった。

自転車のハンドルから片手を離してぽりぽりと頬を掻いて、感謝を込めて言う。

「あー…ありがとう」

「どういたしまして〜」

ニッコリとトトは微笑んでくれた。

自転車に乗りながら会話をしていると都会？と聞かれれば田舎と答えてしまうような背景がどんどんと流れていき、少し小さな目の学校が姿を現してきた。

「おう、早いな。おはようさん」

「おはようございまーす」

体育の先生らしき赤色ジャージ姿の人が校門前に仁王立ちで、登校する生徒をお迎えしていた。らしき、というのはまだこの学校に入学して3ヶ月ほどなので教員のほとんどを把握していないからだ。

トトと同タイミングで挨拶をして校門をくぐり、右奥に設置されている屋根付きの駐輪所に自転車を適当に置いて、話しながら自分の教室へと向かう。

この学校では1階が職員室や放送室などの特別な部屋が設置されている。2階からが学生の教室が設置されており、2階が3年生・3階が2年生・4階が1年生だ。そのため、登校時は毎回4階まで足を使って上がらないといけない。なかなかの重労働だ。

ガラガラつと1年2組の教室を開けるとそこにはどこの学校でも見かける木製の机と椅子、教卓と黒板があり、窓から朝日がさんさんと降り注いでいた。

「まだ誰もきてないね」

「8時かあーちよつと早かったかなーいつもは2、3人いるのに」
お互い会話を教室内でしながら、学校指定の黒いカバンを指定された席へと置きに行く。

私の席は窓際最後尾！最高の席を獲得した私はいつも窓からこの町の風景を堪能できる。トトは7列ある席の中のちよつと中央の席の後ろから2番目で、私の席から右へ視線を移動させるとトトが見える位置に席を置いている。

ちなみに1列に席は5つあり、合計で35人の生徒が2組に在籍している。

お互いに近くにある窓をカラカラと開けて風をお出迎え。

「一時間目から国語だから宿題するには静かでちよつといいね」
開け終えたトトは着席し、国語の教科書や筆記用具を出した後、国語辞典を取り出した。

「あ、早速ですか。お願いしますトト先生」

トトの席へノートと鉛筆を持っていき、立って講義を受ける。
この意味はこうで〜と教室内にのほほんとした空気が流れてい

だが、その空気はものの2、3分でぶち壊された。

7月という暑さのため教室のドアを登校してから開けたままなので、学生が廊下を歩きながら会話しているのが、内容は理解できないがガヤガヤとした間接的な音で入ってくる。

「ちよいーつす。ありゃ、宿題やってんの？ わたしにも教えをください」

メリハリのある声で、まるで部活かなにかの挨拶を発して教室内に入ってきたのは、同じ組の友達である橋倉 美奈さん。背丈は私よりも少しだけ高く、スラッとした体型だ。女優のような煌びやかなロングの黒髪が、彼女の整った顔を際立たせ、可愛いよりも美人綺麗という印象を脳に植えつけてくる。そんな美女なのに、残念なことに性格はさっぱりとしていて男子に近い。

「いいよーさっちーにも教えてたところだし」

「さっちーやってないんだ。あんた窓の外ばっか見てるらしいからねえ」

「とかいってみななんも窓際の一番前で窓の外ばっか見てるじゃん」

「わたしやねえ、この町が好きだから！」

「私も好きだよ！」

「あ、私も」

方向性を失う会話を一度してから私たちの会話は元に戻る。

「一心不乱とか以心伝心とか【心】の入ってる言葉がいいかねえーわたしや。考えた人の粋が入魂されてるのがびしびし伝わってくる感じがするからね！」

「って、もうすでに2個でてるじゃん！」

「でも他が思いつかんよ…これが…」

「それなら〜以心伝心とかあるよ〜」

「トトさんトトさん…さつきわたしが言ったよ。それ」

おふざけ気味に宿題の会話をしていると、学生の数はどんどん増えていき、教室内は3人から気づけば15人ほどにまで増えていた。

そして、トト先生からの教えにより私とみななん、まーちゃんが4つの四文字熟語を習得したあたりで8時25分の予鈴のチャイムが鳴り、あと5分で授業が始まるまでになっていた。

まーちゃんとは久石^{ひさいし} 真奈美^{まなみ}さんのことだ。

私とみななんがトト先生の講義を受けているとわざとらしく「おとつとつと、足が滑ってトトさまの前にきちゃいましたマナミです」と、割り込んできた黒髪を後ろで括り、ポニーテールにして、肩まであるもみ上げを出している、売れないお笑い芸人チックな私たちの友達である。

授業は始まり、この暑い中で出席した生徒は35名中35名という出席率を誇ってしまったため、教室内は暑い暑い。下敷きをうちわ代わりに扇ぎ、人工的に風を起こしている生徒も見られる。国語の柴木先生さえも「暑いわね…」と愚痴をたらすほどだ。

私は窓際最後尾のため、窓を開ければ自然の風がゆったりと流れてきて、暑さをやわらげてくれる。

(うーん…いい風だあ)

目を瞑りながら自然の風を満喫していると、柴木先生から「はい、じゃあ大原さん。調べてきた四文字熟語を黒板に書いてください」と指名されてしまった。

ムムつと黒板と一度対面してからトト先生に教わった四文字熟語を黒板に書き、席へ戻り、後からその意味を、席を立って生徒に発

表する。それが終わると「では、次は林田くん」と違う生徒が餌食になる。

前に立ち黒板にカッカッカッと四文字熟語を書き連ねていく林田くん。

(あれ…あの人………)
書き終えて廊下側の列の前から3番席へタッタッタと戻る林田くん。

(あれ……？ あれ……あの人確か…昨日の　っ！)
間違いなかった。記憶の中にあるばやけた顔面図。それに指紋照合がぴつたりと当てはまるように林田くんの顔が重なる。

(ぎゃああああああ！ 同じクラスの人だったの！？ 最悪じゃん！！)

恥ずかしい一面を見た目撃者があっさりと、すんなりと見つかってしまい、私は静かにパニックを起こした。

(えー…全然気づかなかった…3ヶ月同じクラスにいたのにちゃんと顔を覚えてなかったよ)

あわわつと口の前に手を置いて現在の心理状態をあらわにする。
(あつでも結構一瞬だったし。あつちは覚えてないかも。うん、覚えてなくていい)

ポジティブにポジティブにと思考を展開させる。

「さつちーどしたの？　なんか悩んでるみたい？」

私の真横に席を置くまーちゃんがボソボソと話しかけてきた。

「んーんーなんもないよ」

冷静にポーカーフェイスを装う。

「えー？　いつも外を見てるのに今日はいつになく廊下側みてるじゃん？　絶対おかしいおかしすぎ」

「どういう決めつけ方の基準なのか少し語り合いたい。
たまには外を見ないときだってあるよ」

「はいっ次は久石さん」

「げっ当てられちゃったじゃん」

「話しかけたのはそっちからーがんばってねー」

先生に指名されたまーちゃんに小さく手を振る。問い詰められるのは嫌だったので先生ナイス！と内心では思っている。

(はあ…意識しすぎたかな)

しかし逆に意識しないでおこうと自分に言い聞かすほど、人と言
うものは意識を持ってしまふ。自分でもいつ「廊下側を向け」とい
う命令を脳から流したのか分からないほど自然と廊下側に顔が向い
てしまっている。

(このクラスで3ヶ月…女子の大半は覚えてるけど、男子は顔と名
前が一致しないのが多いんだよね…うーん…)

「だからどうしたの。いつも以上に廊下側に意識いつてない？」

まーちゃんが黒板に課題を書いて戻ってきた。

ビクツとまーちゃんの方へ顔を持っていく。何やらニヤニヤした
顔があった。

「久石さん、意味を答えて」

「あ、忘れてた忘れてました」

ニヤニヤ顔からいきなり慌て顔になったのは少し面白かったが、
(さて…どうしたものか。ゼーったい何か勘違いしてる顔だったよ
…)

まーちゃんは必死に意味を答えているが私は脳内にどのような弁
解するかを、頭をフル回転させて考えているため真横にいながらま
るで耳に入ってこなかった。

「ふう…で、どしたの？ 何か気になるの？」

ようやく着席の許可を得たらしいまーちゃんが、再度質問というボールを投げかける。できれば避けたいがこの至近距離では無理だと分かった。

「えーと、ほら、私らつてこのクラスで3ヶ月経つじゃない？」

「うん。そうだけどそれが？」

「いやー単にこのクラスメイトの名前と顔が一致する人つてどのくらいいるのかなーって、教室内を見渡して思ってたただだよ」

「あーなるほどね」

これで上手くキャッチして投げ返した。

かと思っただが

「そうやって避けるんだ」

「え？」

「さっちーのことちょっと間見てたけど、ずーっと同じ場所しか見てなかったよ？」

「ほらほらほら！ 思い出そうとしてあの人だれだっけーってなったら集中しちゃうでしょ？ その時の私はきつと集中してたのよ！」

「カマかけただけだったけどその慌てようは違うってことね」

久石 真奈美の投げるボールは、とてもキレのあるボールだとこの時はじめて思った。

「で、誰見てたの見つめてた？」

「言い直さなくていいし見つめてなんかかないよ！」

「ふーん…方向から察すると林田 透はやくしたひまわりくん辺りかな？」

いやもうキレがあるとかないとかじゃなくて物理的にありえないボールを投げちゃうの！？ 凶星をピンポイントに突かれた私は思考回路が一気に狂い、人差し指をくるくる回し考えるが、

「……えーっと……えーっと」

やはり狂った回路の修復はそれほど早くはできないものだった。

「あー的確なところにはいつちやった？ まー林田くんけっこういい人みたいだしいいんじゃない？」

「な、なに勝手に私が恋愛感情抱いてるっておもってるの！」

「あれ？ 違うのんのん？」

「うーっと…」

私は白旗を揚げ、昨日のことを話すことを決意した。

このままでは林田くんに恋愛感情を抱いていると結論付けられるからだ。別にそんな気のない私には、この話は後々めんどろなことになるそうだから早めに止めを刺した。

「なーんだ、つまんないのー」

話を聞いたまーちゃんの最初の感想だ。立場が違えば私でもつまらないと答えていただろう。でも他人から言われると少しムツッと来るのは何故だろうか。

「どうせつまらないですよー」

「もっとおもしろい人に見られればよかったのね。林田くんあんまり人と絡まないから目撃しても胸の内になってしまうんじゃないかな？」

ん？と一つ心の隅に引つかかる小さな疑問が生まれた。

「……まーちゃんってクラスの人のこと、どのくらい覚えてるの？」

「んー？ まあ大体覚えてるよ。あと3人くらいでコンプリートかなー」

「コンプリートってなんの？」

「あたしの人間観察が、よ」

「ちょっとまって、まーちゃんの趣味って人間観察なの？」

「あれ？ 言ってなかったっけ」

初めて聞いた久石さんの趣味。

結構地味だ。

「あらあらあら……私の授業は面白くないみたいね」

まるで忍者のように音を殺して国語の授業担当の柴木先生が、私とまーちゃんの位置する一番後ろの席に突如として現れた。

ビクンッと私たちは肩を瞬間的に上方向に震わせた。

クラス全員の視線は私たちに向けられており、クスクスとした笑いが薄っすらと聞こえてくる。

あ…あ…と意表を突かれ、私はかつてないほどの苦し紛れの一言を言い放った。

「あ…た、楽しいです…」

コクコクとまーちゃんが相槌を打つ。

「おしゃべりが、でしょっ!!」

さすがは苦し紛れ、柴木先生の一蹴を受けて脆く儂く散っていった。もう少し頑丈な言葉を紡ぐべきだったと今更ながら思う。…っ
てか、まーちゃんも援護してよ。

「今回、宿題なかったのだけど、あなたたち二人には「特別」に出してあげましょうか？」

ビシッと私とまーちゃんは先生の方向から目を即座に黒板に移し凝視する。背筋はピーンと伸び、机に置かれた教科書を両手で持ち「真面目に勉強します」というオーラを全力で出す。

「はあ…窓際の席は涼しいわね…」

呆れ果てたのか、柴木先生は窓の外の景色を数秒間眺め、何も言わず静かに教卓の前に移動した。先生の見た窓の外は古びたしい木造りの家々が、まるで行列を作るように立ち並んでいるものだ。家によってはガーデンングをしているところもあり、家という堅苦しいイメージだけではなく、自然を織り交ぜて、色とりどりの色彩が目に入ってくる。その中に私の家も含まれているのにちよっとした優越感がある。

手前の平たい地形から一転し、奥に見える天国と地獄の坂から自然がさらに広がり、家々が点々と並んで、不思議と引き込まれるイ

メージに陥る。自転車や軽トラなどの比較的遅い乗り物が通るたびにそれだけを見つめ、風で草木が揺れるたびにそれを見つめる。都会？と聞かれれば田舎と答えてしまふ片田舎にある、ある意味での絶景なのかもしれない。

キーンコーンカーンコーン

窓の外へと吸い込まれた頭が、ベルによって戻ってきた。まーちゃん私は私の方を向き、机と椅子の背もたれの頂上に腕を置いて話しかけてくる。

「ふう…一時はどうなるかと思った思いましたよ…」

「あはは、あぶなかつたねー」

そう話しているとまーちゃんの背中からトトが近づいてきて、笑いながら会話に参加する。

「おしゃべりしすぎだよ。ひそひそ聞こえてたよ」

ムムっ？と私の眉が動く。

「…な、内容は？」

「林田くんがなんとかかんとか？」

「めっちゃ聞こえてるじゃん！」

「だって、まーちゃんの右斜め前だよ？」

「あれーあたし結構抑えてたつもりだったんだけどなー。あつ、てことは席近い人全員に聞こえて聞かれてるかもね」

えっ！と私の顔が歪む。当たり前だ。もし内容をワード毎に耳が汲み取っていたら、

林田くん 気になる 恋愛感情などという行って欲しくない方向へ全力疾走しかねないからだ。

「あんたらなんの話してたんよ？」

私の手前右斜め前にみななんがいきなり会話に入ってきて質問を投げかけてきた。それに答えたのは同じく会話に入ってきたトトだ。「なんかね〜林田くんが気になって恋愛感情がなんとか〜だったよ」「えええ！ ホントに全力疾走しちゃった！」

最悪の想像図が現実を実現してしまいツツコミが口から出てしまった。

「なんのこつちゃ」

みななんは手のひらを上に向けて頭を軽く右に倒した。

「あーちがうちがう、恋愛とかじゃなくて恥ずかしいーところを見られただけらしいわよ」

フォローなのかそれとも楽しんでいるのか、いやフォローだと期待しておこう。まーちゃんがフォローに回ってくれた。

「この子ねー、はしたない自分の格好を林田くんを目撃されたらしいのよ。ぷぷぷ」

「こら、ぷぷぷってなんだ。めちゃくちゃ楽しんでるじゃん。期待した私が馬鹿だったよ。裏切り者おー！」

「……ごめんごめんなさい。ん〜と…恋愛感情持ってるんだっけ？」

まーちゃんにニヤニヤした顔が舞い戻ってきた。

「ちがう、そつちはもつとだめ！ フォロー的な言い方があるでしょ！ い・い・か・た！」

「なんのこつちゃ。わたしにや理解しにくいわ」

「は〜窓際すずし〜」

トトのマイペースな窓際すずし〜発言のせいで会話は一旦止まり、みんな窓側に移動し涼しさと絶景を楽しんだ。

この瞬間だけ本当に心の底から思い知らされる。

私の友達はこの町が本当に好きなのだ。

なんて、マイペースなのだ。

奇妙なはじまり

はてさて、私の話題も自然消滅し、放課後をしらせる電子音のチャイムが鳴り響いた。

この学校の時間割は、1時間目：8時半～9時20分 2時間目：9時半～10時20分 3時間目：10時半～11時20分 4時間目：11時半～12時20分 お昼休み：12時20分～1時5時間目：1時～2時50分6時間目：2時～2時50分・となっており、今は3時ほどである。

夕飯まではまだ4時間ほどあるため（正確に言えば6時に帰る予定だから3時間）少し悠長な時間が堪能できる。朝の食卓でも宣言したように友達と遊びたいので誘いたいのだが、すっかりその話題が意識から飛んでいて（というか林田くんの話題により飛ばされたため）、急に誘っていいものかと悩ましい状態に陥っている。

そんな状態の私に、これほどまでにない右ストレートが飛んできたのは生まれてから 一度もないだろう。

「大原さん、ちょっと話したいことがあるんだけど」

そう、右ストレートを放ってきたのは林田くんだ。わざわざ座席の一番後ろの窓際まで足を運んでくれたため、あっけにとられ、机の上のカバンに手を預けたまま少々の時間を空白にした。

「……………えっと、ここでもお話できる内容？」
なぜだろうか。口から出た言葉は、少しばかり震えていたように思える。

心理状況的に言えば、なんのようですか！？昨日のことならいちいち来なくてもよろしいんじゃない？と恥ずかしさと驚きを秘めている。

「うん。ちょっと聞きたいだけだから」

内容は大方ついている。恐らく昨日の変な格好をしたのは私かどうか。だろう。

これを聞かれたら確実にこういうだろう。「変な格好？ 私そんなことしませんから人違いじゃ？」とかね。

「昨日、学校以外で僕のことを見かけた？」

「へ？」

右ストレートの次はフェイントを含んだ攻撃がされてきた。まさかこんな大外回りな質問だとは思わなかった。ここはウソを付いて回避したいが、あのととき目があってしまったし、なにより林田くんは私の顔を覚えているようなのであからさまにウソはつけない。私は周りを気にして、少量に音量を絞りこちらでも大外回りに返した。「えっと…チラっとは見かけたかなあー？」

「やっぱり…ちょっと来て」

真剣と捉えられる声と表情を作った林田くんは私の右腕を掴んだ。「へ…？ え、え！ なになに！？」

ぐいつとそのまま引っ張られる形で身体が持っていかれる。

左手でカバンの取手を反射的に掴んだが、唐突のことに頭は混乱していた。チラッと見えたまーちゃんの顔はニヤニヤしていた。他の2人は頭の上にハテナが乗せて、ほけーっところちらを傍観していた。

とりあえずまーちゃんはあとで力一杯殴ってやる。…ってというか助けてよ！

廊下に出た林田くんは辺りをキョロキョロ見渡して、渡り廊下に私を強引に引っ張っていく。

4階に位置する渡り廊下は吹きさらしの少々小広い石作りの橋のような作りだ。これの存在理由は演習などでの使う特別な専門教室を設置している棟に行くための通路である。棟の名前はB棟と言われている。

一年の一学期ではB棟を使う授業がないため利用している学生は

いない。放課後になると通路を使用する学生もいなくなり、ほぼ無人と化すためか、やけに静かな空間ができる。その空間を2人の不純物が入ってくるだけでその静けさは壊された。

「ちよつと一体なんなの…」

「強引に引つ張つてごめん。でも確認してきたかつたんだ」

「？」

一度混乱してから続けて言う。

「なにを？」

「昨日、地獄の坂で僕を見かけた？」

「え…？ えーと…あの足広げた格好のことを言いたいの？ だったら胸の内に終つていて欲しいんだけど…」

「えつと…」

林田くんは問いかけに対して人差し指で額をトントンさせながら悩ましげに眉をかしげていた。

「えつと…それは別に気にしてないんだけど、僕のこと坂で見かけた…？」

「う…ん。見かけた…ね…」

「やつぱり…見えたんだ」

「うん…って、見えたって？」

答えてから数秒間、林田くんは黙りながら人差し指で頭を小さく掻き出した。そして少し目を下に向け、こちらを見つつ、ノックダウンの言葉を放った。

「僕はあるとき消えてて、人には見えない状態だったんだ」

「はい？」

精神的なノックダウンというべきだろうか。この人は何を言っているのか、どんな妄想を膨らませている危険人物なのかとか、いろいろなのが頭の中で駆け巡り、脳内従業員はパニックを起こし出した。呆然と立ち、不思議そうに林田くんのことを見る。

一瞬の空白が過ぎた。

「あ……ごめん。いきなり言われても信じられないよね。あ、でも勘違いしないで。僕は幽霊です。とか、そういうことを言いたくないじゃないんだ」

いや、いきなりじゃなくても信じませんよ。それが初めに思った感想だ。

「あはは……やっぱり混乱するよね。僕も初めてだからちょっとテンパってるかも」

頬を掻きながらごくごく普通の会話をされてしまった。

(いやいやいや！ だから何が言いたいんですかあなたは！)

私は早く解放されたいためかどうかは定かではないが、この話は少しでも乗っておかないと長引きそうだと思い、一方的だった会話のボールを投げ返すことにした。

「えーと……私は林田くんに昨日の夕方に坂で会う？ とうかすれ違いました。それがなんでそんな話に……？」

林田くんは頭上の空を見上げながら「えっと」と小声を出し、視点を戻して質問に答える。

「僕はあるとき人から見えない状態だったんだよ。そのはずなのに、大原さんは見えた。つまり、大原さんは僕からしたら何者？ って感じなんだ」

「えー……とお……林田くんはあるとき人から見えない設定だと仮定すると、なんで人から見えないの？ じゃあ今は？」

「人から見えないのは僕の存在がそのとき認識できない状態になっていたから。今は普通に見えるし存在も認識されるよ」

なんともオカルトチックな方向に話が展開されているように感じる。そもそも、人から見えない・認知できない状態なのに、私に目撃されている時点で矛盾がすでに起きているのではないのか……。だとすれば、彼は何が言いたいのか。今のところ、妄想しまくっている危ない人にしか見えない。

はあっと一つのため息をついて呆れながらに話に乗ってみる。

「人から存在が認識されない状態ってどうやってなるの？ できる

ならそれを見せてよ」

ふふふ…：我ながらいい質問と強要だと思った。

妄想癖であればその時点で実行できないことに対して、逃げの一手か、話し自体を亡き者にすべく違う方面の話にすりかえるはずだったのだが、

「うん、いいよ。ここならまだ人目に付かないし」

あっさりと承諾されてしまった。

「そうだ。一つ言っとくけど、なるためには特別なモノを出さないといけないから、あまり驚かないでね」

特別なモノ？なんだろうか。もしかしたら変身スーツでも隠し持っているのかもしれない。きっとそういう手のモノを出して、「はい、これで見えないでしょ？ あれ！ 見えてる！ 君おかしい！」とか言っただろうな…。

「う、うん」

とりあえず頷く。

「じゃあやるね」

林田くんは体から右側の地面に右手の手のひらをかざした。そして左手の手のひらも右手と同じ50センチほどの間隔をあけてかざす。どこかで見えたことのある格好だと記憶の中に一瞬だけ探りかける。

.....

林田くんの取った行動は一体何がしたいんだろうと思わされるほど、何も起こらなかった。…のだが、

「あれっ??？」

おもわず口から声が漏れてしまった。

少しずつ、少しずつ…：本当に少しずつまるで輪郭をなぞるかのよ

うに、何もなかった林田さんの右側から自転車らしきものの形が、無色から色を全体に付け足したように徐々に徐々に見えてきた。ゴシゴシと目を擦って確認してみても、色が濃くなるだけで、自転車らしきものの輪郭はほとんど鮮明になっていく。そして【白い自転車】とはつきりと見えると、元々握られていたハンドルをギュッと林田くんは握り直した。

「えっ!? ……えええっ?!?!??」

かつてないほどの驚愕を見せた私に対して林田くんは言う。

バックにある専門教室を設置しているB棟が影を作ったにも関わらず、林田くんは黒いシルエットにもならず、自転車を真横に据えた姿で微笑みながら言う。

? これで僕の存在は今、誰にも把握できない状態なんだ?

クラスに3ヶ月居ながらも一度も話したことのなかった林田くんとのお話は、奇妙なはじまりを見せた。

変てこ自転車

ボスッ！

教科書を4冊ほど詰め込んだカバンが手からすり抜け、硬いコンクリートの上に重たい音を立てて垂直に落下した。

『後退り』 そう言っても過言でないだろう。私は右足だけ半歩分後ろにそらしていた。驚きか、はたまた気味が悪いからは定かではないが、少々引き気味になっている。

？大原さん、やっぱり見えてるんだ？

「そっそそそれって手品か、なっなんかなの？」

？んっ？ この自転車のこと？……んと、説明しづらいけど、簡単に言えばこの自転車に触れてれば、存在が消える状況を作り出せるんだよ？

「いやっそっちじゃなくて、どうやって自転車を何もないとこから出したの……」

？えっ？ 手をかざして出てこいって思えば出るよ??

なんとまあこの人は当たり前のように言ってくれる。動揺を隠せない私がマイノリティに思えるほど、日常会話の一部のようにだ。

「いやっそれがおかしいの！ 林田くんは魔法使いなんかですか！？」

？んっ……。もし僕が魔法使いだとすると、大原さんも魔法使いってことになるね？

「へっ？ なん……」と、疑問を解消するため、理由を聞くようにした途中に、

「うおーい、さっちいいい！」

まーちゃんの大音量の呼び声が耳に入ってきた。

(げっまずっ…！　こんなところ見られたら絶対さけられるよ…)
慌てて何か対策を立てようと必死になるが、ものの数秒でまーちゃんを筆頭にした3人が渡り廊下に侵入してきた。

まーちゃんは首をブンブン振り回し、渡り廊下全体を見渡してから首を傾げた。

「あれっ林田くんは？　帰った？　帰っちゃったの？」
「……………」

ここにいるじゃんっ！と続けようとする言葉を必死に飲み込んだ。
(えっ…………ま、まさか…)

まーちゃんへ向かっていた顔をゆっくりと、キリキリと、自転車をどこからともなく出した人へと移す。

？ねっ。他の人には見えてないでしょ。あつ大原さん返事しないでね。変な人に思われちゃうよ？

あんたがいうな！と、叫びそうになるが理性がちゃんと仕事をこなしてくれた。おかげでなんとか変な人と思われることを免れたが、

(あああ…どうしよう…いきなりのハプニングじゃん…言い訳どうしよう…)

この現状までは打破できない。

チラッと不思議がつている3人一行を横目で見てから、林田くんはどうしよう…と最少量に押さえた音量で聞いてみると、
？適当にあしらってね？

(いやっそのあしらい方を教えてよ…)
頭が痛くなる思いだ。

私をこんな意味不明な状況下に置いた張本人はみんなには見えてないみたいだし。一体どうやって收拾をつけようか…。みんなのことも。ぐちゃぐちゃになった頭の中も。

「うん。それだけ」

(言うと思っただけとそれだけにしといてください。これ以上の言い訳は私の頭じゃ考えられません…)

確認の言葉を聞くと、一番期待していたまーちゃんが勝手に暴走しだして、独り言のように話し出した。

「つまらないつまらなさすぎる…！ もっとこっぴどく桃色ピンクを望んでいたのに！」

「勝手に望むな！」

「え〜だってつまらないじゃ〜ん」

そう言いながら両手をくねくねと動かし始めた。まーちゃんがつまらないと感じた時に踊るダンスなのだろうか。

「んまあ何も無いならいつかー。今からどっか寄りにいく？」

みなさんがこの話は終わったと思いき、遊び案を出してきた。

「そうだね〜。私時間空いてるからさんせ〜」

「あたしもおっけーの賛成！」

みなさんとトトとまーちゃんの遊び参加発言。ちよつと前の私ならすぐさま賛成と言っていたらう。だが、今は状況が全然違う。

私のほぼ後ろにいる林田くんの問題があるからだ。

この状況の最善の手はなんなのだろうと、脳内労働者は急ピッチで活動していた。いきなり自転車を出して、私以外の人には見えなくなつた林田くんを置き去りにして、遊びに行くことはまずできないであろう。かといってこの遊びを断つたとしたら、恐らくまーちゃんからの再攻撃が勃発しそうだし。

？えつと…僕の話は気にしないでいいよ。また後日、詳しいことを話すからさ？

気になって遊べるかー！っという内心を押さえつけ、林田くんと言っ通りにした。はっきり言っつてこの場はこっぴどくするしかないのだあ

るう。

「わ、私も6時まで参加ー」

恐らく乗り気じゃない声のトーンだっただろう。ここでノリノリなテンションを出せるような女優になりたいと初めて思った。

「んじゃあなんか食べに行く？ ファーストフードとか」

みななんが提案を出した。

「え〜。2時間くらい前にお昼食べたばかりだよ〜」

「ありゃ、おなか空いてない？」

「みななんはすぐお腹空くなー！ そんなに動いてないのにさ。しかもほつそい！ 羨ましい羨ましいぞ！」

「ふふふ。わたしや天然ブラックホールだからね！」

「すごい」

トトがボケに合わせてか、みななんの胃袋辺りをすりすり擦りだした。脳内歯車が錆びれて噛み合わさるまで時間がかかっている私は会話に入れず、取り残された感が滲み出ている。が、今の私にとって取り残していいですよ…という本心が片隅にある。

後ろで女子の会話を盗み聞きしてクスクス笑っている林田くんに対して、何故か苛立ちが芽生えてきた。何故か、はおかしい表現だったろうか。林田くんの干渉がもし今日という日になかった場合、私はこの時間を億劫と感じていないであっただろう。

「んじゃあファーストフードは無しで、時間が時間だから3時のおやつにケーキといきますか！」

「それなら食べる〜」

「甘いものは別腹！ 目指せおいしいケーキケーキ！ そして増える！ あたしのウェイトウェイト…ウェイト…」

まーちゃんの叫びが文末になるにつれて小さくなっていった。

「……や、やめとく？」

まーちゃんのウェイトウェイト発言が気になったのか、提案者で

あるみななんが気遣いの混じったトーンでまーちゃんに聞いていた。「いいよいいよ……。行こうよ……。その分走り回って周って廻りまくるぞ……」

「そ、そう……」
「?…!？」

クスクスと笑っていた林田くんの口の隙間から詰まったような風音が出ていた。よくもまあ笑っていられるな!この問題児め!と^{トランプルケーキ}と叫びそうになるが叫べない。叫んでしまえば明日から白い眼の的だ。

深呼吸を一度してから近くのケーキ屋の情報を頭から引き出す。

「じ、じゃあ学校に近い一条ケーキに行く?」

「んーあそこって今の時間けっこー混んでない? 学校から近い分、放課後満喫女子グループが多く生息しているはず……!」

まーちゃんの情報に私たちも放課後満喫女子グループの一組ですよ。とツツコミを入れたかったが、今の心身状態ではツツコミを入れる余力は残っていない。

「そ、それだと他つてどこかあったけー?」

ツツコミはお預けで、ここからすぐさま立ち去りたい。早く目的地を決めて欲しい。

「あ、じゃあここから14・5分かかつちゃうけど、おいしいケーキ屋があるからそこに行つてみる?」

トトからケーキ屋情報が即座に出された。その情報に食いついたのはまーちゃんではなく、みななんだった。

「ここから15分くらいつてもしかして若葉ケーキ!？」

「そうそう……。あそこおいしいの〜」

「おいつしいよねー! わたしもあそこ一時すんごいハマった! 特にチョコレートケーキがわたしのお気に入り!」

「ムムっ! そこは知らない知らなかった! 私のケーキ屋情報量を増やすべく、そこに行こう!」

「体重もね〜」

トトの華麗で破壊力のある一撃にまーちゃんは「ぐはあ！」と
言いながらオーバリアクションをした。あははっとみんなと一緒
に笑い合うが、私の笑顔はぎこちなかつただろう。

目的地も決まったようなので渡り廊下からは退散することになっ
た。

ガシャン！ガシャン！

後輪が階段の段差を埋めるべく、激しい音を立てているが、私と
林田くん以外には全く聞こえてないようだ。私たちのグループのほ
んの3メートルほど後ろに、無謀にも階段を、自転車を押しながら
降りている危なっかしい人がいるのだ。

みんなはケーキ屋の話をしながら階段を下っている。その会話は
自転車の騒音のおかげで聞き取れなかった。

？ごめんね、うるさくて？

後方から謝罪を受けるが、それに反応することはできない。その
事を分かっているのか疑問に思うが、林田くんは一方通行的な会話
をしだした。

？えっと、僕はこのまま帰るから 明日、この力について話すね？

「……………」

返せないのどうすればいいかと考えていると、？あ、よかつた
らケータイを取り出して？ と助言を受けたので、携帯を取り出
し、時計を確認するフリをした。

もちろん、この問いにNOの回答はない。

そして騒音が鳴り終わる下駄箱につき、上履きを入れる途中にあ
ることに気づいた。

（林田くん…靴どうするんだろ？）

この学校の下駄箱はフタなどが付いていないため、取り出しが楽なのだが、私以外の人からは林田くんが靴を持っては浮いているように見えるのでは。

そんな心配事をよそに、林田くんはひょいっと下履きを取り出し、上履きを下駄箱に入れていた。

「なっ…！」

唐突のことに口から音が漏れた。

「およ？ どうしたのさっちー」

まーちゃんの問いにハツと我に返る。どうやらみんなは靴のことすら気づいてないようだった。

「あっ、く、靴に虫がついてただけ」

「そっかー」

あはは、と微笑を交えながら呼吸を整える。

？大丈夫だよ。靴も消えるから？

その言葉を冷静に考えると納得してしまった。服とかカバンなども消えていないと、みんなの神経を疑ってしまう。

私たちは自転車で登下校しているため駐輪所に行くが、林田くんもそれに着いてきていた。ススッとまーちゃんを筆頭にしていたグループからさりげなく距離を置き、林田くんに最少量の音量で話しかける。

「…なんでここまで着いてくるの？」

？えと、なんて言えばいいんだろ…。普通の自転車？は、駐輪所に置いてるから？

「じゃあその自転車どうするの…？」

？あ、この自転車は手を離せば消えるんだ。でも、僕は下校していることになってるからさ？

「あ、そっか…」

つまりは私たちが帰ってから存在を消せるわけの分からない自転

車を消して、普通の自転車に乗り込む。そういう予定なのだろう。カチャン。カチャン。と自転車の鍵を外す音が3つほど聞こえ、私も慌てて自転車の鍵を外す。

「んじゃあ、若葉ケーキに行きますかー！」

「いえっさー！」

みななんとまーちゃんのやり取りを聞いてから自転車のペダルを踏んだ。

後ろを見て、林田くんが手を振っていることを視認した。

？明日？

ただそれだけで意味の通じる言葉だった。

それからの事はまるで魂が抜けていたかのように覚えていない。ボーっとしていたのか、はたまた綺麗さっぱり忘れ、みんなと遊んでいたのか。ケーキの味すら思い出せず、今は自宅で夕飯を食べている。お茶碗を右手に持ったまま、その事を考えていたためか微動だにしていなかった。

「沙代、口くらい動かさない」

お母さんの言葉にハッと我に返って、ご飯を口の中に放り込んだ。

問題

ミンミンミンミン

「…うーん」

今日はやけに寝起きが悪い。昨日、色々なことを考えすぎてしま
い眠りについたらのは遅かった。

「沙代ー遅刻するわよー！」

「…あれ？」

1階から聞こえる母の言葉に疑問を抱く。

ベッドの上に置いてある携帯の時計を確認した。

「3（木）7：55」

「……………」

デジタル表示されている文字を無機質に数秒眺め、

「えっ!？」

やっと今の時刻を知ることができた。

それからの動作はいつも日常的に行っていた手順とは違い、制服
を着て、洗面所に行き顔を洗い、髪をとかし、朝ごはんそっちのけ
でドタドタと玄関まで行き、靴を履いた。この間なんと6分で仕上
げるといって自己新記録を樹立した。

「いってきまーす！」

「ん？ 沙代、朝ごはんは？」

父の質問が繰り返された直後にピシャン！と玄関が閉まる音が
鳴り響いた。

「…いつてらっしやい」

既に家からいなくなった娘に父は小さく呟いた。

シャー…シャカ、シャカ

ペダルをいつもより強く踏みながら急いで学校へ向かう。5分ほ

ど行つたあたりにある小さい公園の時計を確認すると、8時8分を示していた。いつもここから後15分くらいかかるため、予鈴までには間に合うという心の余裕が少し出てきた。

それにしても、いつもより学生の登校人数がやたらと多い。私が普段、過剰なまでに早い時間で登校しているためか、あまり見慣れない光景にいつい目泳いでしまう。

(やっぱリトトはいないなあ…)

トトも同じような早い時間に登校しているので、この時間帯には既に学校でくつろいでいるだろう。

最終的に学校に着いた時間は8時22分。

教室に入って自分の席を見ると、いつもの2人が私の席を陣取っていた。

「さっちー今日はおそいね〜」

「わたしより遅いなんて珍しいなあ」

トトとみななんだ。みななんに至っては私の椅子に座っている。

「あはは。起きたら8時前で慌てたよー」

「でも始まる前に来れてよかったね〜」

「そうそう。まーちゃんとかまだだからねえ」

そういえば小うるさいまーちゃんの姿が無かった。私が慌てている時間でも余裕な表情で登校してくるまーちゃんは、なかなか問題児だ。と、一つのワードが頭の中を走った。

(…ん？ 問題児…?)

走つたついでに、忘れ去られ、置き去りにされていた何かを担いできた。

ハツと忘れていた大事なことに気づき、バツ！と廊下側を勢いよく振り向く。

案の定、林田くんがこちらを見ていた。

(そうだった…。昨日…。ああ…)

「およ？ あたしに気づいたか…。やるなさっちー」

ビクツと身体が一瞬持ち上がるように反応した。林田くんに向い

ていた目線をほんの少しだけ右にずらすと、まーちゃんが右腕を半分ほど上げている姿で立っているのが入った。

「あ、あははは。お、おはよーまーちゃん」

「おはよー」

「おっそいなー。もう予鈴鳴るぞお」

「へっへーん！ 本鈴でなければオールオーケー！」

ふう…とさっきの反応を詮索されずにすんで良かったと一息つく。挨拶が済んだ3人は昨日のケーキを話題に話を始めた。私は昨日魂が抜けた状態だったのでその話題に入りにくい。何を食べたのかさえ思い出せないのだから。

「やつぱりあそのケーキはおいっしい！」

「みななんちヨコレートケーキ2個も食べてたもんねー。私1個でお腹いっぱいだったよー。まーちゃんケーキ選び遅かったしー」

「いやーあそこはあたしにとって新発見だった。まだショートケーキしか食べてないから、また行かないと行かなくてわ！」

「ま、また行きたいねー」

苦し紛れに会話に参加するが今はそうするしかない。今この時だけ早く授業が始まって欲しいと強く願った。話題がつかめない私には今の3人の会話はまさに暗号の羅列だ。そして目線をずらせば暗号よりも解読しにくい問題が「居る」。

はあ…とため息を深くついた。これからが憂鬱だ。

「おい授業始めるぞ、いつまで立つとる」

「？」

聞きなれた声したが、何を言っているのか理解するのに時間を要した。

周りを見てみると、みんな着席している。丸い掛け時計を見ると、31分を指している。教卓の前に数学担当の宮元先生が立っている。つまり、授業が始まっている。

「……………」

シユバ!!!

私は高速に近いほどの速さで着席した。周りのクスクスと平べったい笑い声がやけに耳に付いた。かあつと頬と耳が次第に赤くなつていくのが自分でも分かる。

「さっちー…恥ずっ!」

「う、うるさい!」

分かりきっていることをまーちゃんが小声で言ってきた。呆けていた時間はまさかの5分間だったようだ。いつの間にかみななんの姿も忽然と消えていて、自分の席へ座っているし。

(う、うーん…なんだか昨日をきっかけに私のリズムが狂ってきてる…)

これは早めにリズム調整が必要だと強く感じた。そのリズムを調整する一番の方法は、考えられる中でこれしかない。

林田くん問題を解決する!

(そういえば今日話すつて言つてたけど今日のいつごろだろ?)
うーんと昨日の会話を思い出すが明日以外の時刻を表す言葉は見つからない。

(とりあえず今日の放課後は空けとかなないといけない…かな…?)
今日もバイトはないから放課後は時間がある。そういえば朝に夕飯のことを言うのを忘れていた。まあ、あのお母さんのことだ。夕飯に遅れても自分で作りなさい。というだろう。

「ばら お・お・ば・ら!」

大声が思考中の脳内に突き刺さった。

ビク!と身体反応と共に「は、はい!」 と、大きく返事を反射的にした。

妙に筋肉質な数学教師である宮元先生は左手に教科書を開きなが

ら持ち、右手の親指でちょいちょいつと黒板を指していた。

「問題解け！」

聞いてませんでした……。解けません。という言葉が脳裏をかすめるがさっきのこともあるため口に出せない。

「はい……」

渋々ながらに黒板に向かう。

窓際最前列にいるみなさんが椅子の背もたれに肘をついて、こちらを見ていた。あははと引きつり笑いでみなさんを見ながら横を通り過ぎる。

「3x」

通り過ぎる前に恐らく私にしか聞こえない声量で、黒板の答えを教えてくれた。持つべきものはやっぱり友達だああ！と感動しつつ答えをカリカリと自信満々に早々と黒板に書いた。

きゅー、きゅー。

間髪入れずに宮元先生の持つチョークで黒板に書かれた3xの文字が、バツテンで上書きされた。

「え、ちょ……」

「違う。お前、授業ちゃんと聞いているのか？簡単な問題だぞ」

改めて黒板に書かれた問題を見直すと、本当に簡単な問題だった。スツと頭を窓際最前列の方向へ滑らかにスライドさせる。みなさんは窓側に顔を向けていた。薄っすらと引きつった表情をさせながら。

あんにやるー！という言葉を噛み締めて、黒板にもう一度解答を書き、合格を得た。

「あつちやーごつめんねえ」

授業が終わると両手の手の平をくっつけた形でみなさんが謝罪をしてきた。

「いいよいいよ…信じた私もバカだったよ…」

「いやーわたしもビックリだよ。自信あつて教えたのにまさか不正解とは。つて、？も？つてなにさ！」

「みなさんは曰ころから授業聞いてなさすぎだね！ さっちーもそうだけど、ぷぷぷ」

「こら、ぷぷぷつてなんだ。バカにしたなー！」

「バカにしたつてわたしも含まれてる！？ それだとわたしやただのバカじゃないよ。偉いバカだからね！」

「それつて一番性質（ルビ：たち）の悪いバカじゃん！」

「ほうほう…みなさんは偉いバカか…あたしの観察ノートに付け加えなければ…」

「何そのノート！ 今すぐ持つてきな！ わたしが学力を持つて破り捨てるから！」

「えええー！ それつてどういう理屈よ！」

「それだと持つてきても安心安心ノートの生命保険！」

無駄に高いテンションでバカみたいな会話をしていると、トトが目に入ったので見てみると、なにこれ…。と酷く崩した表情を浮かべていた。あまりのテンションの高さに引いているようだ。

「バ…バカバカ連呼しすぎだよ。バカつて言ったほうがバカという法則が正しいなら全員バカに…」

トトの炸裂パンチを聞いたみなさんは驚きながら、
「なにい！みんな何回言つた！？」

点呼のようなものを取り始める。意味を理解し通じあつた私たちは、自信満々に数を言う。

「わたしや3回！」

「私も3回！」

「あたし1回！」

「私…あつ！」

ニヤつと私とみななんとまーちゃんが口の端を不気味に広げた。

「は、はめらた〜」

半泣きのような演技を見せて、トトが頭を押さえた。

あはははと笑いが起きている間に、授業を知らせるチャイムが鳴った。

新しい日常

チリリン

楽しい時間は足早に去っていき、今からは問題解決を行うための放課後の始まりだ。お昼休みの時に自転車を装備した林田くんが近づいてきて、坂の上公園に3時30分くらいに集まるかと予定を組んできた。

わいわいと賑わうお昼の教室で、お弁当をトトたちと一緒に食べていた私は、そのあまりの大胆な行動にお箸を力なく床に落下させた。

坂の上公園といえば私の家から5分ほどいったところの小さな公園だ。学校からだとも15分ほどはかかる。学校内だと人目に付きやすいから。という理由なんだろうけど、

(公園だともっと人目に付きやすいんじゃないのかなー?)

そんな思考と共に私はペダルを踏んでいる。

車輪を回し早15分、ようやく坂の上公園が姿を現してきた。そして坂の上公園に入ると、浮いたように一人の高校生が木製ベンチの横で自転車を持って立っていた。

辺りを見回すと、他にも子どもが数人と保護者が数人ほど見当たり、高校生というカテゴリをさらに浮かせていた。だからこそ、あることに疑問を抱く。

(今って…見えてるの? 見えてないの?)

私だけ認知できるということは、林田くんが消えてても消えてなくても私には一緒に、その判別が付きにくい。与えられた情報は姿

を消せる自転車に体が触れていると消えられるということ。つまり今は見えていないということなのか、はたまた普通の自転車を横に据えているだけなのか…。

そう考えながら恐る恐る近づくと、

「あ、これ消えるほうだから？」

選択肢を一つにしてくれた。ということは、私はここに一人で遊びにきちちゃった高校生という設定。1人ということは林田くん相手にしゃべることができない。何故なら、そうしたら100パーセント、周りから異常者扱いされる。

（……あれ？　じゃあどうやって会話するんだろ？）

まさか会話のキャッチボールなしではなく、私が全ての玉を受けるキャッチャーの役割、林田くんだけピッチングなのかもしれない。そういえば林田くんは、明日説明するからということしか言っていない。説明だけできればいいだけなのかな。

「大原さん。ケータイを取り出して誰かに掛けているフリをして？」

「……？」

少々考えてからようやく意味が分かり、自転車をスタンドで固定してからベンチに座り、携帯を取り出して掛けているフリをする。

「あー…、もしもし？」

演技であっても誰とも繋がっていない孤独な携帯に話しかけているのはなんだか寂しい。そしてその演技を見てちよつとだけ笑った林田くんがなんだか憎い。

「ごめんね。説明するなら消えてたほうがやりやすいから？」

「どーいう意味？」

「消えるとか消えないとかそういうやり取りって、傍から見たら変だと思っただけ？」

考えれば第三者からそんなやり取りをしている高校生を見たらちよつと気持ち悪い。そしてそのやり取りをする高校生は私たちであり、第三者は公園内の人になる。

「……うん。これがいい」

？ははっ。じゃあ説明していくね？

説明、どんなものをされるのだろうか。というよりも自転車を持つていたら消えるということとは分かっているから、今さら何を説明されるのだろうか。林田くんが消えてる時の見分け方とか対処の方法とか、そこらへんなのだろうか。

？まず、大原さんもこの力は使えると思うんだ？

もしそういうことだとすると対処の方法は携帯で通話しているフリをするこ「……へ？」 とじゃなくて私も使える！！？？

？僕が見えてるってことは。多分、同じ力を持っているからだと思うんだ。推論でしかないけど使える確率はすごく高い？

林田くんはピンと人差し指だけを立てながら推理を語った。

同じ力を持つから見える。というのには確かに一理あるかもしれないけど、私は生まれてからこのかたそんな超常現象を起こしたことも見たこと（林田くん抜き）もない。

そんな私がこんなありえない現象を引き起こす自転車を出す？いやいやいや！もしかしたら実は靈感なんかが強くて、単に見えているだけという線も！

？だからまず力の説明よりも、実際に出してみよう？

さあここにある道具を使っておもちやを作ってみよう！みたいなノリで言われて「はい！」というとても思っているのか。

私は眉を寄せて疑問を吐く。

「どう…やって？」

？出し方は、自転車があたかもそこにあるかのように手をかざして出て来い！ って思うんだ？

作り方はこのネジをここに付けたら「はい、出来上がり！」みたいなノリで言われても、何も伝わってこないし信憑性があまりにもなさ過ぎる説明下手…だけど実際そうなんだろう。願えば出てくるなんてちよつとロマンティックなアイテム。

「じゃあ…ちよつとやってみるね…」

(えーっと…自転車があたかもそこにあるかのように手をかざして…ん?)

「……待って」

ベンチから立ち上がり、携帯を肩で固定して通話しているフリをしながら手をかざした瞬間に、あることが頭の中を横切った。

？どうしたの??

「もし出ちゃったら私って消えるんじゃない??」

私の疑問に林田くんはキョトンとした。まるで1+1は2だよ?と教えられたように。

？あ…?

林田君は分かりきっていることを忘れていて注意された時に出る呆けた声を出した。そして顔をしかめっ面にしながら何かに気づいて、?どうしよう…?と、ものすごく頼りない言葉を吐いた。

「…公園はバッドチョイスだったみたいな?」

人目に付きやすい公園でいきなり人が消えるショーが行われるのだ。しかも私はそのショーの主役で一度顔とかを見られている。次にあつたときの反応が恐ろしすぎて考えたくもない。

？どこか人目に付かないところにいかないと…?

「どこかあるかな…」

真剣に何かを考えているが何故そこまで考えが及ばず、公園にしたのだろうか。自転車よりも不思議に思える行動だ。携帯でのやり取りがすごく画期的だったためか、その反動ですごく滑稽に見えてしまう。

？そ、それじゃあ説明だけ、してみる…??

「私に言われても…」

それを決めるのは林田くんであり、その元凶も林田くんである。しかし今説明されても何の実感も沸かないのは事実だ。ついさっきまで私にも使えるかもしれないという期待があったため、説明だけ聞いて実際にやってみたら使えなかったのでは落差が激しすぎる。林田くんは恐らく必死で人目に付かない場所を探しているのであるかのように、どこだろう…という表情をさせていた。

「でも、今って4時前だしそういう場所ってやっぱりないんじゃないかなー」

頭で思っていたことが口に出てしまい、呆れた物言いになってしまった。そしてその言葉が決め手になったのか、林田くんは？そうだね…？と諦めるように肩を落とした。

？それじゃあ…説明だけするね…？

手順が狂ってしまい、少しやる気がなくなっているように見える。勝手に失敗して勝手に落ち込むのは受けて側からしたらやめて欲しいものだが仕方ない。私は携帯をまた手に持ち、ベンチへ腰を下ろしながら。

「うん…。その方向で…」

？…自転車を出せば存在が消せる。っていうことは話したからいいとして、この自転車には色々なルールや制約みたいなものがある、それを説明しようと思うんだ？

携帯を耳に押し当てながら説明を聞いていると、始まった瞬間に疑問が沸いた。

「その説明…って、私も使えること前提の話だよな？」

？うん。そうだけど…？

「あ、ごめんね。なんでもないから続けて」

林田くんは頭の上にハテナを乗せたような表情をさせた。

小さな疑問はすんなりと出た言葉に払拭されたため、あの質問はあってもなくてもよかったのかもしれない。

「じゃあ続けるね。まず、自転車から手を離すと存在が認知できる状態になる。でも、指先一つでも自転車のどこかに触れていけば、存在は認知できない。そして、この自転車に他人が触れたらその人も存在が認知できない状態になる？」

ふんふんと相槌を打っていた頭が、最後の言葉にピタリと止まった。

他人が触れたらその他人も存在が認知できなくなる？」

「え、それってちょっと危なくない？」

「うん。だから他人と自転車の接触はやっちゃいけないこと。それから大原さんには分かりにくいと思うけど、あつ靴なんかいい例えかな??」

「どういうこと？」

「物も一緒に消えられるってこと。自転車に触れている人が物に接触するとその物の存在も消える。でもこれは自分の体積よりも大きいものはNGっていう最大積載量付きだけだね？」

「と、いうことはそのルールが無かったら服だけ浮いてるみたいに映っちゃう? のかな」

「それこそ透明人間みたいなものだね。でもこの自転車は透明人間よりも性能がいいかな。あ、でも、この物を消せる力は人と接触している物には効かないみたいなんだよね？」

「ム?よく分からないことになってきた。今までも不思議現象の説明に頭がパニックを起こしかけているのに、またさらに追い討ちをかけるかのように林田くんの怒涛の説明は続く。」

「人と接触をしていると効かないって？」

「んと、例を挙げると…例えば僕が大原さんにイタズラをしようとして服だけ消してやる! て、思ったとして、大原さんの服に触れてもその服は人から見ても消えてない。という感じかな？」

「例えばイヤだけど…どういうこと？」

「大原さんの服が大原さんに接触しているから消せないってこと。」

でも逆に接触していない部分には有効？

「えーっと…じゃあ上着を何枚も重ね着してると一番上の服は消せちゃうみたいなの？」

？そんな感じかな？

ややこしいけど、恐らくその力が使えても人に茶々いれる真似をしないだろう。もしもバレた時のことが心の歯止めになってくれる？あと、このルールでの人への接触による消える現象は有効されないんだ？

「んーと…ということはその自転車に触れたまま人の地肌に触れてもその人は消えないってこと？」

？その通り？

つまり自分たちが触って消せるのは？物？という概念があるものだけということだろう。そして人が消えるのは特殊な自転車に触れなければならぬということ。

もし私がこのヘンテコ自転車パワーを使えるならこれは覚えとかないといけない必須事項だろう。なかなかややこしいけど、もし使えるなら面白そうな代物だ。

「やっぱり実際にやってみないとわかり辛いな…」

この言葉には、場所を変えて私に力があるかどうか試したいなという内面が存在する。

？それじゃあ実際にやってみよう？

林田くんが私の内面部分の要求に快くというよりも、滑らかな流れで答えてくれた。そう言うと林田くんは自転車を押して歩き、ワーワーという子どもたちの保護者の方へと向かっていく。

「……？」

よく分からなかった。

場所を変えるなら闇雲に歩かず、行き先を決めたほうがお互い分かりやすいし動きやすいはず。もしそのやり取りが面倒くさくても

自転車に乗り込むはず。それなのに押し続けているのはどういうことだろうか？

考えが右往左往していると、林田くんは保護者同士の会話の中央付近に回りこんでいた。そして、立ちながら会話している奥様の肩にかかっている手さげカバンの中に、はスルっと手を入れた。

「へ……？」

その行動に奥様はまるで気づいておらず、違和感すらないようだった。何の反応も見せずに、変わらず笑顔で会話しているのがいい証拠だ。

そして林田くんは抜き出した手の中にハンカチを持ち、手を振るようにハンカチをヒラヒラさせた。今まさにスリの実行犯を見つめました！的な心情に置かれてしまう。

「私が入りました！」と自ら大つぶらに告白している林田くんは得意気に、？ね、カバンは対象の手に触れてるから消えないけど、中身は消えるんだ？　と言い、満面の笑み。

あ……あはは……と私は引きつり笑いでコクコクと頷いた。早めにその行動をやめさせたかった。しかしその思いはまるで届かず、林田くんはまた奥様のカバンの中に手を突っ込み、ハンカチを戻してから、次は奥様の腕を大胆に掴んだ。

「えええっ！！」
ガバ！！

私は瞬間的にベンチの背もたれからかなり離れた位置へ、身体を前方へ移動させた。通話しているフリをするインテリア携帯はその時だけは耳から大きく離れた。

？存在が認知されないということは、触られても分からないってこと。地肌に触れてもこの人は普通に会話をしていられるということ。は、この人は消えていない証拠？

ああ…実際にやってくれました。それはもう心臓がドクンドクンと早く大きくなるほどの焦りと不安がこみ上げさせる、ハラハラさせる行動をして。

なんだろうか、少し頭痛のような痛みがズクズクと頭で脈打っている。

そんな私をよそに、カラカラカラと車輪が回りながら近づいてきた。

？これで分かりやすかった？？

笑顔がすごく似合っていた。それはもうやり遂げた感が滲み出していた。少し見方を変えてさっきの出来事を思い返せば、してやったりの顔にしか見えなかったけど。

「う…うん。とつても…ホント、とつても分かりやすかったよ…」
？なら良かった。説明とか僕へタクソだから伝わらないと思つてたから？

そんな滅相もないと言いたかったが、脳内労働者が休憩を欲しがっていたため抑えておいた。しかし今ここで休めてしまつては次の攻撃に対して無防備すぎる。

「他には何かルール？ みたいなものはないの？」

詰め込めるだけ詰め込んで後で整理することを選んだ。

？えーと…これで終わりかな？

林田くんは思い出す仕草をしてから終了の宣言をした。それが分かる…とある感情が一気に溢れてきた。

(…使つてみたい)

存在が消えるということは見られないし触つても気づかれない。

つまりなんでもし放題ということを遠からず意味している。そんな代物を目の前に出され、自分もそれを持っているというのなら、この好奇心を止めるモノは一切なくなってしまう。

ウズウズする体の動きは昂ぶられた好奇心を髣髴させている。
？興味が沸いた？？

「う、うん！」

否定どころか間髪入れずに頷いてしまった。まるで日常を、一気に壊すハンマーで私を叩きつけたような、そんな摩訶不思議な感覚。興味は沸かないわけがなかった。

？じゃあどこか人気のないところを探して試してみる？？
にっこりとした表情は先ほどの表情よりも輝いて見えた。

『新しい日常へようこそ』

ワーワーという子どもたちの声が、不思議と遠く聞こえた。

手にした力

カシャン

自転車のスタンドを下ろす音を一つだけ鳴らし、トコトコと土作りの階段を降りてく。その後ろからは自転車を横に据えたまま、ガシャン！ガシャン！と大きな音を立てて進む林田くんがいる。
「ここなら人目に付かないね？」

私は身体の向きを変えながら、辺りをキョロキョロと見渡す。

「うん。ここなら多分…、人とかこなさそう」

坂の上公園から始まった説明会は場所を変更し、天国と地獄の坂のため池付近に移動した。ここでならインテリア携帯を使わずに会話できる。

さすがにここに来る人はいないためか、雑草などが育ちすぎるほど育っていた。私の腰を超えるほどの雑草たち。何故か落ち着けるセミの声がやけに遠くから聞こえるここには、木がなく、一面草むらと表現しても問題ないだろう。

人目があんなにイヤだったのは久々のことで、あ、でも今日は学校で恥ずかしい思いをしたな…。まあそれとは違うイヤな視線がここでは払拭される。

「それほど警戒しないでいいのかもしれないけど、やっぱり大原さんだけの声が聞こえてるんじゃないかな…??」

そう呟いた林田くんは両手に持つハンドルから手を離し、自転車を手放した。

「自転車はガシャン！と言う音を一度立ててから、スーッと消えていく。」

「うーん…そういうのを見ると、おかしな自転車って再認識するな…」

「ははっ。見えてるからこそおかしいって何だか幽霊みたいだね」
「実際それに近いかも…」

「ま、まあね」

自分でも分からないが、初めよりは耐性が付いてきたように思える。靈感のある人の気持ちが少しだけ分かる気がする。しかし今はそんなこと、遙か彼方。実際にやる側になりたい気持ちが勝る。

「ね、ね。どうやるんだっけ出し方！」

「あ、じゃあ一緒にやってみようか」

「うん！」

林田くんは両手を自転車のハンドルを握るように伸ばした。

「こうやって自転車を持っているように構えてから…」

「じゃあ？」

見よう見真似で同じように構える。自転車を持っているように、というのはイメージでの話では納まらない。だから適当にせず、本物の自転車を持つようにしっかりと構える。

「そう。それから自転車をイメージして輪郭を整えていくように…」
「そう言う林田くんの構えた場所から自転車が薄っすらと見えてきた。」

おおっ！と歓声が私の中でこだました。

「イメージ…輪郭…イメージ…自転車…」

見せられて好奇心が急上昇した私は、テストを受ける時よりも集中し、構想を練り上げるように自転車の姿を連想し、イメージする。そうするとピクンッと両手が何かに反応した。軽く握り締めていた手の平が勝手に開いた。口に息を内側から入れて頬を膨らましたような、そんな感触。

「ひっ……」

すごく気持ち悪かった。何か得体の知れないものが割り込んでくる。

顔は反射的に引きつってしまふ。しかし、研ぎ澄まされたイメージは頭の片隅から離れず、目でイメージ映像を見るような感覚に陥った。

自転車が徐々に姿を現してくる。

心臓はチクチクというよりもドキドキという音に近いものに様変わりした。

研ぎ澄まされたのではなく、イメージ映像を見ているのでもなく、本当に自転車が姿を現した。

？うあ…あっあっ！！ できたー！！！！？

喜びのあまり大声で叫んでしまったのに気づいたのは、林田くんのはは。やっぱり同じ力を持つてたんだね？ という冷静な声が耳に入ってからだった。そして喜びのあまりに万歳をしようとしたけれど、自転車の重さに負けて前輪だけが少し浮いてから、元の地面に戻り、ガシャン！と音を立てた。

？ホントに出せたんだよね…？ これ、そうだよね！??

今の私を冷静かつ客観的に見たら、欲しくて欲しくてたまらないモノを手に入れ、それが夢でないことを確認しているような、そんな子どもみたいな姿なのだろう。

そんな姿にも関わらず、林田くんはにっこりと微笑む。

微笑む林田くんを見て、本当に自分が出したのだと認識をして、わくわくが一気に増長した。両手でハンドルをギュッと握り締めて、自転車を見つめる。

？の…乗れるのかな…？

ボソリと出た言葉は、好奇心がヒートアップしてしまったものだ。
？乗れるよ。普通の自転車みたいにね？

私はお多福のような笑顔をしてしまったに違いない。ざわざわと髪が持ち上がるような、そんな喜びが一気に駆け上がった。ゲームを買ってもらって今すぐにそれをプレイしたい、そんなわがままな子どものように。

？乗ってみたい！？

いつもとはまた違うテンション。それが抑えきれずにひよっこりと顔を出してきた。林田くんは懐かしいモノを見るように、私を見てにっこりと笑う。

？じゃあすぐそこにピッタリのサイクリングコースがあるね？

指を差したのは私の真後ろにある天国と地獄の坂だった。確かに、試乗するには打ってつけの場所だ。

ギュツとハンドルを強く握り締めて、不思議な自転車を駆け足気味にタッタッタと力いっぱい坂まで押していく。ここは坂の中腹辺りのため池のため、坂に出ると下に下るか上に昇るかの二択を迫られる。もちろん、昇るなんてことはしない。下ることが何も言わずとも決定している。

カシャン！と坂に出て、サドルにまたがり、自転車におそるおそる腰を預ける。ギシツと重力により少しだけ自転車のタイヤが沈む？
？乗れ…た！？

ポロリと眩かれた自分が起こした出来事の実証。それを口に、声に、言葉にしたとき、本当に自分が起こしたものだとして認識させられる。

?乗れた…?

感激か、はたまた驚きか、私の身体は身震いして、感情の波が津波のように弾け昂ぶった。それはまるで乗ることの出来ない雲の上に乗れたようなものだろうか。私にとつて、いや、他の人にとつてもかな?この出来事はイレギュラーで変則的な、一生のうちに味わえないモノ。そんな極小の可能性を私は掴んでいる。

だから私自身、未だに信じ難いことで、この現実を直視するのが少し恐い。自分で出しておきながら、しっかりハンドルを握り、腰をサドルに乗せ、自転車に自重を任せているのが、夢なのでは…と考えてしまう。授業中に居眠りをしてしまい、この映像を見ながら机の上に突っ伏しているに違いない。と、思うのだけれど…林田くんの笑い声が、飛んでいつている脳を現実へと引き戻す。

?ははっ、ね、乗れたでしょ?

そう、私は存在の消せる自転車に乗っている。誰も彼もが体験できないことを体験している。

?うん!?

パツチリと開けた眼の中には、好奇心という名の輝きがあったに違いない。

だから林田くんはこう言ったと思う。

?早速下ってみよっか?

ギョツとハンドルを握る手が強く締まった。ブレーキを外し、ペダルに足を乗せると、車輪がゆっくりと回転していく。

?おっ…お…おおおおお…!?

その回数が増す度に回転の速度はグングン上がっていく。急な勾配の坂道に対して車輪はそれと同様に回転数を上げていき、4、5秒立った時には漕がずして私の体を移動させるスピードにまでなっていた。

シャーン！私を乗せた不思議な自転車が坂を駆けて行く。風を切る音が耳を突く。なんて清々しいのだろう。
？わああー！？

？だめだよ！ スピード落として！？

歓喜していた脳みそを貫くように、林田くんが叫んでいた。
パチクリといった表情をして、抑え気味にブレーキをかけ、速度を緩め、林田くんと並走するように速度を合わせた。

？…なんで？？

疑問に満ちた表情だったのが、林田くんは呆れたようにため息混じりに言った。

？…見えてないってことは僕達がいることが分からないんだよ。だから車が来ても僕達を避けてくれないし、スピードも緩めてくれない。ぶつかっても相手はこっちを認識できないから、止まってもくれないんだ？

そういえば私にはどこからともなく出せる便利な自転車という認識が強く、自分の存在が林田くん以外には認知できないというこの自転車の本分が実感できていない。私は握るハンドルを見ながら疑心をこみ上げた。

？…これってホントに見えてないの？？

？うん。その筈だけど…気になる？？

？だって…林田くんには私のこと見えてるし、私も林田くんのこと見えてるからさー…。消えてるって実感が薄いというか…無いというか…？

私はハンドルから右手を離してポリポリと頬を掻いた。

林田くんはそれを見ると前を向き直し、考え込むように黙った。

よく聞くとうーん…という唸り声が聞こえたかもしれないが、車輪の音にそれはかき消されていた。

坂を降りきる当たりに差し掛かると、ハッと林田くんは何かに気づき、私の方を向いた。

? 丁度いいところに良い場所があったよ?

? どこ???

? すぐそのコンビニ??

え!と私の表情が崩れたのは、林田くんの言ったすぐそのコンビニとは、私がバイトしているコンビニだからだ。極力バイトのことは知られたくない私は、友達にも黙っていたりする。理由としてはからかわれにバイト先に訪ねてくるのが嫌で、抵抗があるからだ。知り合いにお金を稼いでいる姿を見られるのが好きではない。と自分に言い聞かしているが、本当のところは接客している姿を見られたくない。

? うー…ん…そ、そうだ…ね…丁度…いい…ね…?

だからこそ曖昧な返事が喉を通った。

私があそこで働いていることなんて、私の口から出るか、私を見かけた店員さんが声を掛けてきて、間接的にバレるかのどちらかだ。そういった点では本当に丁度いいかもしれない。

私の口から出るとはまずない。だから、存在が消えている状態の今、店員さんが声を掛けてくることはないはず。もし掛けてきたのなら、この自転車の本分は私には備わっていない決定的な証明になる。

? ……うん。うん…。じゃあそのコンビニにいー?

? ……うん?

私の発言に林田くんは訝しげな表情をさせた。

曖昧な返事のあと数秒すると、自分から行くこうと言ってきたのだから当たり前といえば当たり前か。しかし林田くんがその疑問を投げかけることはなかった。すぐさま表情はにっこりと穏やかなものになっていた。

その表情は楽しいものとはまた違ったものに見える。嬉しい。という表現が一番近いものかもしれない。キッ！

ブレーキ音と共に自転車を静止させ、サドルに体重を預けながら私たちはコンビニについた。
？ホントに見えてないのかな…？
？試してみないとね。中に入ってみよう？

コンビニを見上げながらサドルから降りて、ハンドルを握ったまま自転車を押していく。近づくたびにドキドキしてきて、身体が震える感覚が私を襲う。存在が消えていなくて、自転車のままコンビニに入ろうとする馬鹿なやつに映ったらどうしようとか、あのコンビニの自動ドアが開いたら夢が醒めてしまうのではとか、色々なことがガソリンとなっている。

そんな不安を抱えたまま、辿り着く。が、

「……………」

「……………あれ？」

自動ドアの前に立つと、いつもならば開くはずなのにシーンと一向に開こうとしない。その時間が体感したことないほどの長い自動ドアの沈黙だった。

私と林田くんは並んで、うんともすんとも言わない自動ドアの前で呆然と突っ立っている。とても滑稽に思える。悪戯をして家を閉め出された子どものようだ。

？なんか…これだけでもう分かつちゃった…？

？そつえば考えてなかった…自動ドアをどうやって開けるか？
？……………？

林田くんもこういうことは初めてなのだろう。だからここまで手際の悪いことが目立ってしまっている。深いため息をつきたくなる

が、林田くんの顔を立てるために抑えておいた。

?今日は…帰ろっか…?

?え???

思いもよらない言葉に目が丸くなった。まさかここで帰るなんて選択肢が出てくるとは思ってもみなかった。

?大原さんも自転車が出せたことだし、この自動ドアのおかげで存在のことも分かったし、僕の手際の悪さに今日はもう疲れたと思うし…?

?そ、そんなことないよ。おかげですごい…能力っていつのかな…?
?それが私にあるって丁寧に教えてくれたんだし!?

私がフォローすると、林田くんは疲れたようににつこりと笑った。自分の手際の悪さに落ち込んでいることを隠すように。

そしてそれを一生懸命フォローしようとする私が、それに拍車をかけているようだった。落ち込む必要なんてないのに、落ち込まれると居た堪れない気持ちが沸々と湧き出てきた。

?……今日は、ありがとう?

だから感謝の気持ちを込めて言えば、立ち直ってくれるはず。

林田くんの目は一瞬だけ大きく開いた。そして少々俯き加減に頭を下げた。その口元は先ほどとは違う笑顔を刻んでいた。

?どういたしました?

それを見て、私も釣られてニツコリと笑顔を刻んだ。

ウーーン…ドン!

?わっ!?

すると突然、自動ドアが開き、中年の男性と私の肩がぶつかってしまった。

警戒していなかったせいでグラツと足元がぐらつき、自転車の重みが片一方に偏ってしまい、ハンドルを離しそうになる。

(あ、こけ…!)

?大原さん!?

ガシ!と二の腕あたりを掴む手が伸びてきた。林田くんが驚いた表情で私を掴んだ。そのおかげで倒れることなく、ハンドルを離すことなく持ち堪えられた。

そしてその状態のまま、ぶつかつた中年男性を見ると、陽気な鼻歌交じりにノシノシと歩いていってしまった。

私たちは顔を互いに向き合つと、

?あ……はは……?

?ははっ?

何故か笑ってしまった。

?ホントだ…見えてないし気づいてない ?

夢じゃない

「あー！ 自転車置き忘れてた…！」

私は家の外にある駐車スペースを見て叫んだ。いつもなら置いてあるはずの自転車がない。

忘れていた、綺麗さっぱり忘れていた。

あの後、林田さんと別れた後、そのまままっすぐに家に帰ってしまった。もちろん、消える自転車を消して、手ぶらで。

ちゅんちゅんという雀の鳴声が「早く登校しやがれ！」といわんばかりに頭に響いた。

(うーん…さすがに消える自転車の方で登校して人にぶつかって自転車にでも触れられたらと思うと怖いしな…。もし消える方で完全に登校できても友達に遊びに行こうって言われたら…)

そう考えると結論は一つ、普通の自転車を取りにいかなくちゃならない。

(坂の中腹のため池のところだったから…)

悶々と考えていると、とてつもなく、「めんどくさいな…。」という気持ちが零れ落ちた。

はぁ…とため息を付いて「んっ！」と背筋を伸ばした。

「よしっ」

気合を込め、両手を地面にかざし、自転車を思い浮かべる。

改めて考え方を変えてみると、自転車が置きっぱなしということとは昨日の出来事は夢ではないという確たる証拠になっている。つまり、手をかざし、自転車をイメージすれば、あの力が働くはず。

私は目を瞑り、昨日のように自転車をイメージし、輪郭を捉える。すると、ススス…と自転車のハンドルの感触が強くなってきた。

「！」
それが脳に伝わると、反射的に眼がパツチリと開いた。
昨日と同じように、自転車が私の前に現れた。

「~~~~~!!!」

感激した。ゾワゾワとする背筋からやった！やった！という感情が一気に放出された。

？でき…た！ できた!？

ダツ！と一気にその自転車を押して道路に飛び出す。そして左にハンドルを回し、右足をペダルに掛け、走りながら自転車に飛び乗った。

シャー！と大きな音を立てる自転車が、坂を駆け下りていく。

？出せた！……！ 夢じゃないんだ……!!!？

シャー……ン！音を立てる自転車のテンションに合わせてるように、声も大きくなっていった。

？あははは！ すごいすごい!？

朝っぱから高いテンションで坂を下っているため、ウキウキが止まらなかった。坂から見える景色を少しでも高い視点で見ようと、腰を浮かせて、立ち漕ぎのようにペダルに立って、キラキラした眼で景色を堪能した。

？い……やっほ……!!!？

馬鹿みたいな浮かれ気分は、本当に馬鹿だった。

カラ…カラ…カラ…

「ぜー、ぜー…」

浮かれ気分です完全なハイテンションに陥った私は、中腹に置いてある自転車のことを綺麗さっぱり忘れ、坂を優雅に気の赴くまま下り切ってしまった。

急いで自転車を取りに中腹に行き、今は自転車を押して坂を上っている。

すごくしんどい、ありえないほどしんどい。さっきまでのテンションのせいで、ギャップと言うなの疲れが一気に押し掛かってきている。

「なんで…なんで朝っぱから地獄を登らないといけないのおおおお！お！」

こんなはずじゃなかったのに、なんで馬鹿みたいに坂を猛スピードで下ったのだろう。虚しい叫びは誰もいない坂に響いていた。

「さっちー今日も遅かったね〜」

学校に着いたのは昨日よりは早かったが、それでもいつもの私の登校時刻からすると遅めだった。今日もトトと一緒に登校できず、トトは少し待っていたとも言った。なんだかすごく申し訳ない気持ち私を襲う。

そんな気持ちを含んでいても、私は疲れのせいで自分の席でのへーと顔を机につけて突っ伏していた。なんて失礼なんだろう。私は。

「あ…はは…、坂さんと格闘しててね…」

「坂さん？」

「うん…。とても険しい坂道…強敵だった…」

トトは坂道なんて登校時にあつたかな？という表情をさせた。
「さっちーどしたの？ 疲れてるみたいだけど」

と、その後ろからみなさんがひよっこりと顔を出した。

「坂道と格闘してたんだって」

トトが説明をするとみなさんは笑いながら言った。

「あんた足腰弱いねえ、坂道程度でその疲れようは後々、歳食つと
しんどいよ」

ムツと私の顔に力が籠る。

私は顎を机の上に乗せてみななたちを正面で見る。

「あの坂はすごいの！ すっごい急でなっがいの！」

「うわ！ その体勢なんかきもい！ 分かったからやめな」

「き、きもい！？ って！ 坂の話もう終わり!？」

「だって別に興味ないし」

「ぬっつー！」

頬に空気を貯めてプクーと一度膨れさしてから、プイツと顔を窓
の方へ向けて同じようにのへーと机に突っ伏していた状態に戻した。

「でもさっちーの家からの道筋に坂なんてあつたっけ？」

トトは疑問を解消したいのか、終わった話をしてきた。

「ほらー私の家のすぐ横に、ながーい坂あつたでしょ？」

「あゝあつたね」

トトは少し上を見て思い出しながら相槌を打った。

ん？とみなさんに突っかかりに引っかかったような疑問が生まれ
たようだ。

「なんで朝っぱつからそんな長い坂上ってきたのさ？ 学校と逆っ
しょ？」

「あーそれは昨日さー…はや ……って！ まてまてまて！

昨日、林田さんと会って坂の中腹のため池に行ったからなんて正
直に話したら、やっぱりあなた達はあの時（放課後の渡り廊下の時）

ラブリングをしていたのね？とか思われる！

ここは尽力を尽くして言い訳を考えなければ…まずい！

「ん？ 昨日…はや…なに？」

眉をひそめながらみなさんは再度聞いてきた。

「えーっと…あつ、き、昨日さーはや…早寝！ 早寝したせいで朝起きるの早くつてさ！ 何もすることなかったから坂を自転車ですつてたのよ！」

「それでその有様？」

「……………そう」

「ぶっ、ぶつかだねえ。あははは」

上手く言い訳できたようだが、ある意味失敗してしまっているせいで含み笑いを超えた嘲笑をモロに食らう。私は顔を見られない位置へ少し移動させて、ムーンつと顔を真っ赤にした。

しかし馬鹿にされっぱなしは嫌なので私はまた顎を机の上に乗せて、みななたちを正面で見る。

「でもすっごく気持ちいいんだよ！ 涼しいし！」

「ま、またその体勢かい！ でもさー上るのしんどいんしょ？」

「……………うん」

「じゃあ意味ないじゃん。ぶぶっ」

ああ…自分から墓穴を掘ってしまった。

もう何がしたいのか分からない不思議ちゃん化してしまっている。

「さっちーがすごい弄ばれてる遊ばれてる！」

登校時間ギリギリに登校してきたまーちゃんが私を見て一声を放った。

私は声のする廊下側に顔を向けて「助けてーまーちゃんー」と、弱弱しい声で助けを求めた。

「あ、おはよ〜」

そんなこと気にも留めずにマイペースにトトは挨拶を交わしてい

た。

「まーちゃん聞いてみ、さっちーってば馬鹿だよお」

「何々？ どういった経緯でさっちーがこんなにダメーシ受けてるの」

二カつとした表情がお似合いな、みななんとまーちゃんはもう、悪魔にしか見えなかった。助けを求めたのは天使じゃないことは知っていたはずだったのに。小さな願いは儂く脆い。

うがー！と私は突っ伏していた机から体を離し、グワ！と両手をあげた。

「疲れてるのにいじられる…。なんて…バッドデイ…」

そうだった私はベタンと机にダイブするように沈んだ。

あははとみんなが笑う声が耳に入ってきて、私も釣られて笑ってしまった。

「そうだ、明日土曜日だしみんなで遊ぶ？」

トトがゆっくりと両手を小さくパンと叩いて提案を出した。

「あーあたしはいけるけど、みななんは無理無理だよね？」

まーちゃんがピンと人差し指を上げて無理無理に合わせて左右に振り、不気味に微笑んでいた。するとみななんはそんなまーちゃんをジト眼ときこちない笑顔で見つめた。

「わたしやその日は予定が入ってるから…ね」

「みななん無理なんだ。さっちーはどう？」

「んー私は…」と、悩んではいるが答えは頭の中にあつた。やはりまだあの力のことをよく知りたい。

そんな思いがあるからこそ、休日という時間がある日に教えてもらいたい。だから、土曜日は林田くんに会うことをすでに決めていた。まだ林田くんに話してない私の勝手な予定だけ。

「いけそうにないかなー。予定あるしさ」

「…どんな予定？」

すぐさま聞いてきたのは行けないと聞いていたみななんだった。遊びに誘う側がこれを聞くのは普通という流れで有りだと思っが、行かない側が聞くのは釈然としない気持ちがある。

しかし、なんといえいいのか。

（んー。あ、でも姿とか見えないだろうし見つかること無いと思うから、適当でいっか）

「親と前の家に荷物とか取りにいくの」

「ありや、まだ荷物完全に着てないんだ。4ヶ月は経ってるんしよ？」

あ、墓穴掘った…かな…。いや、まだまだカバーできるか。

「あんまり使つてなかった小物とかまだあるみたいだから」

「そっかー大変だねえ」

「まー昔の家にはほとんど何もないから探すの簡単だし楽だけどね」

「さっちーのその家いつてみたいなー。観察魂が湧き出て吹き出ちやう」

まーちゃんはキラキラした眼で天井を見上げていた。こうなると手が付けられなくなってしまう。早めに釘を打たなければ土曜日、着いてくる暴挙に踊り出る可能性が出てきてしまう。

「じゃあ〜まーちゃん明日どっかいく〜？」

マイペースなトトは、まーちゃんの光る眼を気にせず質問をした。

ハツと光が消えたまーちゃんは我に返って考え事を始めた。

「んんー、2人が無理無理ならけーことか呼んでみる？」

「恵子ちゃんと遊ぶの久しぶりかも〜」

「じゃあけーこ決まりの決定」

2人の会話はキャッチボールができていいのか不思議でたまらないが、まーちゃんはトトのことを十分理解しているためか、普通に話を進めていた。

恵子という子はよく知らないが、恐らく2人の中学時代の友達な

のだろう。

私の友達はまだこの3人なので、他の人を話題に出されると話についてけず、疎外感が私の胸の中にグルグルと回ってしまう。

友達だけど、知らないことが多くて、それが何故か悔しい気持ちにさせる。

（知らないこと…多いなー。まーちゃんが前に言ってた観察ノートをぜひ見てみたいよ）

本当に知りたい気持ちがあるが、後ろめたい気持ちも同時に出てきた。

私にはすごい隠し事があるし、知られたいと思っていない。バイトの事だって話していないし、そんなのが人のことを知ろうとするのは間違っているのかなあと考えてしまう。

（うーん…バイトはまだいいとしても…アレは口が裂けても言えないしな…）

どうしたものか、なんとも悩ましい気持ちで溢れかえった。そんなことを察知して欲しいとは断じて思っていないが、もやもやとした気持ちの中、釘をさすように、

キーンコーンカーンコーン

授業を知らせるチャイムが鳴った。

？今日は放課後、何か用事あるかな？？

お昼休みになると、林田くんが颯爽と私のところへやってきて、予定を聞いてきた。もちろん、消える自転車を横に据えてだ。

短い期間だったにも関わらず、慣れたもので、私は対応に困るこ

となくトイレに行くといいい廊下に出て、携帯を持ち、いつも通りのテンションを維持して会話する。

「今日は5時から家で手伝いの約束があるから放課後は空いてないの。ごめんね」

こう言っではいるが、本当はバイトがあるから嘘をついた。やっぱりバイト先に来られることには抵抗感がある。

林田くんは少し残念そうな顔をした。

「そっか。じゃあ…？」

「あ、でも明日は大丈夫だから明日の12時に公園に集合しない？」
続けようとするところを私が邪魔をするように割り込んでしまった。

しかし林田くんは嫌そうな顔をせず、逆に明るい表情になり、うん。12時だね。行くよ？と間髪入れずに返してきた。そして右手を上げて手を振った。

ピクツと手を振りそうになるが、見えていない人に手を振る行為は傍から見たらおかしいので堪えた。

(気遣ってくれてるのかなー？)

あっけないほど早い予定組みで、早急に去っていく林田くんの後姿を眺めた。

「……ぷっ」

学校の廊下で悠々と自転車を押して歩く姿は、とても浮いていて面白かった。そんな浮いている姿なのに誰も気づかなくて普通に過ごしている。本当に面白い力で、この面白さは見えている人にしか分からないだろう。

(そういえば学校のどこで自転車出してるんだろ)

考えるが死角の多そうな学校でそういうことを考えるのは変だったかもしれない。トイレとか渡り廊下とか、B棟の特別教室とか。人目に付かない場所は意外に多い。

ああ、こんなことを考えているよりも、早く教室に戻らないと。

時間を与えると何を考え出すか分からない悪魔がいるのだから。

両親

カラカラカラ…

「ただいまー」

授業は終わり、放課後になり、友達と少し会話をしてから、寄り道せずに帰ってきた。今日はコンビニのバイトが17時からあるからだ。

「あら、沙代。いいところに帰ってきたわね」

靴を脱いで床に足を置くと、ひょいっとお母さん洗面所から顔を出してきた。

「いいところ？」

「そう、少し手伝って欲しいのよ」

どうしたものか。今日、林田くんに話したとおり、家の手伝いをさせられそうだ。

お母さんはちよいちよいとおいでおいでをする。私は渋々重い足取りでその場へ向かう。本当のところ、家に帰ったらゴロっとなりに倒れて疲れを癒したかったのだが、まあ、そんなことは察知してくれるわけでもないし、言えもしない。

お母さんは洗面所へ私を招き入れ、上を指差した。

「電球をね、替えて欲しいのよ」

「ええーこれくらいならお母さんでも出来るじゃんー」

「そうなんだけど、今からスーパーでタイムセールなのよねー。でもこういうのって替えとかないと忘れちゃいそうだね。どっちがいい？ スーパー行ってくるか電球を替えるか」

「……電球替えます」

「ん。よろしい」

そういうとポスッとポケットの中に忍ばせておいたのか、電球がどこからともなく出てきて、私の両手の上へ置かれた。

「それじゃよろしくね」

ポンとお母さんは私の肩を叩き、スーパーのタイムセールという名の戦場へ出掛けた。

「んっんんん！」

爪先立ちをしても私の身長では電球の高さに完璧に届かない。ギリギリ電球の底の部分を5本の指先が付くくらいだ。だから電球を替える時はうねり声を常時出してしまう。体の全てをピーン！と伸ばし、まるで新体操をしているポーズになる。

「ふ、ぬ…ぬぬ。こ、れが…ホントの…嘘から出た真おー！」「ギリギリの綱渡りでキュルツと電球を付けて私の仕事は一段落した。

「だあー！ しんど…」

無理な体勢をして疲れた私はトポトポと居間までゆっくり歩いていき、ベターンと居間の座布団の上へダイブした。そして座布団を抱きかかえて仰向けに寝転がった。

んんーと背筋を伸ばしながら、居間の時計を確認すると、16時を指していた。

「……お母さん、買い物終わって帰ってきたら4時半くらいかなー？」

ジーと時計と睨めっこをしてお母さんの帰宅時間を予測する。

買い物の手順と帰ってくる時にかかる時間。30分もあればお釣りが返ってくるだろう。

「よしっ！」と私は鼻を鳴らして、もう一つの座布団を頭の下に引く。

「寝よう…。おやすみなさい…」

きつとお母さんが起こしてくれる。今日は朝にバイトがあることも伝えてるし。

座布団を抱き枕のように抱え、私は眠りについた。

.....。

「沙代。……。さーよー」

私を呼ぶ声が聞こえる。

ん…ん？とまぶたの奥の暗闇に話しかけていたが、一体誰が呼んでいるのだろうかという疑問が走った。

ゆっくりと目を開いていくと、隙間から光が差し込んで目がチカチカする。パチパチと瞬きを数回繰り返してやっと目を覚ました。

最初に飛び込んできたのは、お父さんの顔だった。

「はれ？……お父さん？」

「おはようはつよー。今日はバイトがあると言ってたが、無くなつたのかい？」

「んんー？ バイトは5時からあるよー。お父さん帰ってくるの早いねー」

寝ぼけた頭で会話しているとお父さんは微笑してゆっくりと時計を指差した。

ふいにその行動の意味が少しばかり理解できてしまった。恐らく時計を見た私は「あ。」と間抜けな声を出してしまうに違いない。

お父さんがここにいる時点でその事に薄々気づいていたが、まだ温まっていない脳のギアでは結論にまで到達できていない。

今日は仕事がとても早く終わって5時前に帰ってきたお父さんは、寝ていた私を起こしてくれて、バイトにギリギリ間に合いました。

とかいう妄想だけが頭の中をクラウチングスタートする。

6時51分

勇気を振り絞って見つめた時計の針は、その数字のところへ自身

を持っていつていた。

だらーんと肩が外れそうなくらいに重力と絶望に負けて下に落ちた。

「あ、は、はは。ろくじ…ろくじ…じゅういっぶん…」

もうこれは遅刻とかそういう甘いものじゃない。

無断欠席だ。言い訳なんて繕えるわけがない。

あわわわ…とビクビクしながら手で口を隠すように持っていった。

「どうするんだ？ バイトは」

ハッとお父さんの言葉は関係なかったが、ふと、お母さんの存在を思い出した。

お母さんを目覚まし代わりに私は眠りについたらのに、この時間になるのはおかしい。

「そ、そんなことよりお母さんはどうしたの！？ まだ帰ってきてないの！？」

「ああ。母さんは何かスーパーで友達が出来たみたいでな。夕飯そっちのけで今、遊び？ じゃないな。おしゃべりしにいつているみたいだ」

「そ、そんなあ…」

ガクツと頭が重力に完敗して下に落ちた。なんてタイミングが悪いのだろう。人を頼りすぎた私の責任だが、それでも落胆するほどタイミングが悪い。

「電話で嬉しそうに話していたよ。母さん。友達が出来ちゃった。

つて。ここに来て初めてのお友達だからな」

お父さんは遠くを見るように目線をどこかへやって、嬉しそうに微笑んでいた。

心配していたのだろう。引越しが決まり、お母さんも友達から離れてしまった。そして新しい環境で友達作りを0から再スタートすることの困難性を分かっているから。

私に友達が出来たのは入学して半月が過ぎた辺りだった。

それまでは1人でポツンとお昼を食べていたし、休憩時間には1人で教科書とかと睨めっこしていた。何もすることがなかったからだ。

本当に暇で、それでいて孤独を一心に感じる時間だった。

でも、ある日に朝早く目が醒めてしまったので、興味本位に早い時間から学校に行ってみると、トトがいた。それから私はトトと小さな談笑をして、友達にまで発展した。そしてそのトトを取り巻くまーちゃんやみななんとも友達になって、今に至っている。私に友達が出来た。と、夕食時に話すと、お父さんは優しい表情を向けて、「良かったな」と、暖かい声で応えてくれた。

今のお父さんは声と表情は、その時とまったく同じものをしていました。

「良かった…」

心配していたものが払拭された気分なのだろう。お父さんは安堵と共にその言葉を発した。

「…うん」

私も安堵と共に言葉を発した。

沈みかけの太陽が何故かまぶしく見え…

「あ、バイト」

薄暗い中に一筋の赤い光の線を見て、私は今日この景色を見るはずではなかったことを思い出した。

「そうだったな。どうするんだ？」

お父さんの質問に私は頭をポリポリと掻きながら、

「んー電話かけてみようかな…。はあ…。きっと怒られるよ…」

「ははは。がんばれがんばれ」

落ち込んでいる私に、お父さんは笑顔で応援した。

私は一つため息を吐いて、携帯に登録されているバイト先へ発信しようとして携帯を開けると、不在着信2件という表示が目飛び込んできた。

ん？と眉をしかめて携帯を操作すると、バイト先からの着信だっ

たことが判明。

(うつ…電話があつたつてことは早く来い！ つてことかな…)

私はすぐさまバイト先へ発信した。

プルルと電子音のお決まりの音を5回ほど挟むと、ブツと途切れ、誰かが受話器を取ったことを知らせた。

『はい、もしもし?』

電話を取った人はコンビニの店長さんだった。少し渋めの声の特徴的ですぐに分かった。

「あの…もしもし、大原です。店長…さん?」

『あー大原くん。今日はどしたん?』

聞かれた瞬間、言い訳が脳内を駆け巡ったが、隣にはお父さんがいる。

お父さんは事の事実を知っているわけで、私が嘘を吐いていることは当たり前に分かつてしまう。

「えと、寝ちゃつてて…」

『あーそうなんだ。そりゃ都合がよかつた』

「へ?」

『いやあ、新人の研修が今日だったんだが、忘れててな。まだ大原くんは日が浅いから教えられないでしょ? てことで、代わりに元村さんに入ってもらつてたんだ。だから今日は大原くんにバイトなしつて伝えようと電話入れたんだけど』

「あつ…マナーモードで気づかなかつたです…」

『そつか、まあそういうわけだから。じゃまた』

「あつはい。すみませんでしたー」

ガチャ…と私が謝つたと同時に受話器を置く音が鳴った。忙しいのか店長は早めに話を切り上げた。

新人が入つたとは前に聞かされていたけれど、まさか研修が今日で、私は用なしだったとは…。でも、怒られずにすんで一安心したから良かったと思う。

「どうだった?」

話を途切れ途切れでしか聞けていないお父さんは結果がどうなったのか気になるみたいだ。

「なんか今日は研修生がいるから私は必要ないみたい」

「じゃあ今日はバイトないのか」

「うん」

そうするとお父さんは顎に親指の腹を当てて、なにやら考え事を始めた。

このタイミングで考え事をするということは、夕飯でも気にしているのだろうか。

「んーじゃあ……沙代、夕飯どうする？」

当たったことに私は少し笑ってしまい、笑顔が零れた。

「あはは。私がカップラーメンでも手作りしてあげる」

「おー楽しみだなー……って！ それは手作りというのか!？」

ふふんと私は不敵に笑いながら、お湯をヤカンに注いだ。

使い方

「よーしよしよしー！」

11時半の日差しを浴びて、私は玄関の前で意気込んでいた。今日は林田さんと12時に坂の上公園で待ち合わせをしている。消える自転車の力をもっと詳しく教えて欲しいのが本分だ。だが、私はこの消える自転車を存分に使用できる機会が欲しかっただけかもしれない。

正義のヒーローという特別な存在は、特別な力を有して成り立っていると思う。そして私はその特別な力を有している。これは神様から、ヒーローになる資格を与えられたに違いないのだ。特別な力に気づいても、平然と過ごしていたが、私はこの力を使う機会が欲しくて堪らなかった。

しかし、日常にはこの力を使って何か出来る機会など、ほとんど転がってこない。

ならば、探すまで！

私は7月の空気を思いつきり吸い込んで、自転車を構える素振りをして、消える自転車を出した。

？うん。慣れてきた？

もう既に自転車は構えて、イメージをすれば出てくるようになっていた。

一度自転車をジツと見つめ、私は自転車に乗り込んだ。

ペダルに脚力を注ぎ、踏み出す。

(うーん…それにしても、この力を使って出来ることって…)

触れていれば存在が消える自転車。誰からも見ることも感じるこ

とも、声を出しても接触しても認知出来なくなる。つまりは、そこにいない状態に近い。

(誰かを助けようにも、自転車を持ったまま助けなくちゃだし、安易に近づいてこの自転車に触れられたらアウトだし…あれ…?)

ほとんど何も出来ないのでは?逆に、ヒーローとは異なる悪の方
向でなら?

姿が見えない上にモノに触れるとそのモノも消せるのなら、万引き、スリはでき放題、見方を変えれば覗きや盗み聞きもでき放題。接触してもバレないなら、痴漢行為や暴力行為も可能?

(……ダメダメ! それは絶対やっちゃいけない行為!)

思考がドンドンと悪い方へと流されるのを必死に頭を振って払いのけた。

何故かチラつくのが、林田くんがもしかしたらそういう行為を行っているのではないのかということ。

(でもそれだと、私にこの力があることを教えることはしない…はずだよな)

信じたいのだが、ちゃんと会話などをしたのはごく最近。林田くん
のことはほとんど知らないのに等しい。

なんだか、公園に行くのが怖くなってきた。

しかし、林田くんを想像して悪いことをさせても、似合わない。

そういったイメージが極端に薄い風貌のせいか、信じる信じないの
ではなく、感覚的に林田くんはそんなことしないだろうと結論付け
てしまう。

(まー今から会うんだし…その時また考えればいいのか)

私はごちゃごちゃなっている思考の散らかりを端に寄せて、形だ
け綺麗にした。

悶々と考えている内に坂の上公園が見えてきたからだ。

シャーと軽快な音を立てながら坂の上公園に入ると、周りから浮

いたように自転車に乗っている林田くんがいたのですぐ見つかった。
？林田くんー！？

右手をハンドルから離して振りながら、林田くんに声を掛けた。
今来たところなのだろうか、このタイミングで自転車に乗っているのは不自然だ。林田くんは私の声と手の振りに気づくと、同じように手を振り返してきた。

？大原さん。早いね？

早いね、と言われて私は公園の時計を確認した。

11時50分辺りを指していた。

？そう？ 11時50分だから丁度いいくらいじゃん？

林田くんはあれ？という表情をすると同じように公園の時計を確認した。思ったよりも遅かったのだろうか？

？ホントだ。家の時計がおかしかったのかな…？

恐らく時計の電池があまりなくて針が進みにくくなり、時計が遅れていたのだろう。今のご時世なら携帯を使えば時計機能なんて当たり前についているからそっちを見ればいいのに。

？あはは。電池入れ替えないとね？

？だね。今からどこか行くの…？

林田くんは電池の話は切り上げ、今日の予定について聞いてきた。そういえば詳しい流れは説明していないし、思いついてもいない。ただ単に会ってあれこれしようとしていたわけで、具体的な動きは決めていない。つまり私はノープランで土曜日に会おうと言ってしまったのだ。

？あ…？

私は一定の音量で同じ言葉を伸ばして、上を向いて考えた。

自転車のことをさらに深く知りたいのであれば、人目に付きにくい場所の方が良かったかな？いや、でもあの時は私が自転車を出すためであって、今は自転車を普通に出せる状態だから、触れていれば誰からも分からないとすれば、場所の前提は要らないのか。

? んと、知りたいことがあるんだけど。この自転車って他に何か機能はないの??

抽象的な質問だが、どう聞けばいいのか分からなかった。しかし、林田くんにはそれが通じたようで、少し考える表情をさせた。

? : 僕が知っているのは前に話したモノだけだけど、気になっているのはあるね?

? 気になってるの??

すると林田くんは自転車から降りて、前輪寄りに体を寄せた。

? これ、なんだけど?

そう言っ指差したのは、通常の自転車ならばライトの『ON・OFF』のレバーがある場所だった。

? あ?

そこで初めて気づかされた。

この自転車にはライトがないのだ。それにも関わらず『ON・OFF』のレバーが取り付けられてある。

? どういうモノなの? そのレバー?

ライトがないのにレバーがあるということは、別の何かの切り替えレバーであることを示唆しているが、まるで検討がつかない。

? それが試しに切り替えても何も起こらないんだよね。もしかしたらONにしたら皆から見えるかもしれないか思ってたんだけど?

? じゃあなんだろ...?

? : 分からない。一応OFFにしてるけど?

? OFFにしている根拠は??

? 初めてこれに気づいた時、OFFだったからね。安易な考えかもしれないけど、それがデフォルトのような気がして?

それを聞いた私は林田くんと同じように、自分の自転車のレバーを確認した。

これでもし、私のがONであつたらならば、自転車の仕様が違っ

可能性が出てくる。

確認すると、【OFF】だった。

? ホントだ。OFFになってる?

? やっぱりそうなんだ?

私はレバーを数秒眺めていると好奇心に駆られてしまい、パチンとレバーを下ろして【ON】にした。そして自転車全体を眺める。

変形とかがしたらそれっぽくて面白いのだけれど、自転車は私の期待を裏切り、シーンと同じ形状のまま沈黙を貫いた。

? ね。何も変わらないでしょ?

? だね…。一体なんなんだろ…?

少々、思考する沈黙の時間が流れた。

んーと考えていると、林田くんはあることに気づいたように自分の自転車を確かめ始めた。サドルの後方部分を模索しているようだ。

頭にハテナを浮かべた私は直接林田くんに聞いてみた。

? どうしたの??

? うん。この自転車って鍵とスタンドないんだよね?

? 鍵が付いていない…って当たり前じゃない? スタンドは…私達が持っていることが前提だからない。とか?

? うん…盗られる心配はないし、地面に倒すと消えるから鍵はいいけど、もしも自転車を固定したい時ってスタンドが無かったら不便だと思っただけ?

固定してどうする気なのだろうと私は思う。

スタンドで自転車を立たせたまま固定して、所有者はどうするか。触れていなければ存在は消えないし、自転車も消えてしまうのだから置いてはいけないだろうし。持ち疲れて自転車へかける力を軽減させるためにスタンドで固定したいのだろうか?

? んーやっぱり私達が持つてることが前提だからかなー?

? その線が一番近そうだね?

自分の主張があっているとは思わないが、それ以外に理由が見つ

からないのも事実だ。しかし、鍵やスタンドやライトがない自転車というのもなんだか変なモノだと思ってしまう。車で言うならサイドブレーキやヘッドライトの欠落した車というべきだろうか。そんな車が売っていても安全面から見て買う人はまずいないだろう。

少し危険なものだと、私は認識を深めた。ライト部分のレバーの機能も分からないし、そもそもこの自転車のこともよく分からない。？うーん…考えるとやっぱり不思議な自転車…？

私はそう言いながら左手を顎に当てた。

？そうだね…？

林田くんは相槌を打つようにボソリと言った。

？それよりも、公園から出ない？ 公園の真ん中で長居していると子どもとぶつかる可能性もあるし？

林田くんは公園内を走り回る子どもを見て、少し儂げな表情をさせながら提案してきた。そういえば私たちが現在いる場所は公園のほぼど真ん中。今思えばかなり危険な場所に突っ立っているのだ。無邪気に走り回る子どもが私たちの自転車に突撃してきたらと思うとゾツとする。

？だ、だね！ 早く出た方がいいね！？

私たちは慌てながら自転車に乗り込まず、駆け足で自転車を押しながら公園を後にした。

意外な一面

?とりあえず街の方へ出掛けてみる??

学校へ向かう道路の信号で私たちは立ち往生していた。

林田くんは市街地方面を指差し、予定を組んできた。この信号をまっすぐ行くと学校で、左に進むと市街地がある。あまり人通りの多い場所に行くと、この自転車と誰かが接触する可能性が高まるので、私はあまり乗り気ではない。

?大丈夫かな??

一番の心配だ。

?大丈夫。道の真ん中とか歩かずに人通りが少ない道を選べば?手馴れたように林田くんは自転車を押しながら、市街地方面へ迷いなく進んでいっている。聞いてきたのにもう既に決定しているようだった。

しかし、私はそれを止めようとせずに、追従している。

?林田くんはよく行くところなの??

?時々ね。暇つぶしに人間観察とかしてるね。僕のことが見えてない分、みんな警戒心が薄いから、結構面白いことを起こしてくれたりするよ?

?そうなんだ??

林田くんは少し上を向いて笑っていた。趣味は人間観察。誰かさんとそっくりだ。

正直、私には人間観察の面白さが分からない。その人のことをよく知って、悪い面を沢山見ってしまったら、私はその人のことを良く思わなくなるからだ。そういった側面のある人間観察は、意外にもリスクの高いモノなのかもしれない。

?大原さんはどこによく行ったりする??

考え事にふけっていた私はハツと林田くんの声に反応する。

「え、あ、私は…、イーストロードとかを友達と歩いたりするかな？」

「それって今向かってるところだよな？」

「そそ。洋服屋さんが多いから、ウインドショッピングをしいっているの？」

「そのウインドショッピングって良く分からないだよな。見ているだけで買わないって何が面白いんだろって？」

「結構盛り上がるよー！好みのモノをせーので指差したり、値札みて驚いたり、あとは試着もするから試着大会したり、お店の人には迷惑だと思っけど？」

私は思い出すようにニツコリと微笑みながら説明をする。

林田くんは私の説明を思い浮かべているのか少々目線が上に行っていた。

雑談を交えていると、人通りが増え始め、イーストロードに差し掛かったことを示唆する。

休日のイーストロードは人で溢れ返り、学校で見たことがある顔がポツリポツリと居たりする。何分、学校からそれほど離れた位置にあるわけでもないの、こういった市街地には学生が集まりやすい。

「これ、本当に大丈夫かな…??」

人ごみとは少し離れた位置で、私は立ちすくんだ。

ここは一方通行のため、道路が1本しかなく、その1本の両サイドに店がずらりと並んでいる。そのため、歩行者は道路を無尽に行き来している。

私がこの自転車を横に据えていない状態でも、人にぶつかったりするのはここでは珍しくない。見えてないからこそ、避けてくれる人がいない今、この中に飛び込めば必ず誰かにぶつかるだろう。

「大丈夫だよ。ここを進むわけじゃないから？」

?へ??

あつさりと放たれた言葉に、疑問を抱く。

林田くんは自転車を力強く押して、ハンドルを左に切る。

?ちよつと、どこにいくの!??

?こつち?

そういうとずらりと並ぶ店の裏側、人工造りの木と店の隙間というべきか、その間をくぐっていった。私は導かれるようにそちらにハンドルを切り、林田くんの後を追う。

ガシヤンと歩道を乗り上げ、隙間に進入していく。

?うわー!こんなところがあつたんだ?

本当に狭い、幅は2mもないくらいで人が1人通れるくらいのスペースだ。

林田くんは肩越しにこちらを見て、にっこりと笑い、

?ちよつとした隠し通路みたいでしょ?

と子どもみみたいな笑顔で言った。

通路側を見てみると、隙間から人が行き来しているのが見える。

しかし、ほとんどが建物の壁であり景色が良いとは言いがたい。だが、ここを通っている人は私たち以外いないため、隠し通路としては成り立っている。

?よく来たりするけど、こんなところがあつたなんて気づかなかつたなー?

?意外とみんな気づかないんだよね、ここつて。でも、本来なら僕達が歩いていたら視線の的だったろう?

ははつと笑いながら林田くんは通りの方へ眼をやる。

私もそれに釣られて、通りの方へ眼をやった。丁度そこは店と店の間隔が開いており、見通しがとてもよかつた。

その時、

?…大原さん?

?ん? 何??

私は声を出した林田くんの方を向くと、?あれ?といって通りの

方を指差した。

そこにいた人物は、黒髪が流れるようになびき、整った綺麗な容姿に白いワンピースを着た私のよく知る人物。

橋倉 美奈さんが、そこに見たこともない笑顔で歩いていた。

?み、みななん!!??

叫んだ瞬間に、みななんの手前にいる人物が、やけに近いのと、誰に対して笑顔を見せているのかが時間も掛からず判断できてしまった。

背が少し高く、黒髪を下ろして冴えない感じの男の人と、みななんは一緒に歩いていた。

?あ…れ…。み、みな…なん??

男の人と歩いているだけではない。腕を組んでいた。それもみななんの方から。

その姿は正に…。

?あの男の人、橋倉さんの彼氏…かな??

そう、彼氏彼女にしか見えない。それもなんともベタな。

さっぱりとした男っぽい性格で、ボーイッシュないつものみななんが、私の頭の中で崩壊していく。ガラガラとゆっくりと崩れるのではなく、ガラスを叩きつけたような、そんな崩壊。あんな無邪気に笑い、自分から腕を組み、ワンピースを着用しているみななんは、ボーイッシュという言葉が当てはまらない。

彼女に今びつたりな言葉は、『女の子』だ。

?そ、そういえば…今日、予定があるって言ってた…?

脳内には昨日のまーちゃんとみななんのやり取りが浮かんでいた。思い返せば私たちって彼氏がいるとかいないとかの話題はしたことがない。他人の恋愛話ではかなりの盛り上がりを見せるのに、仲

間内では一度もない。みななんやまーちゃんに情報操作を上手くさ
れていたのかも…。

?他の男子が知ったら傷つくだろうなあ…?

林田くんがボソリと言った。

?なんで??

?橋倉さんって結構男子から人気が高いんだよ。よく話しに出てく
ることがあるしね。男の子っばいからかもしれないけど?

?そうなんだ…?

男の子っばいを抜きにしても、みななんは気さくな性格で憎まれ
にくく、スタイルもいいし、なにより美人だから人気が高いのは納
得がいく。

(でも、彼氏がいるならコソコソとせずに私とかトトくらいには言
って欲しかったなー…)

?それにしても、楽しそうだね。橋倉さん?

覗き込むように林田くんはみななんを見ながら感想を述べていた。
私はその姿を見て、ははん?と不敵な笑みを浮かべた。

?もしかして林田くんってみななんの事、好きなの??

唐突の私の投げかけに林田くんはまったく動揺せずに、
?んー好きか嫌いかって聞かれたら好きっていうだろうけど、その
中に恋愛感情は含まれていないだろうね。橋倉さんの人間性が好き
なのかな?

淡々と答える林田くんは、一切の照れを見せずに言い切った。

冗談交じりに聞いた私の中に、居た堪れない気持ちが届くから
顔を出した。

?それにしても橋倉さんの彼氏の人、年上みたいだね?

林田くんの言葉を受け、みななんの彼氏を見てみると、年上の品
格?といったものか、なにやら雰囲気がそう告げている。高校生に
は出せない年上の空気が。

?そうみたい…?

（女子は年上に魅力を感じるとよく聞くけど、みなんはそれだったのか…私自身が年上にあまり魅力を感じない性質だから、なんだかショック…）

何故か友達には同じ感性を求めてしまうのが私の悪い癖だと思う。人それぞれ、人それぞれ…と自身に言い聞かせる。

すると、私たちが覗き見る間から、みなんたちは離れていった。しかし、私たちはそれを追うことはせずに、見えなくなった位置から視線を外さず、じっと止まっていた。

シャー

あれから私たちは目的地を決めずに自転車に乗り込み、当てもな
くウロウロとそこら中を彷徨っていた。さすがにイーストロードを
うろつくことはなんだか気まずいので、その場から離れ、この街で
よく犬の散歩やジョギングのコースに使われている、芝作り緑の小
坂が続くサイクリングロードへたどり着いた。

幅15mほどのグラウンドじみた土作りの面がサイクリングロー
ドと平行して続いているため、野球やサッカー、ドッジボールのス
ポーツや、鬼ごっこや縄跳びなどの遊戯を子どもたちは頻繁にして
いる。このサイクリングロードは1km以上続いているので遊ぶス
ペースは有り余っている。進んだ先には隣町があり、このサイクリ
ングロードはある種の境界線と言えるだろう。

私たちはサイクリングロードへ着くと、近くの公衆トイレで自転
車を手放し、消える力を消し、芝作りの緑の小坂に腰を下ろした。

「はー、こんなに自転車のハンドル握ってたの初めてかも」

私は手を見つめながらグツパをした。

林田くんも自分の手の平をグツパしながら、

「一度握ると中々離すタイミングが掴めないからね」

時刻は既に16時で、私たちは4時間あまりの間、自転車と共に
行動していたことになる。

「だねー。なんだか掴んでないと見えちゃうからダメ！ みたいな
先入観が……」

「はは、確かにそれはあるね」

私たちは談笑を交わしつつ、グラウンドで遊ぶ子ども達を眺めて、

ボケーっつと時間を流した。

「ねえねえ、そういえばさ、なんでこんな能力が使えるようになったのかな？」

私は一番の疑問を唐突に林田くんに質問すると、林田くんは深く俯いて、「それは…」と小さく言った。

その後続く言葉が何故か、重たそうに聞こえた。とても重たそうに。

「よく…分からない…。大原さんを見てみると僕の考えが消えちゃったし」

「私を見てると…？ って、どんな考えだったの？」

気兼ねに聞いた私に反して、林田くんの表情に雲が掛かった。

「…僕はさ、一人っ子なんだよ。それもただの一人っ子じゃなかった」

「え？」

「要らなかったみたいなんだよ。僕の話は。本当は要らなかったのに出てしまった子。それが僕らしい。……実母から言われたよ」

「お母さん…が？」

「うん。流産しようとしたらしいけど、おばあちゃんが止めたみたいで、母さんは、おばあちゃんのことを恨んでる。産みたくなかったモノを産まされたって」

返せる言葉を私は持っていなかった。

とても重たく、軽い気持ちで聞いた私の心には、支えきれないものだった。

「僕は母さんからしたら、存在があやふやなモノで…なんていうか…。いても、いなくても、いや…いないほうがいいのかな…その程度のモノなんだ」

林田くんは一拍置いて、続けた。

「そんな僕だから、存在が無くなるこの力が備わったんじゃないかな…って、思ってたんだけど」

ボソツと林田くんは、「違うみたいだね」と付け足した。

でも、どうか分からない。

私の家も一人っ子だし、お母さんやお父さんからそんな話を聞いたこともないから、本当はどうなのか、知らない。

分からない。

ゾクツと背筋に嫌なものが走り抜けた。寒気と悪寒が交じり合って私の体を強張らせる。怖くなった。突然、ドロツとした恐怖が背中張り付いた。

反面、少しだけ、嬉しい気持ちになった。

それは、林田くんがとてもナイーブな側面を隠さずに言ってくれたからかもしれない。この町に来て、そういった話をした友達はいなかったからだと思う。共感した話ではないし、共感したい話でもないけれど、それを聞いて林田くんを軽蔑するわけでもなく、ましてや避けようなんて思わない。可哀想な人だと少し思ってしまうが、そう思っただけとは言われていない。思われたくないから、話したと解釈するのは難しいけれど、奥を知れたからこそ親密になれた気がする。

「……」

でも、どうしたらいいんだろう。

このとてつもなく重たい空気に包まれた私たちは。

妙なことを口走れば心象を悪くしそうだし、かといってこのまま重たい空気でいるのは針のムシ口と変わらない。でも、どう言えばそれらを回避できるのか、私には分からなかった。ただ黙って、子どもたちを眺めていることしか、出来なかった。

「……ごめんね、つまらない話しちゃって」

「え、いやいやいや！ 聞いたの私の方だし……」

林田くんからの謝罪に私は慌てて両手をパタパタと振って否定した。

逆にこっちが謝罪をしなくてはならなかったのに……、いやでも謝罪したらしたで、また重たい空気になっていたかもしれない。

「今日はもう、帰ろうか」

私は振っていた両手をピタリと止めて、立ち上がった林田くんを見上げた。

夕陽に照らされたその表情は、いつもの笑顔だった。

それが無性に悲しくなった。

「うん……」

何も言えない自分がとても情けない。

こんな時に元氣付ける一言を持っていけば、私はこんな気持ちにならなかつただろう。少し、無力感に触れた瞬間だった。

私たちは互いに自分たちの帰り道を歩いていった。予想外にも、林田くんは私の家と逆方向だった。前に天国と地獄の坂で出遭ったため、家が近いものだと疑わなかった。

「じゃ……さよなら」

「うん。またね」

学校やイーストロードを結ぶ信号に差し掛かり、私たちはそこで

別れた。

私は寄り道をせずに、家に帰宅した。

「ただいまー」

返ってくる言葉はなかったが、ワイワイとお母さんとお父さんの会話が聞こえる。

話が盛り上がっているのか、私の声は届いていないみたいだ。

(何話してるんだろ?)

私はそろりとリビングに向かい、食卓で話し合っている二人を黙視した。

2人は私に気づかず、話を進めている。

「それでねー、水戸さんったらブロッコリーとパセリを何故か間違えて買ったちゃって」

「ブロッコリーとパセリをかい？ それはすごい間違えようだな」

「あはは、でしょー。それでどうやって調理するの？ って聞いたらさ、『この調理方法なんて知らないから…飾りよ、飾り！』って」

「はははは、飾りかー。どうせならパスタを作って振り掛ければいいのにな」

「それ私も言ったんだけど、パスタなんて外食以外で作ったことない！ って言い張るのよ」

お母さんは最近出来たお友達の水戸さんについての話をしているようだった。お父さんも嬉しそうに微笑みながら、それを聞いていた。

「そういえば沙代、いつ帰ってくるのかしら」

そう言ってお母さんは私の方を見た。

私の後ろには掛け時計があるため、自然とこちらを見たようだ。

さすがにモロバレの領域なので、私は小さく手を振って「ただいまー」と苦笑い気味で言った。しかし、お母さんはフイっとお父さんの方へ向き直し、

「ご飯いるのかしら？メールで聞いてみようかしら」

と、遠まわしに私に聞いているのか、単なる嫌がらせなのか判別つきにくいことを口走った。

（うーん。今日誰かと遊ぶとか言ってたし、それで怒ってるのかな…？）

「えーっと…何か分からないけど…、ごめんなさい！」

私は深く頭を下げた。

本当に自分でも何で謝っているのか不思議だけど、お母さんの機嫌を直すにはこれしかない。

「あら？ 沙代いたの。いつ帰ってきたの」

わざとらしい、実にわざとらしい。

「おー沙代、お帰り」

お父さんもお母さんの機嫌を損なわないように合せているようだ。

「ただいま…」

その日の夕食は、水戸さんの話題がお母さんを基点に回り続けた。

突然

7月7日

「いやあくあつついねえ」

パタパタと私の下敷きを扇いで、みななんが私の席を陣取っている。

普通の私なら、席を取り返してもらい、みななんは私の机に腰を預ける形になるが、私は二ヒヒという不気味な笑いが止まらず、それを注意することを忘れていた。

トトもパタパタと手を振って小さな風を送っている。

暑さに負けて、みななんは手持ちの500mlのスポーツ飲料を口に含んだ。

「ねえねえ、みななんっていつから彼氏いたの？」

「ブホッ!!」

私の唐突な質問にみななんは飲んでいたジュースを吐き出す一歩手前までの動揺を見せた。

「い、いきなり何言ってるの!?! わたしゃ彼氏なんていないっての!」

この慌てようは確実に隠していた事柄があらわになってしまった時の反応だ。

私はニマツと笑い、「えー?」と白々しく言う。

「みななん、彼氏いたんだ」

トトはそうなんだーと雑学でも教えられたような反応だった。感じ的に、やはりトトもみななんに彼氏がいたことは知らないようだ。

「だ、だからいないって! ってかなんでいきなりそんな話に!?!」

「ふふふ。私、見たんだよ。みななんが男の人と腕を組んでたところ！」

私はまたニヒヒと不気味に笑った。

「うわーみななん決定的な瞬間見られちゃったね。ここは腹をくくってバクバク！ 暴露しかないんじゃない？」

「うわ！ まーちゃん…」

突然、まーちゃんが話に入ってきた。今日はいつもよりも大分登校時間が早くて（彼女にしたら）失礼に驚いてしまった。

「うっ…ぐ…で、でも自分からじゃ到底言えない…」

みななんは噛み締めるように言った。

「じゃー代理の代打の代弁で私が！」

ガッツポーズをしてまーちゃんが意気込んだ。

みななんはグツと眉間にシワをよせて考えてから、「オ、オブラートにね！ 包み込む優しさでお願いね！」と必死に懇願。

その言葉を受け取ったまーちゃんはドンと胸を叩き、「まっかせなさい！ たっよりなさい！」と堂々とした構えで、ピンと人差し指を上げた。

「簡潔に言つと、さっちーが見た男性は、みななんの彼氏じゃない」

「…え？ 観念したんじゃないの？」

「いや、嘘虚偽うそっぱちじゃなくてね」

「え！ じゃあ誰なの？」

話が進むにつれて、私の席に座るみななんがドンドンと沈んでいく。後ろに縦の効果線が刻まれていくのが目に見えるほどだ。

まーちゃんは沈んでいくみななんをチラリと見てから、片頬を持ち上げて衝撃の事実を吐いた。

「みななんの、お兄さん！」

「……お兄さんって、親戚の？ それとも兄妹のお兄さん？」

みなさんは頭を抱えてプルプルと震えていた。その姿は恥ずかしい部分を盛大に公開して、恥辱に耐えているようだ。

「兄妹の方ね」

ふぐう！とみなさんは抱えていた頭を縦に振った。

私は天井の方を向きながら顎に人差し指を当てて、みななんのとを思い出す。

「あれ、でも…腕組みしてたし、みななんが普段着ないような女の子な格好してたしなにより、幸せそうに…」

「そりゃそうでしょ。なんたってみななんはお兄さんのことが大、大、大好きなブラコンなんだから！」

まーちゃんがみななんにとっての一撃必殺の剛速球をぶち当てた直後、ゆらりと立ち上がったみななんは、ガシッ！とまーちゃんの肩を掴み、低い声を出した。

「…おい、真奈美。オブラートはどうした。包み込む優しさはどうした」

メリハリのある声を低くすると、なんとも闇商売のお偉い方みたいな、強面の風格を備えたみななんさんが出来上がっていた。あわわわわ！とまーちゃんはその圧倒的な威圧感に、捕食される間際の小動物のように怯え震えだした。

「あ、あたしには高くて手の届かないところにあっただようで…」

「まあーなあーみいー！！！」

わーっ！とまーちゃんが脱兎の如く廊下に全速力で逃げ出し、それをみななんがシュバツ！と腕と脚に残像が残るほどの妙にキレのある動きで追っていた。

私とトトは知らなかった事実を知らされ、ポカーンと呆然とそれ

を眺めることしか出来なかった。

「知らなかった…みななんってブラコンだったんだ」

「だから中学の頃、告白されても頑なに断ってたんだ」

トトは納得したように小さく頷いた。

「みななんって告白されたことあるんだ」

「うん。私が知ってる限りだと、4回くらいかな」

「4回も!？」

「知らないの合わせたら5回以上はあると思うよ」

「うわー…みななんってやっぱりすごい人気なんだ」

トトとみななんについて話を進めながら、別で林田くんの言葉を思い出す。

ふいに林田くんの席を見てみるとそこは空席で、未だ登校していないようだった。今日は休みなのかな?と考えながら、男子生徒を見て思う。

(確かに…他の男子生徒はシヨックだろうなあ)

戻らないみななんとまーちゃんを置いて、本鈴が鳴った。

そして、この日の休み時間はみななんをいじり倒した。

どこまでお兄さんが好きなのかとか、お兄さんの特徴や、月に何回デート?(と喋っていいのかわからないが)に行くのかとか、中学生時代の告白についてとか。何回もみななんは暴走しただしけど、最後には恥じらいながらも全て話してくれた。

それがとても可愛かった。

お昼休みの現在、私やトトの質問攻めにあっただみななんは、プシユーッと魂が抜けたように机にへばりついている。恥ずかしさのあまりか、みななんがいつも食べているコロツケパンはまだ半分も消化されていない。

「みななんの告白回数は中学高校合わせて8回! 中学の時に6回。

高校入学時に1回、先月の3日に1回という内訳!」

細かい情報はまーちゃんの得意分野のようで、みなさんの秘密情報をさらさらと答えていた。その度にみなさんはまーちゃんの頭をガシツと掴み、グググ!と力を込めて「このやるううう!」と締め付けていた。

と、そこでみなさんはピタリと静止して、何かを考え始めた。

「そういえば…、さっちはどこでわたしとお兄ちゃん見かけたん?」

「へ?」

そういえば、土曜日は引越す前の家に荷物を取りに行っている事になっている。

私自身がついた嘘だし、それを覆そうものなら確実に怪しまれることは必然。

「えっと、荷物取りに行く前にイーストロードを通ったらたまたま見かけちゃって」

「……………」

みなさんは黙って私を見つめた。

(苦しいか…な?)

「そっかー…」

はあ…とみなさんは自分の失態にため息を付いた。

ちよつと無理やりだったと思っただが、あっさりと嘘が通ったことに安堵と、一抹の不安を過ぎさせた。

(…私、少し嘘が上手くなったのかも。嬉しいとは思わないけど…)

帰りのホームルーム。

散々笑って過ごした今日の学校の締めくくりは、私にとって予想だにしないことだった。担任の先生が残念そうに、クラス全体に聞こえる声量で発した言葉。

「非常に残念なことですが、林田くんがお家の都合で他学校へ転校されました」

「……………」

弾丸が脳をかすめた。

一瞬、先生が何を言っているのかわからなかった。

土曜日に私は林田くんに会った。その時、林田くんは転校のことなんて一言も口走っていない。ということは、土曜日の夜か日曜日に突然決まって、月曜日にすぐ転校？

うっん。いくらなんでも早すぎる。もっと前から決まっていたはず。

私は受け止めたくない現実を見つめるように、どこを見るわけもなく、視界を固定したまま固まった。

「うわぁ…そんな情報知らなかった。不覚…不覚だぁ！」

自称情報通なまーちゃん、悔しそうに手帳をパラパラと捲っていた。

教室全体もガヤガヤと林田くんについての話をし出した。

未だに信じられない。

同じ秘密を共有したばかりなのに、林田くんは何も言わずに私の前から姿を消した。どうして、何も言ってくれなかったのか。その

疑問だけを、記憶を探って答えを見い出す。しかし、収められた記憶の中に、林田くんの項目はあまりにも少ない。

「……さっちー、大丈夫？」

呆然としている間にホームルームは終わっていて、動かない私を心配してトトが話しかけてくれていた。

「えっあっ……？ うん……」

焦点の合わない眼を必死に動かし、席を立つ。足のバランスが取りにくい。頭の中にとろりと霧が掛かっている。

突然、大事なモノをなくした感覚。心臓を絞られるような喪失感。それらが身体全体を駆けずり回って、私を強制的に放心状態にしてくる。

廻り進む

キッ！

私は家に帰ると、そのまま消える自転車を出して、あちらこちらを廻った。

坂の上公園、イーストロードの隠し通路、サイクリングロードなど。この前林田くんで行った場所をしらみつぶしに廻るが、林田くんの姿はどこにもない。17時から廻りだして、既に19時。夕闇が私の視界をさえぎってくる。最後に思い当たる場所は天国と地獄の坂の中腹、初めて私が消える自転車を出したあのため池だ。

自転車から手を離し、消える自転車を消して、小さな土作りの階段を降りた。茂った雑草を掻き分けて、ため池へたどり着く。

が、

そこにも林田くんはいなかった。

頭は重力に逆らわず、ゆっくりと落ちた。

本当に、何も言わずに林田くんは転校したのだと、鋭利な刃物で突きつけられたようだ。

私は、そのまま地獄の坂を登っていった。

（林田くんにとって私って…単なる顔見知り程度だったのかな…。たまたま同じ力を持ったクラスメイト。別に友達ではないってことなのかな）

考え事をしてしていると、いつもなら時間のかかる坂道が、一瞬の出来事のように感じられた。乗り気でない沈んだテンションのまま、帰宅。

「ただいまー…」

……

返ってこない。

不思議と私はリビングに足を運んだ。

カチャカチャと静かに、お母さんが1人でご飯を食べていた。テーブルの上には1人分の料理がラップで包まれていた。私の分かと思っただが、テーブルにお父さんの茶碗が置かれていた。

「あれー…お母さん、私の分は？」

「……」

お母さんは、私のことを気にも留めず、テレビを見ながら変わらずご飯を口に運んだ。恐らく、私が無断で遅くまで出掛けていたのが気に食わなかったのだろう。

そう思ったかったが、林田くんの事と相俟って、ゾクンと背筋が凍った。

『僕は母さんからしたら、存在があやふやなモノで…なんていうか…。いても、いなくても、いや…いないほうがいいのかな…その程度のモノなんだ』

林田くんの言葉が脳内を駆け抜けけると共に息が一拍遅れる。

ブンブンと頭を振って、嫌な気持ちを払いのける。

さっきまで走り回っていたせいで、汗が出て背中が気持ち悪い。これが嫌な気分になる原因かもしれない。

気分を切り替えるつもりで一度部屋に戻って着替え直し、リフレッシュして再度リビングへ向かった。

「……あら、沙代。おかえんなさい」

「え、あ、ただいま」

いきなり機嫌が戻ったのか、お母さんは普段と変わらない口調だった。

「……そういえば沙代の分のご飯作ってなかったわ。お父さん、今日は遅くなるようだし、お父さんの分でもいい？」

「あ、うん」

私はそう言つと椅子へ腰掛けた。

ペリペリとラップを剥がし、まだ冷めていない料理を堪能した。

(……考えすぎだった…かな)

ネガティブなテンションの時にはネガティブな思考に陥りやすいほんの小さなことが、悪い方へ膨らんでいってしまうのはそのためなのだろう。私らしくない。でも、林田くんのことだけは、頭から離れない。

「……どうしたの？ 沙代、なんか暗いわね」

「え、うん…。学校の友達がね…突然転校しちゃって」

「あら、トトちゃん？ 真奈美ちゃん？ 美奈ちゃん？」

「あ、その3人じゃなくて…。最近友達になった人んだけど、何も言わずに転校しちゃってさ。どうしてかな…って」

「何も言わずに転校するってことは、別れが辛かったのかもね」

「え？」

「沙代が一番わかっていると思うけど、友達と離れる時ってとても嫌でしょ？ 加奈子ちゃんや藍那ちゃんと別れる時、悲しくて泣いてたでしょ。その子は多分だけど、別れる時は何も言わない方が少しは心が軽くなると思ったんじゃないかしら」

「でも、何も言わないって…残された方はすごく不安になるよ」

「でしょうね。友達なのに友達じゃないような、そんな不安が過ぎるのは当然ね」

お母さんの発言は私が思っていたことそのままだった。

「大丈夫よ。友達は友達なんだから。相手の考えを汲み取ってあげなさい」

「……うん」

お母さんはテーブルに肘をついて、私をしっかりと見て、にっこりと微笑んだ。

重くなっていた私の心を、その強さで軽くしてくれた。

少し照れくさくなつて、私は静かにご飯を口へ放り込んだ。

林田くんは林田くんなりの理由があつて、誰にもそのことを言っていないのだろう。その理由を知りたくないといえは嘘になるけど、林田くんが下した決断を容易く壊すことはしちやいけない。

(…うん。大丈夫)

その日の寝つきはいつもよりは悪かったけど、嫌な気分はしなかった。

朝、私はいつもより早い時間に起きて、外出の準備をいそいそとして、黙って家を後にした。薄暗い空の下で消える自転車を出し、天国と地獄の坂を下つていき、中腹でブレーキをかけた。そしてたぬ池に足を運んで、朝の光を反射させキラキラ輝くため池を眺めた。(やっぱり、いないよね)

分かつてはいたが、やはり諦めきれず、林田くんを探してしまう。一度だけ眼を擦り、家へ戻った。

帰宅した私は早々とベッドに沈み込み、いつもより遅い登校時間で登校することになった。少しだけついた寝癖を直す時間も惜しむほど、その時間は刻一刻と迫っていた。

「はーはー…」

学校に着いたときには息は荒れ、額や背中や太腿は汗を掻いていた。

本鈴1分前という時間に登校したため、クラスのみんなは各々の席に既に座っていた。目立つとすれば、まーちゃんとみなさんがトトの席で話し合っていることくらいだ。立っている二人はこちら側

に背中を向けていて、私の事に気づいていないようだ。

私は吸い込まれるようにトトの席まで忍び足で近寄る。

「おはよー」

手をひょいと上げた瞬間に、

キンコーンカーンコーン

タイミング悪く、本鈴が鳴り響いた。

そのためか、みななんとまーちゃんは挨拶に気づかず、頭を少しだけ上に向けてから、自らの席へと移動し、腰を下ろした。

少しの間が私の中で流れたが、ドスドスと廊下を歩く筋肉質な数学教師の足音が聞こえたため、素早く自分の席に腰を下ろした。

カツカツカツカツ…

授業は始まり、宮元先生が黒板にスラスラと数式を書いている。私の隣に位置するまーちゃんは、つまらなさそうに教科書を見てから、すぐさま視点を私側に向けた。

「あ…」

目が合った。と思ったが、まーちゃんの視点はその奥。窓外へ向かっていた。

ん？何かあるのかな？と思い、まーちゃんの視点と同じ方へ視点を動かした。見えたものは、いつもと変わらない風景だった。

確かに、吸い込まれるような景色だが、私を無視してこれを見るのはどういうことか。再度まーちゃんの方へ顔を戻すと、まーちゃんは私の消しゴムに落書きを施している最中だった。

「……」

はめられた。完璧なまでにはめられた。

「さっちー今日は休みの休養だと思ってたよ。あたしより登校時間が遅いのって超スーパー珍しいからさー」

と、言いながら落書きした消しゴムを私にジャーン！と見せ付けたてきた。

綺麗に名前ペンを使ってにつこりマークが描かれた私の消しゴムを。

「はい！ そこ！ 久石、この問題だ！」

突然、前のほうから図太い大声が聞こえた。

その声に驚いて前を向くと、宮本先生はビシッ！とチョークをまーちゃんに指していた。

「うげええ！ あたしか！ あたしなのか！」

「いや、当たり前でしょ。私の消しゴムの恨みだよ！」

私もズビシッ！とまーちゃんの持つ私の消しゴムに指差した。

「この次は大原、お前だ」

「え……」

指を差したまま固まった。私からは何もしてないのに巻き添えを食らうハメになるとは。

まーちゃんはよしよし！と握った拳を揺らしていた。

黒板へ向かうまーちゃんを感情の伴っていない目で見つめながら、誰もいない隣の筆箱から消しゴムをゆっくりと抜き取った。

もちろん、描くのはにつこりマークではなく、怒りマークだ。

3人目

時刻は17時50分

今日は17時からコンビニのバイトをしている。んっ！と腕を伸ばし、関節を伸ばす。あまり客入りがよくないため、暇を持て余していた。

そこにベルが一つ。

テンテンテンテ

「いらっしやいませー……え!？」

私がお客様が来店した時に知らせるベルの音を聞いて、軽快に挨拶をした。と、同時に目を疑った。

先頭の40代後半のおばさんの後ろにいる、私と同年代か、それほど離れた歳でない娘がおばさんを盾にするように、ぴったりと真後ろに着いていた。その娘の格好は薄いブラウンの下地に青い花びらが散りばめられたワンピースの上に、水色のタンクトップに近いベストを着ていた。髪は茶色で肩甲骨まである。毛先が軽くウェーブしていて、程よいメイクでしつかりとした顔立ちを映えさせていた。

それだけならば、親子が揃ってコンビニに立ち寄った。と見解していいだろう。

目を疑った理由はただ一つ。

カラカラカラカラ…

その娘が、自転車を連れてコンビニに入ってきたからだ。

普通、コンビ二に乗り物を連れて入る人はいない。キックボードなど小さな乗り物で入っている人も見かけたことはない。そんな見たこともない光景に、私はその娘を呆然とただ立ち尽くして見ていることしかできなかった。

注意しなくては、という概念は脳髄には流れず、傍観という選択だけが流れている。

彼女は、飴の詰まった袋をひよいと手に持ち、カバンの中へ、流れるような自然な動きで導いていた。美しく優雅で手馴れたその動きは、明らかに万引きだった。

次におにぎりを3点ほどカバンに放り込み、紙パックのジュースを1つとヨーグルト1つもカバンに放り込んでいた。

私は目の前で美しく万引きをする彼女を追いながら、口をポカーンと開けていた。あまりの堂々つぷりに思考が追い付いて来ない。カバンを買い物カゴと勘違いしているのかと思うほど、その行為は自然だった。

そうすると、先ほど入ってきた40代後半のおばさんがバイトの先輩の方のレジの前に立ち、数点の商品をお買い上げし、自動ドアをくぐっていく。と同時にその娘も一緒に出て行った。

「……ちよっ！」

「お？ どした？」

少しばかり眺めてから、万引きを見逃した。という思考がやって来て、私は反射的に声を上げた。同時に、ダッ！と足はその娘の方へと吸い込まれるように走っていた。

「お、おい！ どうした！」

後ろから聞こえるバイトの先輩の声は私には微かにしか聞こえな

かった。圧倒的に万引きしていった娘のほうで、インパクトが強いのが原因だろう。

私はコンビニの制服姿のまま、バイト中にも関わらず、コンビニから出て行った。

50mほど地獄の坂とは逆方向へ行くと、彼女はゆっくりと自転車を押しながら歩いていった。私はグツと勇気を絞り、声を上げた。

「あ、あの！」

その声に反応した彼女は一度止まり、右肩ごしに私を見た。

？……？？

そしてすぐに前を向き直して頭をコテンと左に倒し、また自転車を押し始めた。

「ちよ、ちよつと！」

まさかの反応に焦りを含んだ声でもう一度、彼女を止めた。

訝しげな表情をさせながら、また彼女は肩ごしに私を見た。と、その瞬間に何かに気づいて驚いた顔に変貌した。

？え……。まさか、私が見えてんの？？

その答えに、私はやっぱり…と思った。

あんなに堂々と万引きをしているのにも関わらず、先輩はまるで知らんぷり。しかも犯人は自転車を所持している。その意味が私には1から10まで分かる。

？へえ…本当にいるもんなんだ。私と同じやつって？

納得するように頭を揺らしながら私を見て彼女はそう言った。

「えと、あの、その…」

追いかけたものの、彼女に対して何をすればいいのか、まったく

思いついていなかった。ここは万引きを注意すればよいのだろうか。しかし、気になることはそんなことじゃない。

? …… まあ、能力者同士、お話ししましょうか。 …… おおはら? さん??

彼女は私の制服についている名札を見てそう言った。

「あ、つと… おおはらです」

? あ…。 そうなの。 私は空雲。 空雲 そらぐも 結衣 ゆい よ?

不敵に見せた笑顔に、ゾクリと背筋に嫌なモノが走った。

(そうだ、彼女は堂々と万引きをしている人なんだ)

少しばかり私は警戒心のレベルを上げた。

? そうね。 立ち話もなんだし…?

そう呟くと、空雲さんは道路の左側にある小高い緑の芝生の坂の上に自転車を無造作に倒した。

ガシャン! と自転車をぶっきら棒に倒してからガツ! と足で前輪を踏み、そのまま前輪の側面へ座りこんだ。

? まあ、座って?

後輪をペシペシと叩き、私に促した。

「 …… はい」

渋々ながらも断ることが出来ない私は素直に後輪へ座る。

ギシツと2人の体重を支える自転車が嫌な音を立てた。

私は頭の整理を付けつつ、疑問点だけを抜き出そうと脳内従業員をフル労働させた。

「 あ… あな」

? あ、待って。 ONのままだったわ?

勇気を振り絞って質問を投げかけたようとした瞬間に、ボールを払い落とされた。会話のボールを払い落とした空雲さんは前輪のレバー部分を弄っていた。そしてパチンとレバーを上げてOFFの状態

態へ持つていった。

?え???

さらに疑問が沸いた。

この前、林田さんと悩んだレバーの意味を、この人は知っているようだった。

?え? って…このレバー、知らないとか言うわけ??

疑問に満ちた表情をしていた私を見て、空雲さんは聞いた。

得意気というよりも、知っていないではならないぞ?という言い方。けれど、私はそのレバーの意味は知らないし、検討もつかない。黙ったままレバーを見つめていると、空雲さんは納得したように頭を揺らした。

?ふーん? クリアに気づいてまだ経ってないのか?

?クリア???

妙な単語を空雲さんは口走った。

話の筋から考えると、クリアは自転車のことだろうか。

?あーっと。私が命名しただけだけど、この変な力のこと?

空雲さんはポリポリと頬を掻きながら恥らい、自転車に視点を落とした。

【クリア】、なかなか的を射ている名前のような気がする。

?んで、このレバーについて知りたい??

?あ、はい! 知りたいです?

?んじゃこれね?

そういうと空雲さんは人差し指を自身の口元に当てた。万引きについては黙ってて。ということのようだ。

万引きを見逃す代わりに情報を提供してもらおう。分かっている。

万引きは悪いこと。でもクリアの情報はそれ以上に大事なモノ。

うん、そうそう。情報は命!大事!

?……わかりました!?

?よし。まあ、手短かに説明すると、このレバーはクリアに接触した所有者以外が、消えるか消えないかの切り替えが出来るのよ?

空雲さんはレバーをちょんちょんと指で小突きながら説明を続ける。

?レバーがOFFの場合は誰かがクリアに接触するとその人もクリアに影響される。けど、ONの場合はその逆で、接触されてもその人は影響されない?

?つまり、ONの場合は、自分ひとりだけがクリアの影響を受けるってことですか?

?まあ、そういうことね?

この力は、はつきり言って便利だ。

前まで人ごみを気にして、人気の少ないところを通行していたけど、このレバーをONにすれば、誰にぶつかっても安心して通れる前に考えていた、いいことにこれを使おうとしても、クリアの存在があったために実行できなかったが、それら全てを払拭できる。

?お、おおー?

私は目をキラキラさせていたのだろう。

?本当にしらないのね?

空雲さんは少し笑っていた。

?空雲さんはクリアに気づいてどのくらい経つんですか??

質問に、空雲さんは人差し指を顎に突き立てて上を向いた。そして二本の指をゆらゆらと揺らして、?んーざっと2年くらいかな?と思い返すように答えた。

?うわーすごい。じゃあ使い慣れてますね?

?まあねん。プロフェッショナルよ?

えっへんと自慢げに空雲さんは言った。

空雲さんは私より年齢が上を感じる。見た目もそうだし、会話の口調からも伺える。もしかしたら私と同じ高校1年生の時に力を得たのだろうか。そうだとすると私と共通点がある。

? どんな事に使ってるんですか??

? そりゃ万引きかな。ま、いろいろと遊んだりしたけど、最終的には万引きに落ち着くわね?

? 落ち着くって…万引きは犯罪ですよ?

私は空雲さんの声のトーンにまったくいいほどの代わりに映えがないことに違和感を覚えた。万引きが日常的な習慣になっているのかと、私は訝しげに眉を曲げる。

? 犯罪ねえ。じゃあ他に使い道あるわけ??

小笑いしつつ、彼女はそう訊いてきた。

? えっ? なーと…。誰か助けたり…とか?

? あははは。抽象的ね。何? 困っている人を救い出すヒーローにでもなるの? ぶは?

かあ…と私は赤くなった。夢を見すぎな子どもみたいな扱われようが恥ずかしかった。

? で、でも犯罪よりまーしです!?

? ぶーん? あなたっていい子なのね。分かり合えないわ。残念? そういつて空雲さんは書き込まれた眉を上げた。

呆れた。というよりも興味がなくなつたと見ても問題ないだろう。

? …てことは万引き、やめたりしない…んですか??
? モチロンよ。やめたら生活できないし?

空雲さんは手の平を上に向けて首を振った。

? 生活できないって…万引き中心の生活してるんですか!??

? そりゃあね…普通に買い物なんて出来ないし。言ったでしょ?
最終的に万引きに落ち着くって?

空雲さんは意味深に口の端を広げた。

お金なんて持ってないと、遠回しに言っているようだった。

(この人…おかしい！)

本当に日常的な所作の中に万引きを入れている人なんて見たことがない。

私は少し嫌悪感を覚えた。

? ……クリアの力で今までした良いことってなんですか??

? ……いいこと??

何言ってるの?と言わんばかりに空雲さんは顔を顰ませた。

? はい?

? んー…? ……?

………

伸ばし棒はどんどん長くなって、最後にはんんんん?とカーブしたみたいな音になった。考えているのか、考えているフリをしているのか分からないけど、あからさまに「ない」と言明しているようなものだった。

? ないわね?

? ないって…一つも…ですか??

? そーねー。悪いことなら湧水のように出てくるんだけど?

あまり聞きたくないけど、参考までに聞いておこう。私自身が絶対に道を踏み外さないために。

? ……例えばどんなことですか??

? さっきのもそうだけど…。キモい先公に水ぶっかけたりとか、嫌いなやつのお財布盗んだりとか。あとは家族とかを……んーまあ色々やってきたね。ま、今になっちゃ懐かしい思い出ね?

さりげなくすごいことを言っている気がする。

人が困ることを力に気づいたからって普通できるものなのか。でもって懐かしいって…私より1個ほど上にしか見えないから同じ学生のはずじゃ。

？懐かしいって、今も学生ですよね？？

空雲さんはコンビニから万引きした紙パックのジュースにストロ―を差した。そしてチューっと中身を吸い込んで、はあ…とため息をついた。

？そうね…。一応、学生なのかなー。行っていないから分かんないや。あはは？

空雲さんはそう言って乾いた笑い方をした。

？行っていないって入学してないってことですか？？

？んにや、入学はしたよ。隣町の高校に。単純に行っていないだけよ。行く意味がないからな？

？入学したのに行っていないって…親御さん怒りませんか？？

？怒られない怒られない。怒りたくても怒れないし？

空雲さんは気だるそうにパタパタと手をバタつかせた。

この断言した言いぶりだと、家に帰っていないのかもしれない。つまりは家出少女。そう考えると万引き中心の生活も納得がいく。

(あ、でも寝るところとかどうするんだろ？)

そこら辺の民宿とかに勝手に潜り込んで自転車と一緒に添い寝をしているのだろうか。妄想すると、あまりにもリアルにそれをしていそうで、少しだけ考えたことを後悔した。

本来なら確実に関わり合いになっていない人種。クリアという共通点を抜けば私と空雲さんはまるで正反対。

(悪いことが定着してる…私はそれに嫌悪感しか見出せない…)

と、私が考えていると目の前を誰かが歩いていった。

「つかしいなあーどこにいったんだ？」

バイトの先輩だった。そういえば私はまだバイトの勤務中。現在こうして道端で誰かとおしゃべりをしている予定ではないのだ。

先輩は少しイライラしながら首を振って小走りにコンビニの周辺を見回っていた。

?あれってあんたのバイト先の人でしょ??

?…はい?

?邪魔ね…?

ぶつきら棒に空雲さんは眩くと、ゴソゴソとカバンを探り、ハサミを取り出した。

ギョツと私はすかさず重心を空雲さんとは逆方向に移動した。すると空雲さんは先ほど飲んでいた飲みかけの紙パックの淵を切り落とした。そして、その紙パックを片手に持ってクツと後ろに引いて、腕をならせるように前に振り、中身(紅茶)を先輩にぶっかけた。

バシャツ!と先輩のズボンを紅茶が濡らした。

?え、はっ…はああ!??

「うわっ!つつつと! うおっ!」

ドスンッ!

どこからともなく紅茶のしぶきがかかった先輩は、突然のことにバランスを崩し、見事なまでに転倒した。

?あははは?それを見て空雲さんは指を差して笑っている。

?ちよ、ちよっ! な、何してるんですか!??

意味の分からない行動というより、いたずらに対して私は立ち上がって怒号を放つが、瞬間、パシッと腕を掴まれ、グイッとそのまま引っ張られた。

?え!?! わっわわ!?!?

予想外の行動に足腰に力を入れきれず、体勢を崩し、受け身も取れないままガシャン!と身体が自転車にぶつかる。

打ち所は悪くなく、痛みもあまり伴わなかったが、急激な落下を味わった心臓の鼓動は、急速に早くなっていた。

?危ないわねー、あとちよつとで能力圏外だったわよ?

笑いの籠った声がチクリと心臓を刺した。バクバクと響く心臓が痛い。

(こ、この人…本当におかしい…！)

そして、空雲さんはうつむき加減にフツと温度のない息を出した。あんと私は友達にはなれないわね。さ、あんたもクリアを出して。私、もう行くから？

空雲さんは飽きたのか、唐突に言ってきた。

「……………」

だが、私は反論せずに、素直にクリアを出した。はつきり言っただけ以上この人と一緒に居たくなかった。私の持つ常識とはかけ離れている存在のように感じる。同じクリアを持つ林田くん比べてしまっているのが原因かもしれないが、常識を持って考えると、やはり空雲さんの行動は目に余るものだ。

？じゃあね。また、会えたら？

空雲さんは先ほどまで座っていた自転車を持ち上げ、不気味な笑顔と共に、私の前から去っていった。

無言のままその背を見送る。

？……………バイト、どうしょ？

冷静に考えると、私は問題を色々押し付けられているのかも。

はあっと落胆したため息をついて、自転車を押した。

私は、「もしかしたら」の可能性を求めているのかもしれない。

残念ヒーロー

7月12日

空雲さんと別れた日から、5日が経過した。

私はまたしても玄関前で意気込んでいた。

空雲さんの影響によって、私の精神はとてつもなく正しい方向へと向かおうとしている。やっぱり空雲さんのしていたことは許せるものじゃない。クリアの力を使って悪い方面へしか方向が向かなかったのであれば、私は正しい方面へその方向を意地でも向かせる。絶対に悪い方面へこの力を乱用したりしない。

そう胸に誓って、玄関をガラリと開けた。

「いつてきまーす」

午後1時。私はクリアを出して乗り込み、イーストロードへ向かった。

今日はバイトまでの間、友達と遊ぶと親には言っではいるが、私にそのような予定は入っていない。つまるところ嘘をついたのだが、そこがとんでもなく後ろめたい気持ちにさせる。でも、今から私がすることはとても良いことのはず。

その自信を動力に、軽快に自転車を漕いでいく。

シャーツと10分ほど自転車を走らせると、イーストロードと学校の間位置する信号までたどり着いた。目的地はここを左に曲がるが、眼に飛び込んできた映像がまっすぐ進めと脳内を刺激した。

パトカーがサイレンを鳴らしながら走っていたのだ。

キラーンと目は光り、これは何かある！と決め付け、エンジン全

開で自転車を漕いでパトカーを追従した。立ち漕ぎで必死に自転車を走らせるものの、パトカーとの間にはすでに100m近い差が生まれていた。

「速いよー！ 車速いよー！？」

当たり前なことを喚いて汗だくになりながら、追いつこうとする。しかし、サイレンの音は次第に小さくなっていく。

私がしようとしている良いこと。それは単純だが、警察の真似事のようなものだ。

見回りをして、何か事件性のあるものや、危険な出来事と遭遇すれば、クリアの力で解決しようというもの。国家権力はないけれど、クリアの力があれば、それに対抗できる大胆な行動も取れるのだ。傍目から見れば、見回りをするボランティアだが、私の中では正義の味方というカテゴリに分類される。

10分が過ぎたあたりだろうか、完全にパトカーを見失った私は「ぜーはーぜーはー……」と荒い息を立てて、適度なスピードでただただ真っ直ぐ進んでいた。すると、パトカーのサイレンの音が遠くの方で小さく聞こえた。

「サイレンの音！？」

グツとまた足に力を入れて、立ち漕ぎで周りを確認しながら進んでいると、一軒の2階建てアパート（かなりの年数がたっているのか、ボロアパートと呼ばれても納得するほどの外見）の前にパトカーが止まっていた。驚いたことに、その数は3台だ。

明らかな事件性を秘めたボロアパート。

ガヤガヤと野次馬精神旺盛な近辺の人たちが群れをなしていた。その群れの近くに寄って、聞き耳を立てると、なにやら立て籠もりをしているのかなんとか。犯人は40代半ばの中年男性で、人質として捕らわれているのは20代前半の一人暮らしの女性らしい。

私はすぐさま脳内でこの状況を打破する計画を組み立てる。

（クリアを使えば忍び込むのは容易だけど、どうやって犯人の身柄を拘束するか、人質に危険の無いようにするにはどうするか）

考えていると、危険という単語で重要なことを聞き漏らしていたことに気づいた。

犯人が持つ凶器の有無だ。

ベタなアイテムだと、包丁が思い浮かぶ。度を越すと拳銃というアイテムも思い浮かべるが、こんな田舎に拳銃を持って立て籠もりするを人は恐らくないだろう。

警察の動きを確認すると、慌てふためくように落ち着きを隠せない様子だった。まさかとは思うが、こういった状況に対する対応策を持ち合わせていないのか。はたまた、この平和な土地で立て籠もりなんて起きるはずがないと高をくくっていて、初めて出くわした犯行現場なのか。あまり頼りにできる顔ぶれではなかった。

（私がやるしかない…！）

私も初めてこういった状況に出くわしたが、クリアを持っているという安心感が、大胆な行動を突きつける。そして心はそれを嫌とわずに快く引き受けている。

クリアがあるから大丈夫。その自信が私を駆り立てる。

グツとハンドルを握り締め、いざ、敵陣へ。

凶器を持っていれば凶器をまず奪い、相手を部屋の中にあるモノで殴って気絶させる。単純だけど、これ以外の方法がイマイチ思いつかない。相手に暴力を振るうという行為に抵抗を感じるが、正義の味方だつて相手に暴力を振るい、その場を治めている。

不可抗力。この言葉がもっとも当てはまるだろう。

私はボロアパートに人目を気にせず近づく。が、1つ一番知っていないなければならないことがあった。

犯人が立て籠もっている部屋がどこかだ。

(立て籠もりっというくらいだから、鍵は絶対に掛けてるよね…?)
私はまず1階を調べる。

予想があつていれば、全てのカーテンを閉めていて、鍵を掛けている場所が一番怪しいはずだ。1階には全部で8部屋あるが、無用心に扉を全開にしたままの部屋が3つもあつたので、絞られるのは5軒。

まずは101と表札がかかっているお宅から拝見。
と、そこで突然怒号が耳を劈いた。

「何見てんだ! 散らねえとこの女ぶつ刺すぞ!」
ビクッと私は101号室のドアノブに手を掛けたまま冷や汗をかいた。

そのまま静かに後ろを見渡すと、警察、及び野次馬が2階に視線を送って、どうしようかとウロウロしていた。

(あ、私じゃないのか…あと、2階ね…)

視線から逃れば、相手の部屋は2階の一番奥だ。

208号室。そこに犯人が立て籠もっている。

さらに、あの怒号からするに、相手の持っている凶器は包丁とか、そういう刃物の類だと分かる。

私は急いで2階の階段を自転車を持ったまま上がる。階段は208号室とは逆の201号室側に設置されていた。

私は体を横に向けて、自転車も横にして、1段1段丁寧に上がっていく。

重たい必須アイテムと共に階段の中腹に差し掛かったところで、一人の警察官が、果敢にこっちに近づいているのが見えた。

(げっ! まさか階段上がってくるつもりじゃ…!)
うわわわ!と、急いで階段を上がりきろうとするが、速度にすればほとんど上がっていないに等しい。ただ焦っているだけ。

カツカツカツ

警察官が階段を静かに上がってきた。

隙間は無い。私の自転車が幅ギリギリまでのスペースをとっているからだ。上がりきるのは不可能。心臓がエンジンを掻ける間際、咄嗟に横に向けていた自転車を縦に向けて、階段に座り込み、サドルを支える棒と、後輪を両足でしっかりと挟み込んだ。

?ふ、ぎぎぎぎ!?

この行動は、警察官が通れるスペースを切り拓き、耐え忍ぶという苦肉の策。

カツカツ

警察官が私の横を通り過ぎる。

その行動を、冷や汗を垂らしながら追うように見つめた。

硬い顔をしながら上がっていく警察官は、私を気にも留めず、2階に足を踏み入れた。

ふうつと安堵の息がこぼれた。

?よかつ…?

瞬間。

縦に向いていた前輪が横にグワン!と傾いた。重心が崩れ、前輪が振られた勢いで自転車を手放しそうになる。しかし、離せない。離せば確実に周囲の人、約20人近くに私が消えていたことがバレる。

私は一瞬の内に決意した。一緒に落ちていくことを。

?あああああ ……!?

全身の力が抜けて、紙切れのようにひょいっつと自転車と共にダイブする。

下はコンクリート。絶対痛い。確実に痛い。

最悪だ。

ガッシャーン！！

？がふん…！？

地面に自転車がぶつかり、その反動でサドルに頭をぶつけた。落ちる前の体勢が体勢だけに、そのヒット率は、8割はあっただろう。そして見事に打ち込まれたサドルの一撃は脳を揺らし、クラクラと全身から力を奪っていった。

？は、あ…れ……………？

意識が混濁し、目が上を向く。カシャン…と私はそのまま自転車を枕に使い、うつ伏せで倒れこんだ。

コンジョニ

？ん……？？

ふと、目が覚めた。とてつもない頭痛と体のダルさを含んで。

クラクラとする頭をゆっくりと動かすと、辺りは茜色に染まっていた。

見渡すと、警察関係者が数人、それ以外の人気はまったく見当たらず、先ほどまでいた野次馬はどこへ消えたかと思議に思う。辺りの建物は夕焼けに照らされ、影を伸ばしている。

(あれ…？ 夕焼け？)

そこでやっと今の時間帯に気がついた。そして、私は立て籠もり犯をこらしめようと意気込んでいたのに、ただ伸びていただけ。ということにも気がついた。

(私…度を越した野次馬みたいじゃん…)

ガクンッと肩が落ちた。

周りの警察の雰囲気的に、事件は何の問題もなく解決したようだった。その部分には私はホッと胸を下ろしたが、まったく役に立っていない自分自身がとてつもなく切なかった。さらに、頼りにならなそうだと言っていた警察が事件を解決していたのにも、自身の底の浅はかさを知ることになり、落ち込み具合に拍車がかかる。

(…帰ろう…)

下敷きになっている自転車を起こし、フラフラとした足取りで自転車を押した。夕陽が私の輪郭をぼやけさせる感覚に見舞われた。

帰宅した私は程好い時間帯だったので、バイトにそのまま直行。

今日は18時から22時までの4時間だけなので気楽で足取りが軽

い。今日は店長と私の2人だけ。というシフトだったのだが……。

「あれ？」

制服に着替えてタイムカードを通して、いざ店内へ入ると、そこには店長と空雲さんの被害にあつた先輩がいた。

忙しいのを見越して3人にしたのだからかと思いを巡らせるが、あまりこういつた例がなく、頭は不思議と横に傾いてしまう。

「…おはようございます」

私は業務用の挨拶を交わすが、レジにいる店長と先輩は反応を見せなかった。話しが盛り上がっているからだろうか。

「で、紅茶が突然飛んできてこけちゃったんですよ」

「泥水か何かの水溜りの上を車が通ったんじゃないのか？」

「違いますって、本当に誰もいなかったんすよ！」

「じゃあ三本くんが持っていた紅茶をこぼしたんだろ」

「バイト中に紅茶持つて外にいかないっすよ！ そんなに信用ないっすか？」

「いやね、バイト中に何故か突然外に出たくなつたつてだけで、結構なくなるもんよ？」

「僕も何で外に出たのか分からないんですけど…負けが込んでムシクシヤしてた…のかなあ」

私は2人の会話を、固唾を飲んで聞いていた。口の端がヒクヒクと動いたのはまずいことが明るみになるのを畏れてだろう。突然誰もいないところから紅茶が飛んできた。って空雲さんのことそのまま！悪戯心でクリアの存在を匂わせるなんて最悪な悪態だ。

「それにしてもお客さん、減りましたね」

「うーん…」

2人の話はそこで打ち切られたのか、店内を見渡して先輩はそう呟いた。私は言われてから気づいた。お客さんが誰もいない。この

時間帯だと2・3人は雑誌コーナーにちらほらといるのだが、今日は至って静か。店内に流れる最近の音楽が虚しく響いているだけだった。

店長は「はあっ」と大きなため息を付いて、頭をボリボリと掻きつつ私の方へと歩み寄ってきた。

「ん？ おお。大原くん」

思いふけていた中を割って入られたような反応を見せた店長。私はひき笑いしつつ、ペコリとお辞儀して小さく「おはようございます」と挨拶した。

「あれ？ 大原さん今日入ってた？」

先輩は思いがけない私の登場に驚いているようだった。本当に驚いたのは私のほうだと言ってやりたい。

「あ、はい。18時から22時までで、その後新人の尾河さんと交代っていうシフトです」

「じゃあ俺って……」

私の返答を聞いた先輩はジトツとした眼を店長に向けた。

「いやーはっは。見落としていた」

店長は苦笑いを浮かべてはぐらかそうとしているようだ。

「笑ってごまかさないでください！」

しかし先輩はその手には乗らないようで、ムンツと顰めた顔をしている。

「ちゃんと給料は出すよ」

「そう言う問題っすか」

「もしかして……私、入ってなかったことになってました？」

私もジトツとした眼を店長に向けた。

「……あれだよ。色々あったからミスが生じやすい時期なんだよ」

「謝る気は毛頭ない言い方っすね」

先輩は強気な物言い。声はツンツンしてないから冗談だと言う事は分かるけど、立場的に低いバイトマンなのに凄い風格。いや、店

長と仲がいいのかな？

「ごめんなさい」

深々と頭を下げて、店長は威厳をすっぱりと放り投げていた。

「かしこまられると逆にやりづらいですよ！」

「わがままだな君は！」

あれ、なんか店長の威厳が早々に復活してる。

「え、あ、調子乗ってますみませんした」

あれ、謝った！さっきまで強気だったのに謝った！

「…お2人、仲いいですね」

私は疲れた顔を隠して話を広げた。

「パチフレだからな」

店長はふふんと自慢げに答えた。

「パチフレ？」

「パチンコ友達のこと。店長が勝手に言っているだけだけどな」

「三本くんとは結構打ちに行っているからなあ。必然的に結構飯食ったりするし。年の差はあるが境はあまりないな」

店長はリングが何かを掴んだような手の開き方で手首をクイクイと横に回した。

「へえー」

店長は38歳。三本さんは確か21歳。17歳差でもパチンコっというのは話に華を咲かせるのかあ。と感心しつつ、でもなんかそれって変な感じがするなあ、と不思議に思う。

「大原くんも成人になったら連れて行ってあげよう」

キラッと店長は気持ちの悪いウインクを私に放った。

「あ、結構です」

お構いなしに私は容赦なくズツパリと切り捨てた。店長はガーンとムンクの叫びのように口を大きく開けてシヨックを露にした。白くなった店長に三本さんが励ますようにトントンと肩に手を置いている。これが男同士の友情なのかな。いや多分違うかな。

「そういえばーお客さん全然来ませんけど、何かあったんですか？色々って言ってましたし」

質問を投げかけると、三本さんがんーと眉を顰めさせた。

「陰口と思わないでほしいが、新人の尾河君がちょっとね」

「尾河さんが？」

私はまだ尾河さんとあった事がないが、三本さんの口ごもった反応から察するに、当たりの良い人ではないようだ。

「ああ。彼って結構やんちゃのようで、ちょっと悪い友達が多いみたいだね。その友達が深夜にこのコンビニの前を陣取っているんだよね、最近。彼曰くバイトが終わるのを待っていてくれるらしいんだがな」

私は原付をブイブイいわせながらコンビニにたむろっている尾河さんを想像して嫌な気分に陥った。最低だと決め付けるように。

「それで集客率が減っているんでしたら、尾河さんを早く辞めさせた方が良くないじゃ…」

私の提案に店長はガシガシと乱暴に頭を掻いた。

「面接をパスして採用した子をまだ1週間も経っていないのに辞めさせるというのか？そんなことしたら私の面目が潰れかねない」

「で、でもそんなこと気にしないで、このままの状態ですと、イメージは悪くなる一方ですよね」

「そんなことつて…まあ、大原さんの言っていることは正しいけど、様子見もしないまま決め付けるのはしたくないのが店長の本音だよ」私の言い分を否定せず、当たり前障りのないように三本さんは店長をフォローした。

擁護を受けた店長は堂々と張った胸の前で腕を組み、真剣な表情で言った。

「バイトでも雇用しているんだ。使い捨てには極力したくない」

「あ…、そうですね…」

その表情に私はズキンッと心を痛めた。世の中を知らない幼稚で短絡的な自分に少し嫌気が刺したのが原因だ。ダメだからすぐに辞めさせればいいなんて考えは、究極のところ相手を見下した考えだ。クリアの力があるから特別だと私は思ってしまったていて、それがこんな横暴で偉そうな言葉を吐いてしまう原因になっている。反省しなくてはならない。

「今の俺、かつこよかったか？」

店長は自分の言葉で私が改心したと思ったのか、三本さんに得意げに確認をとっている。

「確認しているその姿は滑稽ですね」

さすがパチフレ。切り方に迷いが無い。店長はまたガクンと白くなった。それを見て三本さんはふーっと息を吐くと、私を見た。

「他にも万引きの被害にも遭っているんだよ」

「万引きですか？」

その話題に食いつくように、店長は色合いを取り戻した。

「うむ。監視カメラを見ても何時されたのか分からなくてお手上げ状態だな。どんな巧妙な手口なのか…」

想像もつかん。と店長は小声で付け足した。

(…あれ、それって)

私はこみ上げる不安が体を襲っていることに気づいた。

「その道のプロなんすかね。棚にあった商品が忽然となくなっているんすよね」

「うむ。こちらの確認ミスと思ったほうが自然なくらいにな」

空雲さんだ。空雲さんのことだ。確かにその道のプロ。極めすぎて全世界の中でも手口を知っているのは恐らく指の数より少ないだろう。

私は額に汗を垂らして、「ど、どうやっているんですかねー」と隠すことを決意。いや、約束を守ったと言ったほうが、聞こえがいいかな。

「んで賞味期限が近いのを手前にして、遠いのを奥に奥に」

それからあまりに暇だったので、商品のチェックの仕方や、並ばせ方のコツなどを三本さんから伝授してもらい、少し時間を潰した。

「あのカットインは弱い弱い。せめて金プレじゃないとな」

「金プレでも発展しないと弱いつすよ。店長は金プレで当たったからって過信しすぎっす」

大抵が暇でダラーとしがちだったけど、店長さんと三本さんが商品であったパチンコ関連の雑誌を見ながら談笑しているのに参加して（強制的にさせられて）、パチンコ台の良さとか悪さとかの見分け方とか、何が熱いとかダメとか…。

（釘？ 風車？ 役モノ？ トラ柄？ キリン柄？）

私にはまるで理解が追いつかないことを怒涛の言葉攻めで吹き込まれて、それが一番時間を浪費した。

9時になると三本さんは本来入っていないとのこと、コンビニを後にした。私は店長と一緒に棚の整理や掃除などをし、時たまるお客さんの接客をした。最終的に10時までに来店したお客さんの数は7名ほどだった。

時刻も10時を過ぎ、尾河さんが出勤してきて、私と交代する。

すれ違い様に私は挨拶をした。

「…おはようございます」

「……………」

しかし尾河さんは私のことを完全に無視して、レジへと足を運んでいった。

（む、無視ー！？ 一応私のほうがバイトでは先輩のはずなのに…！）

壮絶な嫌悪感に拳を作らざる負えなかった。

尾河さんのことを初めて見た印象としては、ガラが悪い。というものだった。茶色のショートウルフの髪に、両耳にはピアス穴。年齢は19と聞いていたが、風貌からして20代中盤のようにも見える。

口ごもった三本さんの心情が理解できた。確かにやんちゃそうだが、見た目でその人を判断するのは良くない事だが、情報からして悪い仲間たちといるんだろうな。という背景を想像してしまう。挨拶も口々にしないのだから、そう思われても仕方がないだろう。

パラ…パラ…

私は不機嫌なまま自宅に戻り、ベッドの上で少女マンガを見て、心を落ち着かせる。

しかし、その一方で心の中の取っ掛かりが酷く自分を駆り立てていることを沸々と感じていた。

湿っぽい感覚。今日の事件の出来事が脳内をグルグルと廻っている。

何も出来なかった。何の役にも立たなかった。

「クリア」という特別な力を持っているくせに、何も出来ないなんて。そんなの嫌。

「うん…」

私はマンガをバンツと枕の上に押し付け、立ち上がる。

「よしっ!!」

ふんっ!と鼻から勢いよく空気を吐き出して意気込み、普段着ない、クローゼットの奥にしまっている白のワンピースに着替えた。

一抹の成功

「つてよー!」

時刻 23時30分。

「なんだそれ、つまんねえなあ」

原付や中型バイクが3つ並ぶコンビニの前。

「もっとおもしろーのねーの?」

コンビニの縁石に尻を置き、ポテトチップスやら雑誌をまるで自分の部屋かのように散らかす粗野な振る舞いを平然と行なう柄の悪そうな男3人。

ピクピクと憤りを動力に動く私の目尻。

?こんなに…ひどいなんで!?

私は欠けた円を作る男たちの前に、自転車を掴んだまま、ドンツと圧迫のあるように立っている。とはいっても、私の姿はクリアで見えていないから、相手には何の圧力もかけられていない。

コンビニの前でたむろって談笑する彼らは、間違いなく尾河さんの友達だろう。チラリとコンビニに目を向けては尾河さんを見て悪く微笑んでいるのがよい証拠だ。

私は不快感を隠さないムンツとした表情を彼らに向けて、やはりここは追っ払うべきであると考えを煮る。いくら同じバイトの人の知り合いでも、ここまでマナー・モラルを無視したのであれば、許すわけにはいかない。

私が働くコンビニでもあるのだから、この人たちのせいで売上に影響が出て潰されるなんて考えただけでも苛立ちがこみ上げる。店長さんは譲歩しているのに、尾河さんはこの人たちを注意しようともしていない。

(さいつてい！)

ギユツと力強く握られたハンドルからギシツという音が漏れる。

(こうなつたら考えた通りの実力行使で、この人たちをここに近づかせないようにしなくちゃ！)

ギリリとした憤怒の眼を、馬鹿みたいに大口を開いて笑っている彼らに向けながら、一步、また一步と歩み寄る。

カラカラ…カラカラ

車輪を響かせ、彼らの前に到着した。

ゴクリと緊張の唾を飲んでから、ふー…と一息をついて、目を瞑り、鼻から息を吸って？うん！？と決心をその場で固め、目をパツチリと開いた。そして、彼らの食べかけのポテトチップスの袋からポテチを一枚取り出し、1人の男の人の頭の上に、そつと乗せた。存在が分からなくなっているの、別にそつと置く必要などはないのだが、どこかに抵抗を感じているのだろう。

そうしてから、別の一人の後ろに周り込む。その時、彼らの1人が頭の上のポテトチップスに気づいたようだった。

「おい、お前頭に何乗せてんのっ」

口を尖らせて、笑いを隠しているつもりなのだろうが、その声は明らかに嘲笑が混じったものだった。指摘された男は眉を顰めつつ、ゆっくりと頭部に手を伸ばしていった。

ポンツと手のひらで頭部を押さえた彼の手の中から、ぐしゃっというポテチの潰れる音が聞こえた。

「ぶっは！ なに潰してんだよ」

見ていた男は口から空気を噴き出した。指摘された男は潰れたポテチの残骸が目の前に落ちるのを見て、口の端をピクピクと動かし

た。
「はああああ！？ 何でこんなもんが頭の上に！？」

手のひらにこべりついた油のついているポテチを見ながら、男は絶叫した。

予想通りの展開だ。私は得意げな笑みを浮かべながら、ニシシと笑いつつ、回り込んだ先にいる男の左手を掴んで、左隣にいる男のお腹の方へ、その左手を放り投げた。

放り出された左手は、左隣の男のお腹に直撃して、バシツと軽い音を立てた。

「うえ？」

クリアで動かされた手は無意識下で左手が動いたように感じるのか、左手の勝手な行動に男は突飛な声を上げた。

「んだよ」

殴られた男の方は不機嫌にその左手を掴んで、仲間である男を睨みつけた。

「いや、勝手に動いたんだよ」

「勝手に動くかよ。脚気が腕にきたのかよてめえはよ」

口論を始めるのも私の想定範囲だ。

少しずつ奇怪な現象がこの場で起こっていると、認識させていかなくってはならない。

私は口論で視線が離れている隙に、雑誌を手に取り、適当な場所へと投げつけた。

バサツ！と音を立てた雑誌に、3人の視線が一同に集まった。

「え！」

ポテチの男は顔を強ばらせた。

「だ、誰だよ。投げたやつ」

左手で攻撃した男は、そう言いつつ、視線をキョロキョロと何かを探すように動かし出した。

「……」

攻撃を受けた男は、ただ固まっていた。恐らくこついつたことが苦手なのだろうか。

？次は…どうしようかな？

3人の素直な反応を見て得意になった私は、他に何かないかとイキキしながら辺りを見渡す。幽霊のフリをするのがこんなに面白くない。と、私は胸を高鳴らせる。

？お！？

私は道端に落ちていた小石に目をつけて、拾い上げた。3cmくらいの小さな石を一度眺めてから、私は腕を下に引き、勢いをつけて思いつきり上空へと投げた。

非力な私が重力に逆らう上空へ石を投げても、滞在時間は少なく、すぐに石は落下体勢に入り、降下してくる。

「はっ！」

キョロキョロと視線を動かしていた1人は、空から降ってくる石を視界に捉えたようだ。

カッーン！

欠けた円を作っていた3人の丁度中央に、石は程よく落下した。

「……」
「……」
「……」

3人は互い互いに視線を合わせて、誰も石を上に向けて投げた動作なんてしてないよな。という目配せをみると、たらりと汗を額に流し出した。

「や、やべえ…よな」

片頬をピクピクと動かして、ひ弱な声を出した。他2名はポケットの中に手を入れて、カチャカチャと音を出していた。

一人がバツと出したものはバイクの鍵だ。

「やべえって…やべえって！」

3人はすぐにその場から去ろうと各々のバイクへと向かっていった。

?よし!?

ここからがこの力の見せ所。さっきまではちよつとしたポルターガイスト現象だったけど、次なる作戦は失神モノの驚きと恐怖を彼らに与えられるはずだ。

「おい！ 早くしろ！」

2人の男はヘルメットも被らずにバイクのエンジンを吹かせて乗っていた。

「くそ、くそ」

しかし、もう一人の男は慌てていて、鍵が鍵穴を捉えられていないようで、未だにエンジンは静かなままだ。

私はそれを見越して彼らのバイクが向いている方へ先回りする。

早くこの場から去りたい心中ならば、そのまま前進すれば帰れる方角へ向けているはずだ。

ここまでは予想していなかったが、彼らの向いている方は地獄の坂と隣り合っている林が立ち並ぶ道路だった。普段は何とも思わなただの道路だが、夜になると歩道と平行する林がざわめいて、妙に背筋を冷たくしてくる不気味なところだ。

?うー…?

打って付けなのだが、私自身も夜のこの道は好きじゃないし、踏み入れたくない。

考えていると、ブルルンっとエンジンの掛かる音が聞こえた。

?あ?

3人とも出発できる状態。急がなければならぬ。

私は止まっていた足を進めて、すぐに林の中に軽く入った。

「尾河にはわりいが」

彼らはそう言うのとハンドルを回した。

私はそれを見計らって、クリアから手を離れた。

(これでいっちょあがり!)

異界にでも繋がっているかと思える林の中から、突然、白を基調としたワンピースを着た女の子が現れれば、もう『それ』にしか見えないはずだ。

不気味に見開いた私の目に、彼らの顔が映る。

口を曲げに曲げ、目玉が飛び出るかというほど見開き、啞然とする。恐怖に身体は震え上がり、眼は釘付けにされてしまい、前進しながらも私を見る。そして私はクリアを掴みなおし、姿を消す。これで彼らは確信するは…

ブー…

彼らが、猛スピードで横切った。

私の妄想を他所に、発進させた彼らのバイクはすぐに私とすれ違い、彼らの姿は見えなくなった。

ンンンン…

「……は?」

ガシャン！とクリアが音を立てた。

私が見た彼らの顔は、横顔と、強いて挙げるなら後頭部だけ。

「え、反応なし　！？」

タイミングが違った？林で私が見えなかった？一般人と思われた？
答えは分からないまま、彼らのバイクの音が離れていくのだけが
こだました。

頭と肩をダラリとさせた私は、トボトボとゆっくり歩き出し、帰
宅することにした。

「…まあ、一応、追い払った…のかな…」

最後のシメ、メインディッシュが消化されないこの状態は何だか
モヤモヤするが、目的であるコンビニから彼らを追い払うことは達
成したのだ。喜んでいい。喜んでいいんだぞ！私！

「……………ううーん」

私は頭をポリポリと搔いて呟いた。

「でも、なんか…違うんだよね…」

真夏の油断

ミンミンミンミンミン

「あつい……………」

ミンミンミンミンミンミンミン

「あついいー！」

ベッドの上で悶え苦しむ私は、ゴロンっと横へ転がった。
ドサツ！

フローリングの床に落ちた私は、「うひー」と奇抜な声を上げた。
床は少しだけひんやりとしている。ベッドと比べればこれは極楽。

ミンミンミンミンミンミンミンミンミン

「あつい……」

自らの熱で、フローリングの温度も上昇。逃げ場がなくなってきた。私はぐったりとした身体を起こして、階段へ駆けた。
ドツタドツタドツタ

勢いよく降りて、すかさずリビングに行き、冷蔵庫の取っ手を引っ張った。

ガパン

詰まったような音を鳴らして開いたそこには、私の求めていた麦茶の入ったプラスチックの…

「ない……麦茶、はいつて、ない……」

薄っすらと涙を浮かべて、私は冷蔵庫内を凝視する。

「あー！」

見つけたのは、スポーツ飲料の入っている2000mlのペットボトル。迷いなく私はその頭を掴んで引っこ抜いた。ポチャン

中身は、薄皮一枚分しかないスポーツ飲料。

「……」

ガクンとうな垂れながら、「飲み干しなよ……」と落胆しながら呟いた。そのまま私はキャップを外してラツパ飲みをした。

「は……足りない」

居間を見ても誰もいない。お母さんは多分、水戸さんのところに遊びに行っている。お父さんは居間に立掛けられているゴルフクラブのキャリーバッグないところから見ると、ゴルフに行っているのだろう。

少しだけ立ち止まって無意味に暑い温度を肌感じてから、私は氷室の取っ手を引いて、キンキンに冷えている氷を口の中に放り込んだ。

「ほほはひほーはなー」

氷を口の中で転がして、私はどこに行こうかと考えを練りながら、自室へ戻った。

戻った私は携帯を手に取り、時刻を確認した。

「んー11時かぁ」

適当にぶらつくにしても、この日照りでは音を上げるのにそう時間は掛からないだろう。出来れば涼しいところがいいけど、スーパーとかに行く気もしないし、一人でイーストロードに行っても面白くない。どうしたものか。

私はいつものお気に入りの服に着替えて、居間へと足を運んだ。ピツと着けたテレビには、天気予報が映し出された。

「うわー、今日って34度もあるのかーそりゃ暑いはずだ……」

具体的な数値を見て、私はさらにな垂れた。

心も身体も涼しいところを求めなければ、今日は耐えられない。

「んー…涼しいところ…」

そう考えて一番に思い描いたのは、プールだった。しかし一人で行く気はしない。でも、みんなを誘う勇氣もない。いつもは大抵まーちゃんが遊びを主催して、メールを送ってくるのだが、最近はそのメールが来ない。恐らく何か別のことに熱中しているのだろう。人間観察が趣味とっていたから、それ系なことを。

早く飽きが来るのを祈りつつ、私は水からイメージしたある場所に向かうことにした。

私は玄関を閉めて鍵を掛け、クリアをいつも通り何も無いところから出現させた。

乗り込んで向かった先は、イーストロードを抜けてさらに10分以上は掛かる場所にある、水族館だ。

？水族館なら、絶対涼しい涼しいはず！？

誰かさんの真似をしながら、私はペダルを漕ぐ。

坂の上公園に差し掛かると、セミの声が一層強まって、暑いぞ！暑いぞ！と何度も訴えかけられているようで、身体がダルくなった。

？だ、ダメだ…？

まだ5分くらいしか漕いでいないのに、私はハンドルに肘を置いて止まってしまった。

？水分補給が必要だ…？

前傾姿勢のまま、私はそこら中を左見右見して自動販売機を探す。しかし、辺りに自動販売機はなく、やむを得なしに私はペダルに掛かっている足に力を入れた。

しばらく進むと交差点に差し掛かった。真っ直ぐ行けば学校で、左に行けば市街地に出る。私は迷わずハンドルを左に切った。

そこから300mほど進むと、並木道が現れ、200m近く伸びている。私は緑いっぱい清々しい影を作っているその道に入った途端に、視線を上にした。木漏れ日がとても綺麗だ。私の表情は自

然と朗らかになった。

？ここもここで涼しい？

夏の暑さが続くのは変わりないが、並木道はその暑さを半減しているようで、居心地が良い。ここにはベンチがなく、それが悔やまれる。ペースを落として自転車を進めても、たった200mの距離なので、3分も掛からずに並木道は遠のいていった。

？お！？

そうして少し進むと、前方に自動販売機が見えた。私は自転車を自動販売機の横につけて、お財布から150円を取り出した。買うものはさつき家で飲んだスポーツ飲料と同じ物だ。私は自転車から身体を離すことなく、少し無理な体勢で投入口にお金を入れて、ボタンを押した。

ガシャン！

大きな音を立てて取り出し口にペットボトルが落ちてきた。

私はそれに手を伸ばそうとしたが、

？ん？？

妙に纏わり付く視線を感じて、振り返った。

ジョギング途中のバイザーを被っているポニーテールのお姉さん。杖をついているおじいさん。携帯を片手に持つサラリーマンが、「私」というよりも、「自動販売機」を訝しげな表情で凝視していた。

私は気まずい顔をして、視線を泳がした。

？え、え…一体なんでしょ…？

そこまで発言してから、私はハッと気がついた。

？あ！ 私って今消えてるじゃん！？

消えている私が自動販売機で何かを購入した。傍から見れば、勝手に自動販売機から商品が出たと取れる。

私がいなくなったという表情をしていると、3名は恐る恐るだが、着実にこちらに近づいてきていた。

?うつ…?

確か自分の体重よりも重いモノはクリアの効力を受けないという最大積載量があったはずだ。つまり自動販売機は消せる対象にできない。そんな状態で取り出し口を開けようとすると、重力に逆らって勝手に開いたと見えるはずだ。こんなにまじまじと見られている中でそれを行なうことは暴挙。いや、そもそも自動販売機を消せたらそれもそれで大変なことになる。

グツと堪えた私は自動販売機の取り出し口を物悲しい表情で一度見つめると、悔やむ思いでペダルに足を掛けた。

?ごめん…ごめんね!?

まるでわが子を置き去りにしたかのような心情で、私は仕方なしにその場を離れた。

シヤコ…シヤコ…

喉が渴いた。さっきの緊張のせいもあってか、渴き具合に拍車がかかっている。水分で満たされていないからか、頭も少しボーっとする。セミの声が目をつんざく。

?あー…つー…いー…?

愚痴は自然とこぼれる。

あれからも自動販売機は目に付いたが、必ずと行っていいほど歩行者が居て、私は買えずにいた。交差点を左折して、遊歩道に入り、進んでいくと、本来の目的である水族館が姿を現した。

ドーム上の規模の小さな水族館で、北極クマとかイルカはいないけど、様々な魚や亀とかが沢山いるらしい。一番の見世物はペンギンのようだ。

私はサドルから降りて、自転車を押しながら水族館に近づいた。

?おー?

建てられてからそれほど年月が経っていないらしいが、建物の外装はノスタルジックな淡い白を基調としていて、この町とマッチし

ている。そういう風に建てることでこの町の景観を崩さないようにしているのかもしれない。

私はペンギンが描かれている看板の横を通ると、入場券を扱う窓口に並ぶ人たちを見て考えた。

（買った方がいいかな…でも見るだけならあんまり悪いことじゃなさそうだし…）

物を盗るわけじゃないしいいよね！と、自分自身を納得させた。お財布事情もさることながら、先ほどの自動販売機の件が、緩慢な考えを引き起こしているのかもしれない。

私は入り口に人が通らない頃合を突いて、水族館に入場した。

？わー！ 綺麗 ！？

館内は当たり前といえば当たり前だが、水をイメージした色合いで、深い青から水色などの色彩が詰め込まれていた。湾曲する廊下のいたる所に水槽窓があつて、珍しい魚やクラゲなどが観賞できる。冷房も掛かっていて、求めた通りの結果に私は満悦な表情になった。クリアを右手側に持ったまま幻想的な湾曲した廊下を歩くと、ふれあい広場という柵で囲まれたスペースがあり、その中には小さな亀がたくさん放たれてあつた。子どもたちがそのカメを人差し指で小突いたり、勇気のある子は持ち上げたりしている。

私は歩行速度を抑えて、その温かい光景に微笑んだ。

程なく進むと、逆三角形の水槽の中に、グッピーという小さな魚がいた。逆三角形の上には親指ほどの大きなグッピーとそれより一回り小さいグッピー、中央には中くらいのグッピー、下には子どもなのか、糸のような小さなグッピーがいた。

…？ なんて分かれているんだろ…？

私は停止して、水槽窓とクリアを平行にした挟まれた状態を気にせず、身体を横に向けて疑問を抱いた。

上の大きいのが父親、一回り小さい綺麗なのが母親だとして、下が子ども。中央は…兄姉みたいなの？でもそれだと、同じ水槽内なの

に何故、離れ離れなのだろうか。寂しくないのかな？

「ねーねーおじいちゃん」

そう考えていると、後ろから小さい女の子の声が聞こえた。

見てみると、10歳ほどの女の子がグッピーを指差しながら、おじいちゃんと呼ばれたご老人の袖を引っ張っていた。

「なんだい？」

「なんでこの子たちは離れ離れなの？」

女の子は私と同じ疑問を抱いていて、口を尖らせておじいちゃんに聞いている。

「ああ。これは親が子どもを食べてしまわないようにしているんだよ」

「え！??」

盗み聞きしていた耳に衝撃の事実。私はまじまじとグッピーを見た。

「なんで？ お母さんが産んだ子どもなんでしょ？ もしかして産んだことを忘れちゃったの？」

素直な疑問を投げかけてくる女の子に、おじいちゃんはうーんと眉を潜ませた。

「このね、身体の大きなグッピーがお母さんグッピーなんだよ。この大きさだと、この小さな赤ちゃんグッピーは簡単に口の中に入ってしまうからね。それを餌だと勘違いしてしまうんだよ」

おじいちゃんは水槽に人差し指をコンツと押し当てつつ、説明をした。

私はそれを聞いて、

（へえー！ この大きい方がお母さんなんだー）
と、新発見に喜んだ。

学校で3人に会ったら豆知識を披露してやろうと私は心に刻んだ。今からでも「へー！ そうなんだー！」と目を丸くする姿が脳内に流れてくる。

そうやって私が妄想に浸っていると、「違うのを見に行こうか」とおじいちゃんの声が聞こえた。チラリと横目で見ると、おじいちゃんと女の子は私の方に近づいてきていた。

まあ避けてくれるだろう。という考えが過ぎった瞬間に、

?はっ!?

自分が何を掴んで立っているのか。それに気づいた。

私は慌てて水槽窓に背中を預け、自転車をグイッと力任せに身体に押し付けた。おじいちゃんの左手を取っている女の子と壁との間は50cmほどしかない。

ギリギリ、クリアにぶつかることなく通り過ぎてくれるかも!と、思ったその時。

ハンドルの突出に気づいた。

?あ?

というのも束の間。コツと軽い音がして女の子の左肩にクリアの右ハンドルにぶつかった。

(やっば!)

クリアの消える効果が発揮されるのは、クリアに触れること。その条件を、この女の子は満たした。つまり、女の子はクリアの影響を受けて、存在が消える。姿が消える。手をとって歩いていたはずの女の子が、おじいちゃんの前から消えるということ。

緊張に私の肩は吊り上げられたように竦んだ。それはまるで近くに置いてある爆弾の導火線に子どもが火を放ったような感覚だ。

?

っ!?

絶体絶命。

「クリア」という存在が知られる。

私は現実から目を背けるように、ギョッとまぶたを閉じた。

トコトコトコ

暗闇の中聞こえるのは、遠ざかっていく軽い足音が二つ。恐る恐る目を開く。

?.....??

私の想像と相反して、おじいちゃんは気にした素振りも見せず、女の子の手をしっかりと握って歩いていた。女の子はハンドルに左肩をぶつけたせいでグラリと少しだけバランスを崩していたが、なにに当たったのかさえ気づいていないのか、何の反応も無く平然と歩いていっていた。

?あ、あれ??

冷や汗が背筋に嫌な感覚を運んでくる。

(確かに今.....触れた.....よね)

呼吸が少し早くなる。

(でも、何ともなかった...?)

?.....??

一拍置いて、はぁー.....と安堵の息を大きく吐いた。

?よかった.....。それにしても、何で影響を受けなかったんだろ?

クリアに触れれば、触れた者も影響を受けるはずだ。触れれば影響を受けるといふ効果が適用されないようにするには確か.....。

?レバー.....!?

空雲さんの会話を思い出し、私はレバーを覗き見た。

?!?

前傾姿勢になって覗くと、レバーはすでに下ろされたONの状態だった。

?あれ...? いつONにしたっけ??

確かこのレバーの説明を聞いたのは6日前の空雲さんと会った時だ。三本先輩に紅茶をかけたことが衝撃的で、私はレバーを意識するのを忘れていた。そういえば立て籠もり犯を捕まえようと意気込んだ時も、レバーに触れた記憶がない。

（あの階段から落ちた衝撃でONに入っちゃった…とかな？）

私は小首を上げて顎に親指を当てながら推論を立てた。

（まあ、助かったんだし、ナイスアシスト！）

そして完結し、次からはレバーも意識しようかと心に決めた。

？んー…そういえばもう入場しちゃってるんだから、別に消えてる意味…ないのかな？

私は辺りを見渡し、来場客を観察した。何か入園料を払ったことを証明する物をも身につけているのではないかとジーツと目で追っていく。

しかしそれらしき物は身に着けていない。

？よし…！？

私は鼻を鳴らしてお手洗いに駆け込んだ。

追跡者

「ふう」

私は誰もいないことと、もしかしたらと思い監視カメラ（普通トイレには設置されているはずがないが）を確認して、クリアを離れた。私が個室から出ると、お手洗いに来た人がいたので、自然な動作で蛇口を捻り、手を洗う。

手を乾かして、廊下に出た。正面に横長い水槽窓が設置されていたので中を見てみると、エイが悠々と泳いでいた。

プレス機で潰されたような平たいボディに、妙に長い尻尾。ゆったりと泳ぐエイに私は何故か釘付け。

（なんだか…トトみたいだな）

とても失礼？な印象を抱いた自分に私は軽く笑った。そうして水槽窓に手の平をつけて見てみると、

「ね、お兄ちゃん、次はあれ見に行こ！」

聞き慣れた張りのある声が耳に入ってきた。

「？」

振り返ると、綺麗な黒髪を揺らす白のワンピース姿の女性と、薄手で半袖の白のパーカーに青のダメージジーンズを履いた男性の後ろ姿が目に入った。女性の方は男性の腕に抱きついて歩いている。なんともベタな彼氏彼女だ。

少なからず羨ましい目を向けてからエイの方を向き直して思いふけた。

（こーいうところに一人で来てる私って、どー映ってるのかなー）
という疑問と、

（ん…？ お兄ちゃん？）

という疑問の二つ。

(……………)

後者の疑問に違和感を抱き、目線を上にして考えた。その時間、約1秒。

「ん!？」

眉を曲げた私はバツと急いで先程のカップルが進んで行った方を見直した。

カップルは既に湾曲した廊下に飲み込まれていた。が、ソロリソロリ

代わりに別の二人が目についた。

「……………」

まるで誰かを尾行するように、足音を殺して歩く二人の女の子。年端は私と同じだろう。いや、同じだ。

先頭にいる黒のTシャツに迷彩柄のショートパンを履いた黒髪ポニーテールの子の手には、手の平サイズのシルバーのデジカメが握られている。その後ろで、白の下地にエメラルドグリーンの花が散りばめられているフリルのワンピースに、黒のショートパンツを履いたふんわりした女が足並みを揃えていた。

「なんだかドキドキするね〜」

「シッ! 見つかったら抹殺瞬殺されるよ! 小言一つであたしたちの生死が左右されるのだよ!」

「あわわ」

慌てて口を両手で塞ぐふんわりとした女の子。

一部始終を見た私は、ガクンと脱力したように肩は自然と降りて、口の端がピクピクと動いた。

「ま、まーちゃんと、トト……………」

見慣れた後ろ姿の人物を的確に割り出し、廊下に消えて行ったあのカップルを見つめ、

「みななんと…お兄さん……………」

そう呟いてから、心の中で叫んだ。

(盗撮する気だー!! じゃなくて)

ワンテンポ遅いツッコミを始めにしてから、落ち着きを取り戻すが如く、鼻から息を大きく吸って、まばたきを一度だけして、

(一体何してんのー!!??)

と改めて驚愕。湾曲した廊下に飲み込まれていく二人を慌てて追った。

タツタツタと人目を気にするのを忘れて小走りをした直後、まーちゃんとトトの突き出したお尻が姿を現した。慌てて追わずとも、足音を殺して歩いている二人の歩行速度はカメのように遅い。

私は一般人となんら変わらない素振りで、二人の後ろに着いていてみることにした。みななんを尾行している二人の反応が気になつたからだ。

「ホントにカッブルみたい」

トトは物珍しい光景に好奇心が先行してしまい、自分たちが恥ずかしい格好で尾行しているのを分かっていないようだ。まーちゃんの方は多分、分かっていてやっている気がする。私の中で、こういうことに小慣れていそうなイメージがある。

私は手を後ろで組んで、あちらこちらを見渡しながら尾行している二人を尾行する。そうしていると、妙に湿っぽい気持ち顔を出した。それは楽しそうにみななんを尾行する二人を見てだ。

(……なんで、誘ってくれなかつたんだろ)

三人の輪の中に入ってから、まだ2ヶ月とちよつと。それほど濃密な時間を過ごしたわけでもないから、三人からしたら私はまだ花の咲いていない、つぼみのようなものなのだろうか。

彼女たちの接し方は、すごく好きで、すごく心地がよい。知り合

って間もないのに、なんだか昔から知っていて、友達だったような、そんなよく分からない懐かしさが感じられる。

だからだろうか。まーちゃんたちからしたら些細なことかもしれないけれど、少し傷ついてしまっている。

そんなちよつとしたナイーブに陥った私を余所に、突飛な声が上がった。

「うひょー！ あっついあっついぞおーおふたりさーん！」

静かに！と言っていたまーちゃん自身がすでに暴走している。この水族館は円ではなくカマボコのような形をしていたらしく、曲がり角でまーちゃんとトトは先を覗き込んでいた。何かとゆっくりと顔を覗かせ、みなさんの方を見てみると、お兄さんとジューズを回し飲みしている様子。

まーちゃんは今だ！とばかりにデジカメのシャッターを連打し出した。さすがにこういった場面を物として残る写真に収めるのはどうかと思う。

ここは止めた方が良いか。でも、止めたら止めたで空気の読めないやつとか思われかねない。

(うーん…【止める】じゃなくて、【結果的に止まった】にすれば自然…かな?)

この場に誘われていない私が、「やっぱり、まーちゃんとトトーだー。こんなところで会うなんて奇遇だねー」と話しかければ、まーちゃんはカメラの手を止めてこちらに集中するはずだ。そうなれば後はその場しのぎで何とかかなる…いや、させる！

グツと拳を握って完璧だ！と確信してから、曲がり角からのぞき見るまーちゃんの肩を人差し指でトントンと小突いた。しかし、

「激写激写！」

まーちゃんは撮影、いや盗撮に夢中のようで反応を示してくれな

かった。

(ど、どんだけ必死なの、この情報屋！)

私は小突いた体勢のまま口を開けて心の中で叫喚してから、諦めず肩を小突いた。

「うんっ！」

まーちゃんは不機嫌に喉を鳴らして、肩についた軽い違和感を払いのけるために、カメラを片手に持って、空いた片方で肩をはいた。そうしてまた、気にせずカメラを構えてシャッターを連打した。

「……」

この集中力、恐ろしい子だ。と、感心の息を吐いた。

トトの方も「みななん可愛い」と、珍しい光景に目を奪われていて、後ろに私がいるという気配を感知できないようだ。

私は一度間を開けてから、驚かせるために低い声を使って耳打ちしようとして腰を折ってまーちゃんの耳元に近づいた。

その時、かかとも浮かせてしまい重心が前に傾いた。

「げっ！」

勢い余ってしまった私は無意識的にコケまいと支えを捜す。慌てて広がった両手がまーちゃんとトトの背中を捕らえた。何の前触れもなく無防備な背中を押された二人は、当たり前のように私の倒れようとする方向に向かって身体のバランスを失う。

「わっ！」

「でえっ！」

ドサツ！と私を頂上とした小さなピラミッドを作ったのぞき見三人は、豪快に前から倒れて、曲がり角から身体の半分をさらけ出した。

「いったー」

私は衝撃を吸収する二つのクッションの上で、痛がるように片目をつぶりながら言った。

「……」

まーちゃんはカメラを死守したのか、両手を上げてシヤチホコの出来損ないな格好をしていた。顔面を思い切り床に強打しているのが分かる。

「うづうづ痛い」

トトは受け身を出来ていたようで、両肘を床について身体を起こして私の方を向いた。

「あれ〜？ ……さつちー？」

倒されたのに何ともゆったりとした反応を見せたトトに、私は罪悪感で胸が押し潰されそうになった。

「はやく、どけえい！」

私のこの健気な胸中など知ったことかと、まーちゃんが勢いよく体を起こした。

「わわっ」

クツシヨンのちょうど真ん中にいた私は、片方が浮いたせいでゴロゴロと横に転がり、トトの横に落ちた。何とも綺麗に川の字が作られた。

「さつちー何してんのこんなところで！ 私の至福で濃縮されたみなん女の子モードタイムを邪魔するなんて！ 許さん許すまじ！」

まーちゃんはカメラを私に突き付けつつ、空いている片手で鼻を気にしながら声を押し殺すことなく叫んだ。

「ごっごめー」

私が申し訳ない表情で反省するのと同時に、

ゴキツバキツ

と、指の骨を鳴らしたような硬い音が耳をつんざいた。

ヒクツとまーちゃんの片頬が嫌に持ち上がり、プルプルと小動物のように身体が震え出した。そして、震えながら前をキリキリと向いた。

「あっ」

その意味を理解して、同じように前を向いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721s/>

クリア

2011年9月30日03時20分発行